
その女、小悪魔につき　。

九曜

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その女、小悪魔につき。

【Zコード】

N7930Q

【作者名】

九曜

【あらすじ】

この学校で彼女の名を知らない生徒はいない。大人っぽく、美人で、いつも微笑みを絶やさない完璧人間。勿論、僕はそんな高嶺の花に興味はない。ただ彼女とその周囲を観察して楽しむだけ。

でも、それは一本の電話からはじまった。平和と退屈と本を愛する彼と、天使の微笑みで彼に言い寄る彼女の、鬼ごっこのようなラブコメディ。

第1話

階段状になつた大教室の中、空いた席に僕らは固まつて陣取り、先生がくるまで無駄話を続ける。

「お前ね、友達と一緒にいるときくらい本読むのやめたら?」

「ちゃんと話には参加してるさ」

僕こと藤間真ふじま・しんは、読んでいる本から顔も上げずに答えた。

「それに丁度おもしろいところなんだ。今日中に読んでしまいたい」

「あいかわらず活字中毒だねえ」

友人はため息混じりにそう零す。

本好きは否定しないが、僕としてはそこまで中毒ではないつもりなのだが そう思いながらページをめくる。

と、

「見ろよ。きたぞ」

友人のひとりが話の流れを切り、ひかえめなボリュームの声で皆に告げた。

別に僕は周りを無視して本に没頭したいわけでもないので、見ろと言われば見る。顔を上げれば、教室中央の扉から女子生徒のグループが入ってきたところだった。

(そうか。この授業は、あの人がいたんだったな)

注目すべきは、その中心にいる人物。

長い黒髪を揺らして歩く彼女の名は、槇坂涼まきざか・りょう。学年は僕よりひとつ上の3年生だが、ブレザーの制服を脱いで私服を着れば大学のほうに紛れ込んでも違和感がないくらい大人っぽい。そして、何よりも美人であった。

ここ、明慧学院大学附属高校は単位制が導入されていて、生徒がそれぞれ前期と後期のはじめに履修する授業を好きに選ぶことができる。なので、科目によってはこれからはじまる授業のように、別の学年でも一緒に受けたりすることもある。

そして、槇坂涼が受ける授業は、決まって大教室になるのだとう。なぜなら、彼女担当で同じ授業を希望する生徒が、性別を問わず、学年も問わず、腐るほどいるからだ。おかげで各学期の最初には、彼女がどの科目を希望しているのかを知ろうと皆躍起になり、嘘、本当、ダミー含めていろんな情報が飛び交う。直筆の履修届けの「Pマーク」となると、一ヶ月で取り引きされるとか何とか。……ご苦労なことだ。

「今日も素敵だなあ、槇坂さん」

「そうだね」

僕は友人の夢見心地の感想に、テキトーに相槌を打つ。
気がつけば教室内の喧騒のトーンが落ちていた。皆、僕たちと同じようにそれまでのおしゃべりをやめ、そちらに注目して何ごとかを囁き合っているのだろう。

この教室は前半分が平面で、後ろ半分が階段状になっている。真ん中の扉から入ってきた槇坂先輩は教室の中央を横断する広い通路を歩くことになり、さながらファッショショーンショーのモデルのように視線を集めていた。後ろ寄りに座っている僕も、数段下を歩く彼女を目で追っている。

「相変わらず無関心丸出しの返事だな。ああいつお姉様とつき合いたいと思わないわけ？」

「思わないね。聞いた話、勉強もできるんだろ？ そんな完璧人間とつき合っても大変なだけさ。それに僕たちみたいな年下を相手にすると思うか？」

少なくとも女の子を見て騒いでいるような子どもなど相手にしないだろう。すでに大学生とつき合ってるなんて噂もあるし。「確かにまさそうだな」

「だろ？ よつて、僕はあの人に興味はないね」

そう言い切つて、再び本に目を落とす。

と、そのときだった。

槇坂先輩がこちらを見た気がした。誰も気づかない、向けられた

僕にしかわからない、目だけを動かした視線。僕は思わず、一度は伏せた顔をまた上げる。だが、そのときにはもう彼女はこちらを見てはいなかつた。いや、もとより本当に『気がした』だけだつたのかもしれない。

槙坂先輩はすでに僕と最接近する座標を過ぎ、遠ざかっていく運動に入つていた。

「……」

僕はその背中を黙つて見送る。

やがて彼女を含めたグループが空いた席に座ると、もつと関係を深めたい男どもが『コーアイサツ』に群がりはじめた。……熱心なものだな。

僕はしばらく遠目からその様子を眺めていた。

さて、そんな起きたか起こらなかつたかもわからないような出来事も忘れた数日後のこと。

机の上に置いた携帯電話が振動し、低い音を鳴らした。

本を読むのをやめ、それを手に取る。サブディスプレイを見れば、090ではじまる知らない番号が表示されていた。僕のアドレス帳にはない番号。よつて送信者の名前もなし。誰かが僕の番号を勝手におしえただろうか。

僕は無慈悲にH-L-ROボタンを押して、静かになつた端末を机の上に戻した。

「出なくていいのかよ？」

ここは小教室。普通の高校のように机が40ほど並べられていて、並んで座つた友人が言う。

「知らない番号だったからね。3回かかってきたら出てやるぞ」

「三顧の礼かよ」

そんなにいいものじゃない。単に誰からかかってきたかわからぬ電話に出たくないだけ。そう言おうとしたが、ちょうど先生が入ってきて、僕たちの会話は中断を余儀なくされた。

「次の授業は、と……」

見なくても覚えているのだが、念のためロッカーの扉の裏に貼りつけた時間割り表を確認する。

3102教室。

講義棟3の1階、2号室。

大教室、つまり次は槇坂先輩のいる授業か。例の如く騒がしいのだろうな。

平和と退屈と本を愛する僕は、ため息をひとつ。それからテキストとノートを取り出し、ロッカーに鍵をかけてから目的の場所へと向かった。

教室に入ると、すでに槇坂先輩がきていることはひと目でわかつた。

前のほうの一角で人だかりができる。いつものようにゴアイサツしたい人たちが群がっているのだろう。本人の姿は見えないがあの人垣の向こうに槇坂先輩がいるに違いない。聞いたところによると、そんな状況でも彼女は微笑みを絶やさず、誰とでも話をしてくれるのだという。

僕はそれを横目で見ながら逆方向、すなわち教室の後ろへ足を向ける。

歩幅の合わない階段を数段上がつて、4列目の通路側に座った。この授業は一緒に受ける知り合いがあらず、遠慮なく本が読める。そう思ってテキストとともに持ってきた文庫本を開こうとしたとき、例の人だかりに動きがあった。

中から槇坂先輩が出てくる。申し訳なさそうに皆に謝りながら輪を抜け、向かう先は　　、
(こっちにくる、のか……?)

まさか。

だが、予想通り、且つ、思いもよらないことに、彼女は僕のもとへとやってきた。先輩が僕のそばに立った瞬間、教室内が静まり返

る。

「ここにちはよ。藤間真くんよね？」

発する言葉も見つからず、ただ見上げるだけの僕に、槙坂先輩は大人っぽく微笑みながら問うた。落ち着いた感じの声だ。

「……」

警戒。

なぜあの槙坂涼が？

「違った？ できれば何か言つてほしのだけど」

「あ、ああ……」

僕はようやく我に返った。

「僕に何か用でしようか」

だがしかし、槙坂先輩はその質問には答えない。

「あなた、意外と用心深いのね」

「……」

警戒心が顔に出たのだろうか、代わりにそんなことを言われてしまう。

と、そこで教室内にチャイムの音が鳴り響いた。休み時間終了。

「残念、時間切れだわ。じゃあ、またね」

そうして彼女はくるりと踵を返し、優雅に去つていった。

これが槙坂涼と僕の、ファーストコンタクト。さっぱりわけがわからなかつた。

なお、この後の授業は四方八方から視線を感じる、非常に居心地の悪いものだったことをつけ加えておく。

翌日、

「ケータイがない……」

そう気がついたのは、3限目が終わつた直後のことだった。

「どうした？」

スラックスのポケットを探りまくっている僕を見て、友人が聞いてくる。彼はすでにテキスト類をまとめていた。これから昼休み、早く食堂に行きたいのだろう。

「いや、ケータイがないんだ」

「失くしたのか？」

「みたいだ」

家から持つて出たのは確かだ。その記憶はある。だが、どの時点まであって、いつからなかつたか、その境が定かではない。

「まずいな……」

つぶやく。

多機能すぎて半分も使いこなせていない機能の中には、金の代わりになるようなものもある。まずは学務課に行つてみるか。落としものとして届けられているかもしれない。

そう方針を決めたとき、

『2年の藤間真さん。お伝えしたいことがありますので、学務課までお越しください。繰り返します
』
校内放送だった。

その丁寧、且つ、事務的な口調は、先生のものではなく、学校事務の人なのだろう。お伝えしたことと一つのが方便なのはすぐわかった。どうやら僕の携帯電話は学務課が預かっているらしい。「ちょっと行ってくる」

友人に断り、一路、学務課へと向かう。

予想通り、行った先では落としものを預かっていることを告げられた。学生証で本人確認をし、携帯電話を受け取る。

さすがに電源を入れ、端末をチェック。特におかしな点はないし、怪しい通話記録もないようだ。後は財布としての機能だが、学校で落として昼には返ってきたのだ。使われている心配はないと見ていいだろう。

ほつと安堵した瞬間、着信メロディが鳴り、かなりどきつとさせられた。誰だ、こんなタイミングで。心の中でお門違いの文句

を言いながらサブティースプレイを見ると、そこに元気があった。

槇坂涼

「！？」

その名前を見て、心臓が止まるかと思った。

なぜ？

なぜ彼女のアドレスがメモリィに登録されている？ そんなはずはない。質の悪い冗談だ。そう思いたいが、しかし、事実として液晶はその文字列を映し出している。

「……もしもし」

通話ボタンを押し、出る。

『ああ、よかつた。今度はちゃんと出てくれたのね』

「……」

今度は？

『それにさつき放送が流れただばかりで、まだ取りにいってないかもと心配だったの』

すぐに僕の頭の中で話がつながった。

「……聞きたいことがあるのですが」

『そう、丁度いいわ。今からお昼よね？ 学食で待つてて。わたしもすぐにいくわ』

何から何までとんでもないことを言っている槇坂先輩の声は、とても楽しげな調子に聞こえた。いつたい今、彼女はどんな顔をしているのだろう。いつも絶やさない、あの大人っぽい微笑を浮かべているのだろうか。

『あ、そうそう』

と、思い出したよつこ。

『ひとつプレゼントがあるの』

「プレゼント？」

『ええ。よかつたらピクチャーフォルダを見てみて
そう言つだけ言って通話は切れた。

おかまいなしに沈黙した端末をしばらく呆然と見つめた後、僕は
言われた通りピクチャーフォルダを開いた。

「ああ、こういう顔か……」

フォルダの中には今日作成されたばかりのファイルがひとつ。力
メラ機能を使った自分撮り写真だ。

フレームの中ではあの榎坂涼が、いたずらっぽい笑みを浮かべて
いた。

きつとそれはまだ誰も知らない顔に違いない。彼女がこんな表情
もするのだと、いったい誰が想像するだろうか。

「まいつたな……」

知らず僕はつぶやいていた。

（あの人に興味なんてなかつたはずなのにな）
（そのはずなのに。）

「興味が出てきてしまったじゃないか」

第2話

槇坂涼に指示された通り学生食堂に行く。尤も、もとより昼食を食べに行くつもりではあったが。

食堂に入るとすぐのところに、自動販売機が4、5機並んでいて、僕はそれを見てある事件のことと思い出した。

それは去年、夏も終わって涼しくなりはじめた頃のこと。ある日、自販機全機に『故障中』の貼り紙が貼られていたのだ。皆、文句を言いながらその前を通り過ぎていた。ところが、だ。自販機はどれも故障などしていなくて、僕が「これぜんぶ使えるみたいだけど?」と言つと、皆ようやくその事実に気がついたのだった。一気に自販機に群がる光景は、今でもはつきり覚えている。……にしても、ひどいいたずらをする奴もいたものだ。

さて、食堂を見回すと、まだ槇坂先輩はきていないようだった。その人がいるとすぐわかるし、電話で言っていた「わたしもすぐにいくわ」という台詞は多少遅れるという意味合いを含んでいよいも思える。

仕方ないので、僕は先にランチを買つてぐることにした。
迷ったときの日替わりランチ。

考えなくてもメニューのほうで勝手に変わってくれるし、少ないながらも選択肢がある。毎日の昼食がマンネリ気味になってきたときに便利だ。ランチコーナーで、ライスとサラダ、本日のメインディッシュから一品、それにスープとトレイに乗せて、テーブルへと向かう。

「おーい、藤間ー」

手を上げて僕の名前を呼ぶのは、さつき別れたばかりの友人だ。違う授業を受けていた別の友人と合流して、4人ほどの集団になっている。

「ケータイ見つかった?」

そばまでいくと、まずそう訊かれた。気にしてくれていたらしい。

「ああ、学務に届けられてたよ」

「そりやよかつた」

まったくだ。問題はあんなところに届けられることになつた経緯のほうだが。

「で、なに突つ立つてんの？ 座れよ」

友人は僕に促す。いつも一緒に食べているから、僕がいつまでも立つたままにいるのが不思議なのだろう。

「いや、今日はちょっと人と約束が……」

と、言ったところで食堂の空気が変わった。

出入り口は今の僕の向きからは背後に位置する。だが、振り返らなくて、何が起きたかはわかる。槇坂涼が入ってきたに違いない。彼女が現れるとどうしても目がいってしまうし、皆その動向が気になるのだ。

振り返れば、案の定。

そして、今日は珍しくひとりだった。……まあ、当然といえば当然か。槇坂先輩はすぐに僕を見つけ、真っ直ぐにこちらにやってきた。

「改めてここにちは、藤間くん」

「どーも」

例のいたずらっぽい笑みはどこへやら、年上らしい穏やかな微笑を見せる彼女。対する僕は、多少の警戒心があるせいか、ぶっきら棒。

先輩は僕と友人たちを交互に見た。

「お友達？」

「の類似品だね」

せつかくそんな友達甲斐のないことを言つてやつたのに、当の本人大きは槇坂涼がすぐ近くにいることで、それどころではないらしい。

「ちよ、藤間。お前、約束つてまさか……」

「ああ、そういうことらしいな」

尤も、こうなるに至る過程で、僕の意志がほとんど介在していいがな。

不意に友人が勢いよく立ち上がった。

「よ、よかつたら俺も『一緒にさせてもらえませんか。俺、藤間君と親友です』

誰が親友だ。あと藤間君言うな気持ち悪い。

「ごめんなさい、今日は彼と大事な話があるの。遠慮してもらえると嬉しいわ」

だが、槙坂先輩は例の微笑でもつてやわらかくそれを断る。しかも、さりげなく周りにも聞こえるボリュームで発音して、俺も俺も待ち構えていた連中まで牽制してみせた。……なるほど。この手合いのあしらい方はしつかり心得ているらしい。

「は、はい。喜んで『遠慮します！』

何語だ、それは。

「ありがとう。……じゃあ、藤間くん。あっちのあいてる席にいきましょう?」「…」

そう言つて彼女は歩き出す。

「おい、藤間。あとでどんなこと話したかおしえるよ」「…」

後に続く僕は友人のその言葉を背中で聞いたが、あえて無視することにした。

席を移る間、僕らはずっと周りから見られていた。しかし、それは好奇や羨望の視線とは違つて、呆然と見送る種類のものだった。なぜ槙坂涼と僕の組み合わせなのか、まったく理解できないのだろう。無論、僕だって理解できない。

槙坂先輩はこういうことには慣れているのか、どんな視線であれ気にした様子はない。やれやれ、僕はできることなら騒ぎの傍観者でいたいのだが。

学食の最奥、壁際のテーブルに向かい合つて座る。

なかなか不思議な感覚だつた。あの槙坂涼が田の前にいるのだ。
週に4つほど同じ授業を受け、よく遠田にその姿を田にしていた
いや、それどころかどこにいても田立つ、そんな美貌の彼女が、
どうこうわけか僕と一緒に昼食をとろうとしている。なんともおか
しな話だ。

しかし、槙坂先輩はこちらの心中など知る由もなく、さつきまで
肩に提げていたトートバッグから小さなランチボックスを取り出した。
一段重ねにはなつていて、本当に小さなランチボックスで、今
僕が食べようとしているランチの半分の量もないのではないだろう
か。それで足りるのかと心配になるが、きっと彼女にとつての適量
がこれなのだろう。もしかしたらこういつた不斷の努力が、何かの
結果として結実しているのかもしれないが。

ランチボックスに続いて、プラスチック製のケースが出てくる。
フタを開ければそこには、短い箸とスプーン、フォークが並んで入
つていた。彼女はそこから箸だけを手に取る。

「藤間くんはいつも学食なのね」

「まあ」

「わたしも何度も食べたことがあるけど、口に合わなかつたわ」

槙坂先輩はお気に召さなかつた味を思い出したのか、眉根を寄せ
た。それから箸で自分の弁当からワインナーを掴んで口に運び、満
足げに小さく頷いた。弁当は自作なのだろうか。

「学食のメニューなんて所詮は安さと量が売りだ。僕だってそこまで美味しいと思ってるわけじゃない」

つて、なんで普通の話をしているのだろうな。こんな日常会話が
したかつたわけでもないのに。

「いくつか聞きたいことがある」

僕はサラダを二、三口食べて、多少空腹感があせまつたといひで
切り出した。

「どうぞ」

「僕のケータイについて」

「ええ」

なぜか楽しげに微笑む榎坂先輩。

間近で見る彼女は、本当に整った容姿をしていて、これがひとつしか年の変わらない先輩なのかと思うほど大人っぽかった。

「あれはあなたが盗つた」

「もちろん」

出来のよい弟を見る姉のよう、嬉しそうにうなづく。

「少し押借して、わたしのアドレスを登録してから落としものとして学務課に届けたの。ちょっとしたいたずらよ。実害はないに等しいわ」

そして、己の窃盗罪について、悪びれる素振りもない。

実害はない？ 携帯電話を失くしたときの僕の不安や、限りある容量への圧迫は？ と言いたいところだったが、まあ、田ぐじらを立てるほどでもないか。

「なぜそんなことを？」

「この場をセッティングするためよ」

「だつたら普通に話しかければいい」

あんな手の込んだことをする理由がわからない。

「何ともインパクトが大事だと思うの。残念ながら“突然の電話”作戦は不発だつたけど、でも、おかげでもつと面白いことを思いつくことができたわ」

今さら昨日の未登録の番号が榎坂先輩だとわかつたところで驚きはしない。とっくに気づいていたことで、単に確認が取れたに過ぎない。

「インパクト、ね。僕には回りくどいことをしたようにしか見えないな」

「それも事をスムーズに進めるための布石。得たいものを得るために下準備よ。事実、藤間くんは電話に出てくれて、ここにもきてくれた。違う？」

「……まあ」

確かに、思いがけず愉快なことをされて、槇坂涼に興味を持つてしまつたことは否定できない。それを素直に認めるのは癪だし、本には絶対に言いたくないが。

「にしても、よく僕のケータイを盗るなんて芸当ができたものだ。あなたは何をやっても人目を引くのに」

「ええ、でも、目立たないように行動するコツも覚えたわ。これくらいならいくらでもできるわよ」

「……」

納得だ。

「じゃあ、次の質問。……なぜ僕だった？なぜ僕に声をかけようと思った？」

「そうね」

そう言つて彼女は考えるポーズを見せるが、理由はすでに明確になつてゐるはずだ。考へることがあるとすれば、それを出力するための言葉だらう。

「わたしと似ているから、でしょうね」

「似てる？どこが？」

「ふたりとも名前に『真』の字があるわ」

「そうして出てきたのがそれだった。

「なるほど。僕の中學のときの友達に槇真一っていうのがいるから、今度紹介しよう」

「ええ、ぜひお願ひするわ」

僕の嫌味混じりの返答も、彼女は笑顔で受け流す。なかなかの難敵だ。

そこで会話は途切れ、しばらくの間、僕らは言葉もなく食事を進めた。安っぽいチキンソテーを頬張りながら考へる。果たして本当に名前の字に共通点があるということだけで声をかけてきたのだろうか。まさかな。

と、

「あなたつていつも退屈そつ」

不意に槇坂先輩が言つ。

「……僕は平和と退屈と本を愛する人間でね。 そう見えたとしても、それは僕が望んでやつていることだ」

「いいえ、そんなことはないわ。退屈な毎日を楽しんでいるように見えて、その実、面白いことを探しているの」

「……」

「そして、面白くするためなら何だつてする。 できるだけ実害は少なく、自分は傍観者でいられるかたちで」

「それじゃ、まるで僕が愉快犯みたいだ
「去年の秋だつたかしら」

先輩は僕の言葉の終わりに発音をかぶせてくる。

「ここに入り口の自販機に、壊れてもないのに『故障中』の貼り紙が貼られていたのは。

面白いいたずらをする子もいたものね

「……」

いたずらをする子。

子。

犯人を指して『子』と、彼女は言つた。 ニュアンス的には年下を想定しているように聞こえる。

「そうそう。わたしがどの授業をどううとしているかの情報に、嘘が混じりはじめたのも去年からだったわ」
去年。

僕がこの明慧大附属に入学した年。

「……何が言いたい?」

「さあ?」

例の如く、笑つて流す。

「……」「

これは参った。

何が参ったかといふと、僕が思つてゐる以上に僕のことを知つて
いるふうであることもそつたが、しかし、それより何より
「ねえ」

と呼びかけられ、僕は考えるのを一旦やめる。

「わたしとつき合つてみる気はない?」

彼女は真っ直ぐにこちらを見て、そんなことを言つのだつた。
警戒する。

昨日まで、いや、2時間前までの僕なら「はい」と言つていたかも
しれない。向けられる微笑も、裏表のない澄んだものに映つただ
ろう。だが、今はもう天使の表情をした悪魔のそれだつた。

「ないね」

よつて、それが僕の返事。

「振られちゃつたわね。生まれて初めて「
にも拘らず、槙坂先輩はくすくすと笑つ。

彼女ほどになると、告白なんていいくらでもされるだらうし、自分
からしても断る男なんていないのだろう。そんな百戦錬磨にとつて
は、一度の敗北など気にするほどのものではないといふことか。

「残念ね。藤間くんと一緒に、毎日が面白くなると思つたのに
「何を期待してゐるのか知らないが、あいにく僕はどうにでもいる冴
えない高校生でね」

そう、問題はそれだ。

自販機故障中騒動を『面白いいたずら』と言つてしまつ精神性と、
目的のためなら人の携帯電話を無断拝借だつてしまつ感覺。常
に面白いことを求め、そのためにはなんでもする。ああ、そう

だ。確かに僕らは似ている。彼女だって最初からそう言っていた。

だからこそ、距離をおくべきだ。

「さて、話は終わりみたいだし、僕はこれで
これ以上は僕を知られる。

「待つて」

だがしかし、槙坂先輩は、トレイを持つて席を立ちかけた僕を呼び止めた。

「何か？」

「まだわたしが食べ終わってないわ。置いてけぼりにされても寂しいじゃない？」

見れば小さなランチボックスには、まだ少し中身が残っていた。
確かに彼女ひとりを残してしまったのもひどい話ではある。仕
方なく僕は、浮かした腰をもう一度下ろした。

槙坂先輩は先の話にはもう触れよとはせず、いつもの大人っぽ
い笑みを浮かべながら残りを食べている。振られた後どころか、仲
のいい友達と食べているみたいな表情だ。僕は頬杖を突き、何を考
えるわけでもなく、ただ彼女が食べ終わるのを待つた。

やがて残すところ例のワインナーひとつとなり 、

「藤間くん」

不意に名前を呼ばれ、先輩へと顔を向ける。
と、

「はい」

「むぐっ」

彼女は箸で掴んだそのワインナーを、僕の口に突っ込んだ。一瞬、
息が詰まりかかる。

何をするんだ そう言おうとした。

「お味はいかが？」

しかし、口の中に入っているせいですぐには発音できず、
その隙に先に尋ねられてしまった。まるで得意料理を出したときの、
自信ありげな顔だ。

「……まあ」

僕は不貞腐れたみたいにして、渋々頷いた。
多少腹が立つたこともあって、肯定はやや消極的に。完全に否定
しなかつたのは、実際、シンプルながらスパイシーな味つけで美味
しかつたからだ。

「そう、よかつたわ。今日はいつも以上にいい出来だと思つていた
の」

なるほど。本当に自作の弁当だったのか。

「藤間くんはわたしの欲しい返事をくれるわ」

「どこが。ついさっき拒絕したばかりだ」

「ええ、それについてはむしろ望む以上のものだったわね
さらりと言ひ。

「だつて、あなたの首を縦に振らせる楽しみができたじゃない？」

「……」

いや、本当に参つた。

確かに僕たちは似ている。でも、決定的に違う点があつた。

僕は平和と退屈と本を愛している。そこに嘘はない。ただ、退屈
な日常の中にはパイズ程度に面白いことがあればいいと思っていた。
対して彼女 横坂涼は、もっと積極的に退屈から抜け出しがつ
ているのだ。

「これから毎日が面白くなりそうね」

そう言つて彼女は、天使の表情で微笑んだ。

第3話

教室に槇坂涼が入つてくるとすぐにわかる。その瞬間、空気が変わるからだ。

皆、今か今かと彼女の登場を待ちわび、彼女が現れると友達同士で何ごとかを囁き合つ。「やっぱり槇坂先輩、いいなあ」「今日もきれいだ」などなど。実際、大人っぽい整つた容姿で、長い艶やかな黒髪を揺らす彼女は、注目を浴びるのに相応しい生徒だと言える。今日も当然そんな感じで、僕は槇坂涼を見、そして、彼女を見た生徒たちの反応を見て楽しむ。

大教室だとたいてい彼女は、前から4分の1くらいの列の、黒板正面から左右どちらかに少しづれた位置に座る。その辺りが彼女にとって授業を受けやすい座標なのだろう。

そのはずなのだが。

今日は入つてくるなり僕を見つけると、一緒にきた友達と別れ、こちらに歩み寄ってきた。こっちくんなと思った僕の願いも虚しく、彼女は階段状になつた席の通路側に座る僕の横に立つた。

「ここにちは、藤間くん
「どーも」

「隣、空いてる?」

「……」

空いていることは空いている。だが、それは友達とお互いのパーソナルスペースを侵害しないためにひとつ空けているのであって、本来の意味での空席ではない。そして、教室が混んでくれば、そこも詰めて座ることになる。

「もちろんです」「どーぞどーぞ。こんなところですが

どうやつて追い返そうかと思つていたら、友人たちが勝手に返事をしてしまつた。特に槇坂先輩が横に座ることになる浮田は全力でウェルカムだ。

「そう。よかつたわ」

彼女は僕の後ろを通り、隣の席に腰を下ろした。

……近い。

先日、向かい合つて昼食を食べたが、それ以上だ。肩と肩、肘と肘が当たりそうだ。

「高くていい眺め。でも黒板が遠いわ」

「ああ、黒板が見えないなら前へ行つたほうがいい。せひそりするべきだ」

「大丈夫よ。目はいいほうだもの」

思わず舌打ちしそうになつた。

「ところで、今日は何を読んでるの？」

彼女の興味が、今度は僕が読んでいる本へと向かう。

「ディクサン・カー、『帽子収集狂事件』」

「乱歩が選んだ海外ミステリ10作のうちのひとつね」

「知つていたのか。意外に雑学持ちだな。

「先輩はある作品の中でどれがいいと思つ?」

「そうね。『ナインティラーズ』かしら。ドロシー・L・セイヤーズの」

「いちばん新しい作品だな。僕は逆に最も古い、ガストン・ルルーの『黄色い部屋の謎』だ」

単純なのに盲点を見事についた、あの人間消失トリックには感動したものだ。100年たつた今でも、あのトリックを超えるものはないだろう。

「というわけで 残念。僕らは相性が悪いようだ。……どうぞお引き取りを」

直後、槇坂先輩がすっと立ち上がつた。

まさかこれで本当に引き下がるつもりなのか ちょっと驚いて

彼女を見上げると、ずいつと斜め上方から顔を寄せてきた。鼻と鼻がつきそつなくらいの至近距離。

「そうね。今日はここまでにしておきましょ。面白いことほりくに楽しinまいともつたいないわ。……またね」

そう僕にだけ聞こえるボリュームで言い 微笑む。

それから彼女は持ってきたテキスト類をまとめ、友達のところへ戻つていった。

「やれやれ……ぐえつ」

「お前お前お前一つ。なんで追い返してんだよつ！？」

浮田だつた。血の涙を流しながら首を絞められても困る。こいつだつて都合があるんだ。

「いいよなあ、お前。あんな間近で槇坂先輩に笑いかけられて」

「……」

バカめ。あれはファウストに契約を迫るメフィストの笑顔だ。

授業が終わり、教室移動。

明慧学院大学附属高校には4つの講義棟があり、その講義棟と講義棟をつなぐ道を歩いていたときだつた。

「真つてば真つてば真つてば」

後ろからきたやつに腕を絡め取られ、そのまま道を外れて芝生のほうへと引っ張り込まれた。

見れば僕の腕を取つたのは、ショートの髪をヘアピンで止め、おでこも広く露になつた小柄な小動物系の少女

「なんだ、『こえだ』か」

名前を三枝さんき小枝こえだという。普通なら小枝と書いて『さえ』と読むと

こうを、『さえだ』と読む辺りが僕は気に入っている。生意氣にも僕の名前を呼び捨てにしているが、まだ1年生、後輩である。

僕は一緒にいた友達から離され、こえだと芝生を歩く。

「見てたよ見てたよ」

「何をさ?」

「あの横坂さんと仲よくなっちゃない」

せんにじのことか

「もう言えばさうその授業、こえだも一緒にたな」

一 覚えとけよお

い。
頬を腫らませながら
僕の腮脛のあたりを「一キッケ
わ」と痛

もちろん、どの授業に誰が一緒に覚えているか、彼女のこういう反応が見たくて、ついついからかってしまうのだ。

「で、どうしたの？」

「別に。たいしたことはないわ」

れがれども、とにかく、とてもないのだから

「御用」の文字

「アーティストの世界」

卷之二

۱۰۷

とこえたかたなならぬ空氣を感し取つたのか
おそるおそる口を開いた。

「マ」

「本気かどうかは本人に聞いてくれ」

۵

「大きな声出すなよ。うるさいやつだな」

「うじめん」

周囲の視線がこちらに集まり、しゅんとなる。基本的には見た目通り二つ切れる。

通にはハ重物なのが

「部分的に歯んでると悪い」
もじかじで 美沙希さんたまむこ

こえだの口から出た美沙希さん

古河美沙希（こが・みさき）

中学時代からの先輩で、この学校では槇坂涼とは別の、知る人ぞ知る系の有名人である。ひと言で言うと情報屋、もしくは、便利屋だ。

「でも、基本的には、これは僕と槇坂先輩の話だ」

「なんだ。美沙希さんがけしかけたのかと思った」

「あの人はこんな遊び方はしないよ」

「ていうか、美沙希先輩はこうじうのはもう卒業している。で、どうするの？」

「で、こえだ。」

「何が？」

「だーかーら。槇坂さんから熱烈なアプローチを受けてるんでしょ？ 真はどうするのってこと」

「ああ、そういうこととか。決まってるさ。あっぱりお断りだ」

僕が好きなのは騒ぎの中心にいることではなくて、騒ぎを端から

見ることだから ともつけ加える。

「うわ。こんな大事なこと、そんな基準で決めちゃう？ なんか違わないかい？ それにさ、あの槇坂さんと関わってる時点でのもう渦中の人だと思つけどなあ」

「……」

おそろしい話だ。

「おつと。あたし、二つちだから。……じゃあね、真」

「ああ」

片手を上げて応じてやるが、すでに走り出していたこえだは、こちらを振り返りもしなかった。

「やれやれ」

僕は深いため息を吐く。こえだの騒々しさと、彼女の指摘に。

渦中の人、ね。

面倒な話だ。

そうしてまた別の日、彼女はやってきた。

「隣、座つていい？」

「僕はふたつも占拠するつもりはないさ。そこは誰の席でもないから、好きに座るといい」

無礼にも本から顔も上げずに答えたのだが、槇坂先輩は気にした様子もなく隣の席に座った。

「今日は何を読んでるの？」

「夢野久作『ドグラ・マグラ』」

「日本が誇るアンチ・ミステリね」

よく知っている。一度彼女と真面目にこの手の議論をしてみたいものだ。なかなか面白いものになりそうな気がする。

「こういうものがミステリの本場イギリスではなく、日本やイタリアで発生したのは興味深いところだ。……ところで先輩は、アンチ・ミステリを数えるときは三大？ それとも四大？」

「そうね。わたしは四大とするべきだと思つわ」

「僕は『三大奇書』だ。竹本健治の『匣の中の失楽』は、中井英夫の『虚無への供物』の模倣や。……というわけで、やっぱり僕らは相性が悪いようだ。どうぞ、お帰りはあちら」

僕がそう言ひると、槇坂先輩はすっと立ち上がった。

「仕方ないわね。またくるわ」

ひとこと言い残し、席を離れる。

本日も素直に帰ってくれた。

勿論、この後、僕は周りに座る友人たちにボロカスにされたが。

さて、その授業があと10分ほどで終わって、そして、終われば待ちに待つた昼休み というとき。

スラックスのポケットの中で携帯電話が振動し、着信を伝えてきた。メールだ。

机の下でサブディスプレイを見る。

槇坂涼

そう言えば、まだアドレス帳に残っていたんだつたな。

端末を開き、メールを開封する。

『「」の後、お昼一緒に食べない?』

じつしたものかと歎んでいると、さうていづり通送られてきた。
『授業が終わるまでに考えておく』
『猶予は10分。』

僕はこのとき初めて、授業が長引けばいいのと思つた。

早く終われと云つ多くの生徒の希望と、終わるなどいづ僕の願いを裏切り、授業はチャイムと同時に終了した。
テキストをまとめ、階段状の通路を下りる。
と、そこに槇坂先輩が待つていた。

「どう? 考えてくれた?」

「まあ、それくらいなら。……ただし、NGワードが出たら退場だ
「あら、何? NGワードって?」

彼女は首を傾げる。

「それは自分で考えてくれ。引っかかつたらアウト
「ゲームみたいで面白そう」

そう言つてどこか無邪気にも見える笑みを浮かべた。

弾む気持ちを抑えきれないのか、跳ねるような足取りで歩き出す
彼女を僕は追う。そして、そんな僕らを周囲は呆然と見送るのだった。

た。

「悪いけど席を取つておいてくれ」

学食に着くと、弁当持参の槇坂先輩に席の確保を任せ、僕は昼食を買つたま一時彼女と別れた。考えるのが面倒なので、田替わりランチのコーナーへ直行。ほとんど立ち止まることなくテキトーに皿をピックアップし、金を払つて席のほうへと向かう。

槇坂先輩がどこにいるかは、彼女が手を上げて合図をしてくれた

のすぐにわかつた。この前と同じ、壁際のテーブルだ。トレイを置いて向かいに座る。

「思ったのだけど」

さつそく切り出してきた。

「この前と今日の質問、私の答えを聞いてからなら、自分の答えをいくらでも変えられるんじゃない?」

「だろうね」

彼女は例の小さなランチボックスをまだ開けていなかつたので、僕も先に食べはじめるることはしなかつた。

「じゃあ、本当のところは?」

「『ナインティナーズ』は僕も好きだ。いちばんとは言わないけど、秀逸な作品だ。乱歩が選んだだけはある。それから僕も『四大奇書』派だ。『匣の中の失楽』は確かに『虚無への供物』の模倣かもしれないけど、中井英夫に最大の敬意を表した素晴らしいオマージュだと思つ」

「あなた、ずいぶんと天邪鬼ね」

珍しく拗ねたような先輩の口調が可笑しかつた。

僕の返事を聞いている間に横坂先輩はランチボックスを開けていて、僕は彼女と同時に食べはじめる。それに気づいて彼女は、僕に嬉しそうに大人っぽい笑みを向けてきた。

「それにしても　わたしのこと、そこまで嫌?　もしかして、もうつき合つてる子がいた?」

「今さら聞くか?　そういうのは最初に聞くべきだと思うが。……まあ、特にはないけど。そつちこそ大学生とつき合つてるんじゃないかなつたつけ?」

彼女に関しての尽きない噂の中にそういうのがあった。明慧大の医学部に彼氏がいるとか何とか。

「あら、藤間くんともあろう人がそんなのを信じたとは意外ね。根拠のない噂だわ」

そして、やや声のトーンを落とし、

「もちろん、わたしが流したのだけど」

「…？」

危うく食べていたハンバーグを喉に詰まらせるとこりだつた。

「因みに、方法は簡単。いくつかの教室の机に『槇坂涼は大学生とつき合つてる』って落書きするだけ」

「なんでまた、そんなことを……」

「面白いからに決まつてるわ」

当然のように言つ。

「すぐに広まって、わたしのところに帰つてくるの。本当なのって。わたしは『プライベートなことだから』と、答えを曖昧にする。いろんな反応が見られるわ」

彼女が言つには、尾ひれがついて大学生どろか社会人や他校の生徒に変わつてしたり、どこのこのホテルなどと具体的な場所が追加されていたりするのだそうだ。デマゴギーの実験に使えそうな事例だな。

「ひどい話だ」

「藤間くんには言われたくないわ。それに、言つておくけど、個人名が出たときはきっぱり否定してるわ。特定の誰かに迷惑はかけたくないもの」

なるほど。最低限のルールは自分の中に設けてあるわけか。まったく、本当に誰かとよく似ているな。

「というわけで、わたしはフリーよ？」ビリ～

「知つたことか

「強情ね」

槇坂先輩はため息を吐く。

「ひとつおしえてあげる。あなたにとつていいことか悪いことかわからぬけど」

それはまた微妙な情報だな。

「大きな声じゃ言えないから」

そう言って身を乗り出すで、僕も同じようにした。互いの吐息がかかりそうなほど顔を寄せ合つ。

「わたし、処女バージンなの」

「ふつ」

さすがにこれには咽て、咳き込んだ。

「やつぱり笑うのね」

「笑つてんじゃないつ」

どうやつたらやつ見えるんだ。

「そんなこと今言つことかよ」

「じゃあ、いつならいい？ ベッドに入る前？」

「……」

落ち着け。田の前にいるのは悪魔だ。そつ思え。

「やはりこれは諸刃の剣ね。わたしを征服する喜びはあるかもしないけど、あなたを満足させることはできないと言つてるようなものだも。藤間くんはどちらが好み？ 初めての女？ それとも慣れてるほうがいい？」

聞くかよ、そういうこと。

「いいのか？ そういう話題にしてワードが潜んでそうだけど？」

僕は強引に話を終わらせることにした。

「確かにやうね。……でも、いつものもいこわね、緊張感があつて」

楽しそうに笑つてから、槇坂先輩は続ける。

「じゃあ、ちょっと雑談。どうして明慧大附属に入ったの？」

「ずいぶんと普通の質問なんだな」

「お互いを知るため、かしら？」

その必要があるかはさておき、僕が話の腰を折つて話題を変えさせたのだ。答えるのが筋か。

「ここに来てさ、日本の高校には珍しい単位制だろ？ 好きな授業が取れて、それだけ多くの人間が観察できると思つたんだよ」

「あなたらしいわね」

「それと

「と、勢いで口を滑らせ やめる。

「あのね藤間くん、言いかけたことは最後まで言いましょうね」
槙坂涼が姉のような口調で注意した。

「……とある先輩を追つて、ね」

「まあ、そうだったの？ 誰なの、その先輩って？」

「それは言いかけたわけじゃないから、これ以上言つ氣はないね」
自分の迂闊さを呪う。

「ま、先輩もよく知つている人、とだけ言つとくよ」

「これはサービス。

気がつけば、トレイの上のランチはほとんど残つていなかつた。
話しているうちにけつこう食べていたようだ。

「いつの間にかずいぶんと話してたわね」

槙坂先輩も似たような感想を抱いたらしい。

「あまり気にしてなかつたけど、NGワードは何だったの？」

「特には設定してないよ」

そんな面倒なことやつてられるか。

「あら、意外に優しいのね」

「まさか。気分で退場させるつもりだっただけさ」

「意地悪」

彼女は頬を膨らませる。
だが、すぐに、

「でも、そういうところが好きよ。やっぱりわたしたち、つき合つてみるべきだわ」

だから僕はこう返す。

「ゾウー、だ。……………エウル、圓場へだれこ」

それはある日の昼休み、僕が今までに学食に入ろうとしたときだつた。

「おっし、真、ちょっとアタシと話そつか」

いつぞやのこえだ 三枝小枝みたく、腕に腕をからめてがっちりホールドしてきたのは、

「美沙希先輩」

「よつ」

かたちのいい猫目に、ざつくりしたウルフカットが男前な、古河美沙希先輩だつた。彼女は悪ガキみたいな笑みを見せる。

「話とはいつたい？」

「それは食べながらだ。アタシもハラが減つた。……おい、お前ら。こいつ借りてくれぞ」

「「どうぞッス。遠慮なくどうぞッス」」

ここまで一緒にきた浮田をはじめとする友人たちとは、口をそろえてそう言つた。もとより友達甲斐のないこともあるが、この明慧大附属で美沙希先輩に逆らおうなどと思う生徒はそうそういない。僕は連行されていく。

「なんだなんだ」「つーか、かわいそ」「何をやつたんだ」と好奇と憐憫の入り混じる視線を浴びながら、学食内を引きずられる。間、二の腕で「ああ、この人もいちおー女だつたんだな」と実感していつが、いつまでもされるがままになつてているわけにはいかない。

「先輩、こつちはまだ何も買つてないんですけど」

「ああ、そうだつたな。よし、とつとと買つてこい。席はアタシが取つといつてやる。逃げるなよ」

「わかつてますよ」

逃げるつもりもないし、その理由もない。

ようやく解放された僕は、井コーナーで手早くカツ丼（味噌汁、

漬け物付き）を買って、美沙希先輩の待つテーブルへと向かった。

先輩は売店で買ったらしいサンドイッチやパンを広げ、缶コーヒーを開けているところだった。

僕は改めて自分が買ったものを見る。 カツ丼。 そう言えば、2回ほど槇坂先輩と一緒に昼食を食べたが、どちらのときも田替わりランチだった。 丼ものやラーメンみたいな庶民的なものではなく。 案外、彼女の前では格好つけようと思つてはいるのかもしれない。

逆を言えば、美沙希先輩の前ではその必要がないということでもあるが。

「どうした？」

「いえ、別に。……それで、話とは？」

僕は先を促す。

途端、先輩の目が獲物を捉えた猫のように光った。

「聞いてるぞ。槇坂のこと」

さつそく最初のサンドイッチの封を開けながら切り出してくる。

「さすがですね。もうその話を聞きつけましたか」

「バッカ。アタシじやなくとも誰でも知ってるよ。けっこつ噂になつてる。最近よく一緒にいるつてな」

「……」

どうやら前にこえだが言つていたことが本当にになつてゐるらしい。

槇坂涼に関わった時点で渦中の人、か。

「楽しそうじゃないか」

「学校生活を面白くするのに、そこまで体張るつもりはありませんよ」

僕はカツ丼に割り箸を突き刺しながら答えた。

知つてゐくせに。

なにせこの古河美沙希という人は、僕の人生の先輩でもあるのだから。

彼女と出会ったのは、僕が中学2年のころ。

当時の僕は、世の中のすべてがくだらないものに見えて、心底退屈している嫌なガキだった。

そんなとき、ひょんなことで知り合った古河美沙希という人は言う。

「そーゆーのを中一病つづーんだよ。ついでに言つとくぞ。お前が思つてることは正しい。いいか、世の中つてのはホントに面白くないんだよ。くだらないんだよ。だつたら、自分で面白くするしかないだろうが」。

それから僕は美沙希先輩に誘われ、学校でいろんな行事の運営に携わった。体育大会やクラスマッチの実行委員、弁論大会の運営委員、などなど。僕は次第にものごとを思い通りに進める楽しみを知つていった。

そして、先輩に誘われてやつたのはそれだけではなく、それらを隠れ蓑にしてふたりでいろいろと毎日をコーディネイトしたものである。

「んで、槙坂はどうなんだ？ 本気なのか？」

「さて、どうなんでしょうね」

少なくとも楽しんではいるみたいだが。

「ていうか、何を人伝に聞いたみたいな言い方してるとんですか。そもそも槙坂先輩に僕のケータイ番号をおしえたのは先輩でしょうに」「おう。残高190円の図書カードと交換でな」

「驚きの安さだ」

僕の個人情報はそんなに格安なのか。

遡れば、槙坂涼がなぜ僕の携帯電話の番号を知っていたかという謎が出てくるのだが、なんてことはない、目の前にいるこの人に聞けばいいのだ。

古河美沙希は知る人ぞ知る情報屋だ。

「君がどこでバイトしているか」とか「××さんが毎日どの電

車に乗つてゐるか」とか、そういうつた情報を素早く提供してくれる。金銭での売買はせず、商品券や図書カードと交換で。一歩間違えたらストーカー力を生み出しそうな氣もするが、その辺りは彼女の猫目が相手を見極めるので、問題は起こつていなければ。

楳坂先輩もこの情報屋から情報を得たのだろうが、まさか僕と美沙希先輩につながりがあるとは思わなかつただろう。

「それはそうと、先輩はケータイ番号みたいな個人情報は扱つてなかつたのでは？」

「まあな。でも、あの楳坂涼がお前に興味をもつてるんだぞ。こんな面白なことが他にあるか？　どーせ真だしな、楽しいことになりそつたからおしえてやつた」

この人の情報屋としてのモットーはかなり脆いようだ。

僕のケータイ番号は当然すでに美沙希先輩も知つてゐるし、きっとその場でちやつちやとおしえてしまつたのだろう。残高190円の図書カードと引き換えに。

情報屋をはじめてこいつのは卒業したと思つていたが、人間そういうやう変わるものではないらしい。

美沙希先輩はテーブルの上の割り箸を手に取ると、それで僕の漬け物を勝手につまみ、ひょいと口の中に放り込んだ。……まあ、いいけど。きゅうり嫌いだし。

それを見ながら、

「ああいう真面目な優等生タイプは、美沙希先輩は嫌いだと思つてましたよ」

「真面目？　どうが」

先輩は鼻で笑う。

「あれは明らかにアタシらの同類だろ？　が

「……」

どうやら先輩はとつくに楳坂涼の性質を見抜いていたらしい。

曰く、「あれは自分のひと言や無言が、どれだけ回りに影響を与えているかわかつて。わかつてやつて、その反応を見て楽しんでるんだ」。

見事な観察眼だ。まさにその通り。槙坂先輩も自らそう告白していた。

「それだから同じ匂いをかぎつけて、お前に興味をもったのかもな」「たまりませんね。」口からは平和と退屈と本を愛する一介の高校生だというのに」

などと美沙希先輩に韻晦氣味に言つても意味はないか。

そこでふと思う。

「彼女が本気かどうか、その辺りの判断材料は、むしろ先輩が持つてるような気がしますね。……先輩が会つたとき、彼女、どんな様子だったんですか？」

ぜひ知りたいと切実な様子だったとか、わかれば儲けものくらいの感じだったとか。そのときの様子でだいたいわかるのではないかだろうか。

「アタシんどこにきたときか？」

んー？ と美沙希先輩は記憶の糸を手繰り、

そして、いきなり声を殺して笑い出した。口許に拳を当て、体を揺らす。

「何ですか、それ。いつたい何があつたんですか？」

「悪いが話せない。守秘義務つてやつだ」

そんなものあつたのか、なんて言つたらばつ飛ばされるだろうな。めつぽう喧嘩が強くて、すぐ手が出る人だし。

美沙希先輩はサンディッシュにパンふたつを完食し、缶コーヒーを飲み干す。

「ま、がんばんな。アタシも応援してるから」

「……」

嘘吐け、と僕は心の中で思う。

仮に本当に大抵としても、「どちらも負けるな」なんていう、ゆとり

倒しの小学校がやりそうな運動会の応援みたいなものだ。結局、この人は端で見て楽しんでいるだけなのだ。

それは翌日の昼休み、僕が今までに学食に入ろうとしたときだった。

「さ、藤間くん、少しあたしとお話ししましょつか」

いつぞやのこえだ、そして、昨日の美沙希先輩みたく、腕に腕をからめてがつちりホールドしてきたのは、

「槙坂先輩」

「こんにちは、藤間くん」

大人っぽい端整な容姿に長い黒髪が艶やかな、槙坂涼だった。彼女は、顔は笑っているけど目は笑っていない、みたいな笑みを見せる。初めて見る表情だ。果たしていきなりこんな笑い方をされるようなことを、僕はしただろうか。さっぱり覚えがない。

「僕は話などない」

「わたしはあるわ。食べながらゆっくり話しましょつか。……いつもいつも悪いのだけど、藤間くんを借りていくわね」

「どうぞツス。遠慮なくどうぞツス」

今日も今日とて一緒だった浮田をはじめとする友人一行は、槙坂先輩に微笑みかけられ、一も二もなく首を縦に振った。槙坂涼に笑顔でこう言われてダメと答えられる男はまずいないだろう。

僕は連行されていく。

浮田には「俺たちも後でお前に話がある」と言われた。悪いが僕にはない。

「なんだなんだ」「つーか、またか」「どうなつてんだ」と好奇と羨望と妬みの入り混じる視線を浴びながら学食を横切る。間、二の腕には美沙希先輩とは段違いのやわらかい感触があり、おかげで振り解くタイミングを逸したまま、気がつけばテーブルまできてしまつっていた。

「あら、藤間くん、お昼は？」

「問答無用で」このままで引きずりついたのはそっちなんだが……いや、いい……」

自分の煩惱のせいで強く文句は言えず、僕は昼食を買つべくきた道をすこすこと引き返した。

丼ものの「一ernerに田をやり、麺類「一ernerを睨む。

「……」

やめた。やはり今日も口替わりランチにしよう。どうにも槇坂先輩の前で庶民丸出しのものを食べるのに抵抗がある。100歩譲つてもカレーだらう。しかも、カツカレー。向こうは実にさわやかな弁当を食べているというのに。

ランチを買つて戻つてくる。

槇坂先輩は例の小さな一段ランチボックスを自分の前に置いていたが、まだ手もつけずに僕を待つっていた。

「で、話とは？」

「藤間くんつて意外にモテるのね」

微笑みがデフォルトみたいな彼女が、珍しく不貞腐れたような表情をしていた。手ではランチボックスの蓋を開けている。

「いきなり何のことだ？」

それと『意外に』は失礼だ。

「この前、1年の女の子と歩いてた」

僕と一緒に歩くといえば、こえだだな。

「昨日は古河さんとお昼を食べてたわ」

「……」

見てたのか。まあ、お互い昼食はこことだからな。そういうこともあるか。僕も槇坂先輩の姿はよく見ていたし。

ふたりで一緒に食べはじめ、僕はひと口田を飲み込んでから答えた。

「下級生のほうは二枝小枝。通称こえだ。この春に知り合つた、か

わいい後輩だ」

「ずいぶんと素直な言い方をするのね。かわいいだなんて」

「実際そうさ。誤解を恐れず言つなら、僕は彼女に対して一定以上の愛情を持つてる。勿論、あくまで友人の範囲を出ないが」
そして、こんなこと本人に言つつもりもない。

「……」

ジトツとした視線が僕に向けられる。

「美沙希先輩については、あなたもよく知っているのでは？ 僕のケータイの番号はあの人から教えてもらつたんだろう？」

「あら、知つてたのね」

「知らいでか」

苦笑しながら言い返す。

とは言え、まあ、知らない可能性もあるか。美沙希先輩が情報屋なのは影で有名なだけで、最後まで知らないまま卒業していく生徒も多いらしいし。

「確かに古河さんは知つてるわ。でも、わたしが知りたいのは、あなたと古河さんの関係なの。まさか何か調べてもらつてたわけではないのでしょうか？」

「その可能性はゼロじゃない」

今のところ美沙希先輩に世話になることはないだろうと思つているが、そうやって否定されるとそれを否定したくなる。

「あら、それならそれで興味があるわ。いつたい何を調べてもらつてたの？ わたしのこと？ だとしたら嬉しいわね」

「そんなことをする理由がない」

きっぱり否定する。

「わたしのことならわざわざ古河さんに調べてもう必要はないわよ。藤間くんには何でも答えるもの。経験なし。男の子とつき合つたこともなし。安心して、過去はきれいなものよ。後は、そうね、スリーサイズは最後に測つたときが

「いや、言わなくていい」

僕は掌を向け、制する。

あまりの大らかさに軽い頭痛を覚えた。

「つて、ちょっと待て」

今、何か変なことを言わなかつたか。

「男とつき合つたことがないって！？」

「ええ、さうよ。いわゆる彼氏イナイ歴17年、といづやつね。仕方ないと思わない？ 今までそういう男の子に出会わなかつたのだから」

「この前、僕に言わなかつたか、生まれて初めて振られたって」「彼女が僕につき合えと迫り、僕がそれを断り それでも槇坂涼は笑つていた。初めて振られた、と。

「言つたわ。今まで男の子とつき合つたことがなくて、生まれて初めて交際を申し込んだら、見事に振られた。 矛盾はないわ」

槇坂先輩はさらりと言つてのける。

「……わかつた。それについてはもう触れないでおく」

何で最初に選んだのがよりもよつて僕なんだ、という疑問とも文句ともつかないものはあるが。

「美沙希先輩は僕とは同じ中学でね、もつ長いつき合いになる」「藤間くんが追いかけてきた先輩つていうのは、古河さんのこと？」「それは内緒。言いたくない」

それを言つてしまつと、よけいなことまで言わなくてはいけなくなる。

「……そういう点では槇坂先輩は運がよかつた」「どうこいつこと？」

彼女は首を傾げる。

「美沙希先輩は電話番号みたいな個人情報は扱つてないんだ。つき合ひの長い僕だから、面白がつておしえただけ」

残高190円の図書カードという格安で、持ち合わせがなかつたらなかつたで、きっとタダでおしえたのだろうな。

「世の中せまいわね」

「まったくだ」

感想を一致させ、ひと息。

「まあ、というわけで、古河美沙希、三枝小枝の両名とは単なる先輩後輩の関係だ。先輩が思っているようなことはないよ」

「まるで浮気を疑われた男の弁解ね。少しさはわたしの気持ちも考えてくれてこるということ?」

「……単に事実を説明しただけだ」

「……いつもいつも楽しそうで羨ましい限りだ。

「昨日の様子だと美沙希先輩もずいぶん面白がってたからな。下手すると今なら何でもおしえてしまいそうだな」

と、そこまで言ったところでの、自分がよけいなことを喋つたことに気づく。

「そうなの? じゃあ、今度は藤間くんがどこに住んでるか聞いてみようかな」

「バカ、やめろ」

思った通りの反応だった。

住所なんか聞いてどうするつもりだ。襲撃するつもりか?

「あら、どうして?」

無邪気に問い合わせてくるその危機感のなさに、僕は呆れてため息を吐く。

「言つとくけど、僕はひとり暮らしだ。そんなところのこと

……」

思わず言葉が途切れた。

楳坂涼が面白いものを見つけた子どものように、田を輝かせていたからだ。

「……」

「……」

「……おー

しかし、僕の言葉に連動して、すっと田を逸らす楳坂先輩。

逃げるようそっぽを向いたその横顔には、例の如く天使の顔をした悪魔の笑みが浮かんでいた。

第5話 その1

「いいぞ、こえだ、出してくれ」

「おつけー」

「こえだの元気な声に遅れること数秒、僕が手にしたホースの先から水が勢いよく飛び出した。

ある田の脇休み。

今、僕が何をしているかといつと、単なる花壇の水撒きである。この明慧学院大学附属高校には、職員や来客が出入りする正門付近の田立つところに立派な花壇がある。四季折々の花を咲かせて日々を楽しませてくれるが、その分枯らすと少々みっともないことになるので、水撒きは欠かせない。

蛇口をひねったこえだが走り寄ってくる。

「疑問なんだけどさ、なんで真がこの仕事やってるわけ？なんかそーゆー委員とかクラブだつたっけ？」

「んー」

僕は水を撒きながら返事をする。

「別に。僕が勝手にやりましょつかって進み出ただけ」

「うわ、もの好き」

こえだの感想は簡潔、かつ、明快だった。

確かに彼女の言つ通りかもしれない。この仕事を買って出たのは入学してすぐのこと。未だかつてこんなことを自発的にやると宣言出した生徒などいなかつたに違いないと自分でも思う。

「ま、これも学校生活を楽しくするためさ」

そして、この春からはこえだを相棒にしている。週に一回、蛇口をひねつて閉じるだけの簡単なお仕事ですと誘つたら乗ってきた。報酬は毎回ジュース1本だが、見ていて楽しいいじつて愉快なこの小動物をつき合わせられるなら安いものだ。

「楽しく、ねえ」

「何だよ」

何か言いたげなもの言いの彼女に、僕は水撒きを続けながら返事をする。

残念ながらこのホース、シャワーノズルなんてついていないから、うまく水を撒くためには指で先をつぶしたり振ったりして、小手先のテクニックが必要だ。

「だったらいつそのこと、槙坂さんとつき合えばいいじゃん。毎日楽しいと思うよ？ 周りからは死ねや飛び散れやの大合唱だろうけど」

「僕はその状況で楽しめる気がしないね。……勿論、それがなくてもお断りだけど」

「冗談じゃないね。」

「いつたい何が不満なんだよお」

「別に」

こえだに言つても信じないだろうが、僕と槙坂涼は本質的な部分で似ているのだ。一緒にいれば僕という人間を知られるし、理解される。それは口で言つよりも危険なことだ。

「そうだ、こえだ。お前、僕とつき合わないか？」

さすがに槙坂先輩も僕にカノジョがいるとなれば諦めるだろう。

「それってあたしに何かメリットあるかなあ？」

男に嫌われる女の代表格みたいな台詞を、首を傾げつつ呑くこえだ。

「カレシがいるって友達に自慢できる」「ひひひ

「ちょっとお得感薄いかな。それに真だしなあ
ほつとけ。」

「だったら毎日ジュースを一本奢つてやひひ

「おお、それはお得！ つて、そんなので釣らうとするなつ。 真のバカ！」

こいつの場合、ノリツツコツなのか本当に釣られたのか、イマイチ判断がつかないな。

「眞面目な話で、あたしと横坂さんじゃお話になんないじゃん。普通に考えて」

「そんな『普通』僕は知らないね。僕の中じゃ『えだだつていいせん』いってるよ。まあ、胸がある分、多少天秤は向こうに傾くかもしれないけど　おい、水を止めるなよ」

急にホースから出る水が止まつたので振り返つてみれば、こえだがホースをぽつきり折つて、そこをハンドグリップみたいに片手で持つていた。水が堰き止められた水が溜まつて、ホースが膨らみつつあつた。

彼女は口の端を吊り上げて、ひきつった笑みを浮かべる。

「バカ、やめる。ゆっくり離」

「ふーんだ。一瞬でも喜んだあたしがバカだつたつ」

「こえだが手を離した。

途端、水はまさしく堰を切つて流れ出し、その勢いはホースを握る手にまで伝わってきた。。

「うわ

「わきゃ

そして、暴れるホースは僕の手を離れ、水を撒き散らしながら断末魔の蛇のようにのたうち回る。すぐにそれはおさまつたが、僕らが水浸しになるには十分だつた。

「なんで手を離すんだよ、モー」

「お前が悪いんだろ」

僕はカツターシャツの袖で濡れた顔を拭う。まあ、こっちも濡れていいるからあまり意味はないが。

と、そこであることに気づいた。

「こえだ、お前、意外と大人っぽいのつけてるんだな」

こえだのブラウスが濡れて、その下のものが透けて見えていた。レースの柄までばっちり。その品のあるデザインと彼女の子どもっぽい容姿のギャップが、僕としてはポイントが高い。

遅れてそれに気づいたこえだは、さつと両腕で胸の辺りを覆い、

真っ赤な顔で僕を睨む。

「真の、ぶあかーツ」

そして、一拍おいて噴火。

この後、ホースを持つたこえだに追いかけ回されたのは言つまでもない。

翌日、僕はしつかり風邪をひいた。

出たい授業があつたのだが、こんなふらつく頭ではむりそうだ。
たぶん熱もあるのだろう。仕方ないので学校は休むことにする。

ふと心配になつてこえだに電話をしてみたところ、あいつのほう
はピンピンしていた。今日も元気に登校しているらしい。少しほつ
とした。考えてみれば、僕のほつが水をかぶつた量は多いわけだし
な。

朝はまだ風邪をひいた熱を出したという自覚が薄かつたので簡単
な朝食を作つて食べたが、昼はさすがに億劫になつて抜いた。高校
に入学してからひとり暮らしで、病気だろうが何だろうが食事は自
分で作るより他はない。母が言うようにハウスキーパーでも入れて
いればそれでもなかつたのだろうが、まあ、食欲がないから一緒か。
ひと眠りした後はベッドで本を読みながら過ごした。

そして、夕方。

マンションのエントランスのチャイムが鳴つた。

僕はベッドから体を起こし、立ち上がる。まだ頭がふらつく感じ
はあるが、朝よりはよくなつていいようだ。そのままインターフォ
ンに出てる。

「はい」

『おう、アタシだ。風邪ひいたんだって？ サエから聞いた。見舞
いにきたから開けてくれ』

美沙希先輩だった。それは声だけでなく、映像でも確認できる。
カメラの位置を知つている彼女は、しつかりこちらに不敵な笑顔を
向けていた。

別にいいのに、見舞いなんて。とは言え、追い返すわけにもいかない。

「少し待ってください。……どうぞ」

手もとのパネルを操作してエントランスのドアを開ける。
美沙希先輩が上がつてくるまで2、3分といったところか。今は
パジャマ姿だが、ひと眠りして起きた後に一度着替えているし、相
手は美沙希先輩だからもうこのままでいいだろ。

とりあえず髪にブラシだけ通したところで、今度は玄関チャイム
が鳴つた。

「はーい」

返事をして、ドアを開ける。

そこに槇坂涼がいた。

「あら」

と、発音に笑みを含ませる彼女。

「パジャマの藤間くんもかわいいわね」

「……」

僕は黙つてドアを閉めた。
鍵もかけた。

待て。どうしてエレベータに乗つてここまド上がつてくる間に美
沙希先輩が槇坂先輩に変わってるんだ?

「なんで閉めんだ。開ける、真」

ドア越しに今度は美沙希先輩の声。

「すみません、先に着替えたいのですが。僕の予想が正しければ、
その必要があるかと」

「待てるか、バカ。開けねーなら壊す。そして、その後お前も壊す
本気だ。マジ

ここまで言われたら開けるしかない。あの人はやると言つたらや
る。ここでのドア、無駄に立派だからいつたいどれだけの修理費を取

られるやら。たぶん僕の修理費より高いだろう。

僕は渋々ドアを開けた。

ぱつさりウルフカットと猫目の隣りに、清楚を絵に描いたような黒髪ロングのオトナ美人が並んでいた。案の定だ。ふたりとも制服のまま。学校から直接ここにきたらしい。

「先輩、どうしてその人をつれてきたんですか。住所はおしえないでくださいって言つたじゃないですか」

そう。ちゃんと釘を刺しておいたはずなのに。

「おしえてないぞ。ついてくるかつて聞いたら、行くつて言つただけだ」

「……」

ダメだ。こと槇坂先輩がらみになるとこの人も微妙に敵だ。

「兎に角、上がるぞ。槇坂も入れよ」

勝手知つたる他人の家とばかりに、おかまいなしに中に入る美沙希先輩。学校指定のローファーは脱ぎ飛ばし、スリッパも履かない。こつちはほつといて　　僕は槇坂先輩を見た。

彼女は自分も後に続いていいものか迷い、戸惑いの視線を僕に向ける。

「せつかくてくれたのに追い返すほど冷たい人間じゃないつもりさ。……どうぞ。ろくでもないところだけど」

「ありがとう。嬉しい」

槇坂先輩は言葉通りに嬉しそうな笑顔で答えた。

玄関を上がり、僕が出した来客用のスリッパに足を入れて、脱いだローファーをそろえる。ついでに美沙希先輩のまでそろえた。

「すごい！」

リビングに這入ると、槇坂先輩は感激の声を上げた。

「な、すごいだろ」

先にきてすでにソファに座っていた美沙希先輩が、まるで自分の

」とのように自慢げに笑う。

僕がひとりで住むこのマンションは、いわゆる高級マンションと呼ばれるものだ。ひと続くなつたリビングとカウンターダイニング付きのキッチンに、勉強部屋、寝室、書斎という間取りで、それが非常に広い。僕は完全に持て余している。マンション自体も高層で、ここは28階。火事があればきっと助からないだろう。

「藤間くんの家ってお金持ちなの？」

「ま、いろいろと事情があつてね」

僕はテキトーな言葉でお茶を濁す。

ひとり用のソファのほうに腰を下ろすと、この短時間のドタバタの疲れのためか、肘掛けに頬杖を突き、思わずため息を吐いてしまつた。熱がまた上がるんじゃないだろうか。つて、こんなことしてる場合じゃないな。

「そうだ、何か飲むものでも」

客がいるというのに、何をゆつくりしているんだ。

「いいから座つてろ、バカ」

「そうよ。わたしたち、お見舞いにきただけなんだからしかし、立ち上がりかけた僕を、ふたりが同時に制した。

「どうなの、風邪は」

槙坂先輩が美沙希先輩の隣りに座りながら聞いてきた。そっちのソファはゆつたりとふたりが座れる。

「別に見舞つてもうほど大袈裟な風邪じゃないよ」

「アタシもそうだろうと思つたんだけどな、槙坂が血相変えて飛んできたから」

血相を変えてだつて？

僕は思わず槙坂先輩を見る。

「だつて、藤間くん、ひとり暮らしだつて言つてたから……」

後で聞いた話、彼女は教室に僕の姿がないのを見て、こえだに何か知らないかと尋ねたのだそうだ。当然、こえだは僕が風邪をひいたことを電話で知っているし、そう答える。そうして槙坂先輩は美

沙希先輩を訪ね、今ここに至ったというわけだ。

この様子だとずいぶん心配してくれたようだ。

「ありがとう。でも、朝よりよくなってるし、もう大丈夫だと思つ

いちおう礼は言つておかないと。

彼女はそれを聞いて、ほっとしたようだつた。

「真、いろいろやること溜まつてんじゃないのか？　流しに洗いものが残つてたぞ」

「そりやそうですよ。田中寝てましたからね」

「よし。じゃあ、せつかくきたことだし、やれることはやつていつてやるか」

「また得意でもない」とをやひつとする。人が病気になると張り切るタイプだな。

「洗いものに、後は洗濯か、たまつてそつなのは

「わたしも手伝うわ

「ぶつ」

何を言つて出すんだ。

「ちよつ、ちよつと待つた！」

美沙希先輩はいい、美沙希先輩は。でも、あの槇坂涼に家事だつて？ そんなことさせていい人じやないだろ。しかも、洗濯なんてさせた日には、いつもが首を吊りたくなる。

「なに？」

「どうした？」

しかし、こちらの心中など知る由もなく、ふたりは待つたをかけた僕を不思議そうに見る。完全にやる氣だ。果たしてこの厚意を無碍にしていいものか

「えつと、じゃあ、洗濯は美沙希先輩にお願いします」

「よし、任せろ。あんなもの洗濯ものと洗剤を放り込んで、スイッチを入れたらいいだけだろ」

むちやくちや乱暴なことを言つてゐる気がするが、大雑把には間違つていない。全自动だからな。しょせん家電なんて誰でも同じ結

果が得られるように開発されたものだ。美沙希先輩でも大丈夫だろ
う。

「槙坂はキッチンのほうな」

「ええ」

結局のところ、槙坂先輩に家事をやらせることには変わりないが、キッテン回りならまだ許容範囲だらう。僕は脱力したように、ソファに座り込む。

と、正面でも同じようにスプリングが軋む音。

見れば槙坂先輩も、一度は上げた腰をまた下ろしていた。じつと僕を見ている。向こうに行くんじゃなかつたのか。

「洗濯、わたしにはやらせてくれないのね」

「当たり前だ。あなたにそんなことをさせられないし、第一見られたくないものがある

「わたしは気にしないわ

「僕が気にする」

頼むからそこはこちらの気持ちを汲んでくれ。

「古河さんならいいの？」

「そりゃあ先輩でも多少抵抗はあるさ。でも、もつつき合つても長いからね」

お互いいろんな面を知つて知られた仲だ。

「ふうん、そう」

と、槙坂先輩。

何を考えているのやら。深読みはしないでもらいたいものだ。

「おーい、槙坂ー」

脱衣場がある廊下のほうから美沙希先輩の声が飛んできた。

「お前、何か喰うモン作つてやれよ。まさか料理は苦手とか面白いこと言わないだろつたな」

「大丈夫よ」

槙坂先輩も返事を返す。

「だそーよ。やらせてもらえないことを言つても仕方ないわね。そ

れに洗濯よりも料理のほうが藤間くんに喜んでもらえるわ

「ものは考えようだな」

「何か食べたいものはある?」

頭を切り替えたらしい槙坂先輩は、立ち上がりながら僕に訊いてくる。

「ハッシュドビーフ。僕の好物だ。作れるものならぜひひ作ってほしいね」

「そう。でも、それは今度きたときにするわ
いや、もうこないでくれ。」

「食べやすいものがいいわね。やっぱりおかゆか雑炊あたりかしら。
キッチンのものは好きに使つていい?」

「ああ」

僕はなげやりに返した。

「あ、そうそう」

と、彼女はキッチンに向かいかけた足を止める。

「好きなものはハッシュドビーフ。覚えておくわ」

そう言つて自分のこめかみの辺りを人差し指で2回叩き、例の人っぽい笑みを浮かべた。

彼女のタフさには負けるな。

「……」

ハッシュドビーフ、ちょっと期待してみてもいいだろ?」

第5話 その2

「うわあ、うわあ、うわあ！」

程なく雑炊を中心とした温かい食事ができ上がり、昼を抜いたこともあって僕はそれを軽く平らげてしまった。

お粗末さま

「どうだった？』

一
ま
あ
ね

癪なので言いたくない、言へまでもないといふのであるが、

る。ソファに座ると急に身体が重く感じられ、肘掛けに肘を突いて頭を押さえた。

と云ひた 真】

いちばんの原因は横坂涼が自分のプライベート空間にいることだ

「そうか。じゃあ、アタシらはこの辺で帰るとするか」

12

「ほり、
槇坂。帰るぞ」

「で、でも……」

彼女は心配そうに僕を見る

「僕なら大丈夫。おかげさまで食欲も満たされたり、もうひと眠りしたら治るさ。むしろそうしたいから帰つてくれると助かる」

「だとか」

「でも、藤間くんをひとりにするのは……。何かあったときのため
に誰かいたほうがよくなない?」

槇坂先輩は一度美沙希先輩を見上げ、また僕に視線を戻す。そんなに不安げな顔をしないでくれ。

「大丈夫だつて。明日はちゃんと授業にも出る」

僕は肘を突いた手で頭を支えつつ、もう片方の手をひらひらと振つた。大丈夫だから帰つてくれのボディランゲージ。

しかし、彼女は何も言わず、頑なに帰る素振りも見せない。

「よし、わかった」

代わりに言葉を発したのは美沙希先輩だつた。こういう先へ進まないグダグダしたやりとりは、彼女の最も嫌うことのひとつだ。

「槇坂、お前は残れ。朝まで面倒見てやれ」

……は？

「何を言つてるんですか！？」

そんな結論があるか。

僕は思わず立ち上がりつたが、途端、頭がくらつときた。その様子を見てとつたのか、槇坂先輩が僕を支えようと寄つてくる。「ただし、レイプまがいに襲うのは禁止だからな。こいつが死ぬ」「ええ、それは守るわ」

待て。そのツッコミバリの台詞に、なんで普通に返事をしてゐるんだ！？

「先輩！」

「別にいいだろ、それくらい。槇坂だつて何もしないって言つてるんだ」

そういう問題か。

「それに、アタシだつてもしお前に何かあつたらつて心配してなくもないんだ。でも、槇坂がいてくれたら安心できる」

「お気持ち嬉しいですけどね。第一、彼女だつて泊まる用意なんてしまいでしよう」

いや、それこそそういう問題じやないな。

「あん？ 女がひと晩泊まるくらいの準備なんて、その辺のコンビニでそろつだる」

「……」

いや、大雑把な作りの先輩と違つて、槇坂先輩は繊細にできていますから。

「じゃあな、槇坂。アタシの大好きな舍弟を頼んだぞ」「ええ

ふたりはリビングを出していく。帰る美沙希先輩を槇坂先輩が玄関まで見送るのだろう。

僕はソファに腰を下ろすと、背もたれに体を預けた。

「大丈夫？」

そこに槇坂先輩だけが戻ってきた。

美沙希先輩は帰つて、今ここには僕と彼女しかいない。

「……バカじゃないのか、あなたは」

「藤間くんのことが心配だつたのよ」

「それでもだ」

ひとり暮らしの男のところに残るだなんてどうかしている。僕は呆れてため息を吐いた

つもりだったが、それは妙に重いものになつた。人疲れどころじやなくなつていてるのかも知れない。

「寝たほうがいいわ

「……言われなくてもそうさせてもららう」

まったく取り合おうとしない彼女を意味もなくひと睨みしてから、僕は立ち上がつた。学校ならまだしも、こんな誰もいないところでふたりきりなんて、こっちの身がもたない。やはりまだ頭がふらつくが、それを槇坂先輩に悟られまいと無駄な努力をしつつ、隣りの洋間に向かう。

ドアのレバーを握り、そこで動きを止めた。 いちおう言つて

おかないとな。彼女が困るだらうし。

「……脱衣所の戸棚に新しいタオルとトラベルセットがある。バスルームともども好きに使つてくれ

言つだけ言って、返事も聞かずには部屋の中に入つた。

絨毯を敷いた床に、ダブルベッドとサイドボード。ここが寝室だ。少し前まで寝ていたベッドに倒れ込む。

「……」

ここに寝転がればすぐに眠れるかと思つたのだが、ドアの向こうにいる彼女のことが気になつて、それどころではなかつた。

槇坂先輩はこれからどうするのだろう。食事は？ ビニで寝る？ 食事はキッチンとそこにあるものを使えばどうでもなるだろう。でも、どこで寝るんだ？ ソファか？

「まつたく……」

と、仰向けに寝返つたところでの、サイドボードに置いたままのケータイが着信メロディを奏ではじめた。誰だ？ 美沙希先輩がこの状況を茶化すために電話でもかけてきたのか？ 僕は手を伸ばして端末を掴み、サブディスプレイを見た。

槇坂涼

それが送信者の名前。

「……」

確かに隣りの部屋にいるはずだよな？

この家のことで何か聞きたいことでもあるのだろうか。それだったらここに入つてくれればいい。……いや、さすがにそれは抵抗があるか。

僕は体を起こし、深呼吸をひとつして気持ちを落ち着けた。ついでに頭も冷やす。

「はい」

『……わたしです。槇坂です』

その声は少し弱気に聞こえた。

「どうした？」

『あの、怒つてる……？』

半ばむりやりにここに残つたことか？

「怒つた」

当然だろう。いつたいどれだけ危機感がないんだ。こっちの氣も知らないで。

でも。

「でも、もう怒つてない。僕のことを心配してくれるんだ。それを怒るのは間違つてる。悪かった」

『ありがとう。優しいのね。……でも、本当は別の気持ちもあったの』

別の気持ち？

『……古河さんへの嫉妬心』

「……」

納得した。だけど、僕はそれを笑い飛ばさなくてはいけない。

「馬鹿々々しいね。前にも言つただろ？ 美沙希先輩は人生の先輩で、僕にとっては特別な人だけど、そういうのじゃないって『ここには何回きたの？』

きたことがあるのを前提にした質問だ。……当然か。あの人の態度を見ていたら、それくらいすぐにわかるな。

「そんなの覚えてないよ。最初のころはもの珍しさでよく遊びにきてたけど、最近はさっぱりだ。今日だってずいぶん久しぶりな気がする。何度もきてるけど、何かあつたことなんて一度もないわ」

『信じていい？』

「僕としてはむしろ信じなくていい」

そう返すと、電話の向こうの槙坂先輩はくすりと笑つた。
もうこの話はいいだろ。

ドア一枚隔てただけのこの距離で、なんでわざわざ電話を使って話しているんだろうな。

「それより、先輩、今日はどうやって寝るつもりなんだ？」

まあ、ベストはこのベッドを使つてもらつて、僕がソファで寝ることか。

『あら、藤間くんと一緒にいいわよ』

端末を耳に当てているせいか、それはまるで耳元で囁かれたようだつた。

「は？」

『ダブルベッドでしょ？ わたし、体は細いし、迷惑はかけないわ』
「何を言つてるんだ！？ ていうか、なぜダブルだつて知つてる！？

覗いたのか、この部屋を。いつの間に。

『ただのカンよ。これだけ広いんだもの、置いてるベッドはダブルかなつて思つたの。でも、その様子だと当たつたようね』

槇坂先輩はまるで慌てふためく僕の様子が見えているかのようこ笑う。尤も、僕にも今の彼女がどんな顔をしているか容易に想像がつくが。

どこまでも意地が悪い人だ。

『藤間くん、わたしのためにベッドを空けよつと思つたでしょ？

ダメよ。あなたは病人なんだから』

そして、一転して年上らしい口調で僕を諭す。

『わたしはソファで大丈夫。こう見えて、どこでも寝られるタチだから』

『わかつた。そうさせてもらつ。……悪いけどこのまま1、2時間ほど寝させてくれ。起きたら来客用の布団を引っ張り出すから』

『じゃあ、その間お風呂でも入つて待つてよつかな』

「……」

だから熱が上がりそなことを言わないでくれ。

その夜、僕は夢を見た。

僕が寝ている寝室に誰かが入ってきて　それを僕が第三者の視点で見ているのだ。

これは、夢。

“彼女”はそばまでくると、額にかかった髪を搔き上げるようにして僕の頭を撫で、囁く。

「ねえ。初めて会ったときのこと覚えてる?」

これは、夢……?

そして、翌日。

朝には熱もすっかり下がっていた。

槙坂先輩は朝の早いうちに、意外とあっさり帰つていった。まさかこのまま学校に行くわけにもいかないし、女性としては当然か。次に会つたのは学校。午前中の休み時間だった。

今日は一緒に授業はない日なのだが、僕がいる教室までわざわざ訪ねてきてくれた。

「おはよう、藤間くん。昨日は風邪をひいたって聞いて心配してたの。もうよくなつたみたいね。よかつたわ」

これは完全に周りを意識した台詞だ。

それから彼女はさり気ない手つきで僕のネクタイを微調整しながら、僕にだけ聞こえる声で囁つ。

「実はあなたの家に忘れ物をしてきたの」

「……わざとだろ?」

またくるための口実。

「まさか。わたしがそんな狡猾な女だと思つてゐるの?」

思ひ思わないじゃなくて、事実だ。

「わざと何か置いてくるつもりだったのに、そつかるのを忘れてた
の」

「わたしつつうつかり屋さんでかわいいと思わない？」

そう言つて槇坂涼は、例の如く天使の顔で悪魔の笑みを浮かべる。
なるほど。確かに忘れものだ。

「よくわかった。一度とこないでくれ

第6話

ここ、明慧学院大学附属高校は単位制を導入している。

よつて、生徒は好きな授業を自由に履修でき、その意思決定には様々な思惑が入り込む。例えば、学食が混むのがいやだからと昼休みの前後どちらかを必ず空けておいたり、朝が弱いからと2時間目以降からばかり入り入れたり。なので、登校時間も下校時間もわりと分散する。

そのはずなのだが。

放課後。

「あら、藤間くんも今帰り？」

その人とロッカーの前でばったりと会つた。

振り返ればそこに立っていたのは、黒髪ロングで清楚を絵に描いたようなオトナ美人 横坂涼だつた。

周りの視線を浴びつつも、どこ吹く風で立っている美貌の先輩。そんな彼女を見て僕は苦虫を噛み潰したような顔を作る。

「あなたは今日は5時間目までのはずでは？」

今は6時間目終了後。本来ならば彼女は帰つているはずだ。

「嬉しい。わたしのスケジュールを覚えてくれてるのね」

「……」

しまつたな。予想外の遭遇に口を滑らせたか。
「できるだけあなたに会わないように」と思つてね

「ふうん、そう」

と、横坂涼は余裕の笑みを浮かべる。

「いちおう藤間くんの質問に答えると 少し用があつて図書室で時間をつけしてたの」

「だったら、その用とやらをとつとと済ませるといい

「そうするわ」

そう言つと横坂先輩はすつと距離を詰めてきた。

「せっかく偶然会えたのだから、よかつたら一緒に帰らない?」

「……」

きつとこの話の流れは、彼女としてはおかしくないのだろうな。

楳坂先輩が僕のネクタイに触れた。

目線よりもやや低い位置に彼女の艶やかな黒髪がある。そして、香水かオーデトワレだろうか、程よく甘い香りが僕の鼻を挑発的にすぐつてくる。この距離になつて初めてわかる上品な香りだ。果たして、この学校で何人がこのことを知っているだろうか。

最近、彼女はよくこうする。僕のネクタイを直してくれているのか、単なる手遊びなのかは知らないが。ただ、面白い状況だと思う。彼女がその気になれば僕の首を絞めることができるのである。もしかしたら僕の返事次第では、本当にそうするかもしれない。例えば、こう返したらどうだろ。

「悪いが返事はノーだ。生憎、今日は帰りに本屋に寄るつもりでね」「それくらいならつき合いつけど?」「さすがに楳坂涼はこんなものでは崩れないようだ。
「それなりいが、僕の邪魔はしないでくれよ」
「もちろん。そんなことはしないわ。でも、よかつたらわたしのほうにもつき合つてくれる?」

「どこに?」

楳坂涼が学校帰りに寄るところ。興味があるな。

「そうね、その辺りをぶらぶらして、その後わたしのお気に入りのカフェに寄りましょ?」「待て。それじゃ、まるで「デートみたい?」

僕の言葉を先回りして、彼女はくすくすと笑う。「かもしれないわね

「……」

さては最初からそのつもりだったか。

とは言え、今さら前言撤回するのは主義じゃない。それに学校の外での槇坂涼を見るいい機会もある。

「おーい、藤間、帰……おわっ。槇坂さん！？」

そこに現れたのは浮田だつた。

こいつとはついさつきまで同じ授業を受けていて、ここまで一緒に戻ってきた。自分のロッカーで荷物をまとめてこつちにきてみれば、憧れの先輩がいて驚いたというところだろう。

「せ、先輩も今お帰りですか？」

「ええ、そうなの」

槇坂先輩は僕から離れ、浮田に微笑みで応えた。

「そうしたら藤間くんとばつたり会つて、せつかくだから『テート』に誘つたところ」

「おい」

「なっ！？」

「お、お前え……」と、かすれた声で浮田。そんな恨みがましい視線を向けられても知らん。僕が言い出したことじゃない。

一方、僕の恨みがましい視線を槇坂先輩は、例の天使の顔をした悪魔の笑みで受け流した。

「あ、でも、」

そして、ふいに愁いを帯びた思案顔になる。

「お友達がいるなら遠慮したほうがいいのかしら？」

「どーぞどーぞ」

タイムラグなしで浮田は答えた。なんとも単純なやつ。槇坂涼にとつてこれほど扱いやすい人間もいないだろう。

こうして僕は槇坂先輩と一緒に帰ることになつた。

「ひどい話だ」

歩きながら僕はぼやいた。

「やつとの友情にひびが入つたらどうするつもりだ」

「安心して。藤間くんの生活や人間関係を壊す気は毛頭ないから」「本當かよ。槇坂涼と関わるようになつてから、僕の生活は乱れっぱなしなんだがな。

「もし仮に何かを失つたとしても、それ以上のものを与えてあげる自信があるわ」

そう彼女はしれつと言う。

槇坂涼と並んで最寄りの駅へと歩く。

周囲には同じように6時間目まで授業を受けていた生徒が下校していく、皆一様に駅を目指していた。その中にあって槇坂先輩は憧れの眼差しを向けられ、僕には羨望と嫉妬の視線が浴びせかけられる。槇坂涼を独占しているのだから当然だ。尤も、最近ではこれにも慣れてきて、まあ、意外と悪くはない気分だ。

「お友達といえば、

と、槇坂先輩。

「この前、三枝さんと話をしたわ

「こえだ？ らしいね」

僕が熱を出したときのことだ。姿の見えない僕を心配して、彼女はこえだに声をかけたのだといつ。

「なかなか面白いやつなんで、よかつたら仲よくしてやつてくれ

「わたしはいいけど、向こうにその気はあまりないみたいよ

「は？」

彼女の思わずひと言に、僕は間抜けな発音をする。

「そうなのか？」

誰とでも仲よくなれるやつだと思つていたが。

「先輩、こえだに何かしたんじやないのか？」

「かもしれないわね」

彼女は苦笑する。それは肯定だろうか。

「何をしたか知らないが、見た目も性格もかわいいやつだし、ノリ

もいい。ああいう元氣なのがひとりくらい近くにいてもいいと思つ

んだがな」

「……悪いけど、わたしもその氣がなくなってきたわ」

「……」

横目で隣を見れば、そこには心なしか頬を膨らませ氣味の槇坂先輩の姿があつた。こえだの何が氣に入らないんだろうな。

「あの子、あなたのことを『真』って呼び捨てなのね。よくないんじゃない？」

「別に。気にするほどのことじゃないさ。あいつが敬意の欠片もなく僕のことをそう呼んでるなら兎も角、そうじゃないのはわかってるんだ。呼称になんて拘らないよ」

確かに、僕の呼び方なんて『キター』でいいぞ、とこちらから言つたはずだ。

「そういうあなたはわたしに対して敬意があまりなさそうね。わたしのほうが年上なのに」

「こいつ見えても人を見る目はあるのさ」「

「生意気な後輩。……悪くはないけど」

そう言つて槇坂先輩は機嫌のいい猫みみたいに笑う。

「それにしても藤間くん、ずいぶんとあの子に甘いのね

「そうか？」

「己を顧みるに

「ま、こえだのことは氣に入つてるからね。そういう部分はあるかもしけれない」

「ふうん」と、槇坂先輩はわずかに思案。

「わたしも真つて呼ぼうかしら」「なら僕は涼と呼ぶことになるな

「あら、そうなの？　わたしはそれも大歓迎よ、真

「僕はぜんぜん大歓迎じゃないんですよ、槇坂センパイ」
気がつけば前方に駅が見えはじめていた。

本屋に行くのはやめることにした。

わざわざ今日行かなくてはいけない強い理由もなく、現状、優先順位は低いといえる。ならば時間はもつと有意義なことに使うべきだらう。

そうして今、僕たちはカフェにいた。

槙坂先輩のお気に入りだといつそこは、彼女が足を運ぶに相応しい上品な内装をしている。場所は一部の情報誌が好きそうな言葉を使うなら『隠れ家みたいな』というやつで、閑静な住宅街の一角にあつた。道々聞いた話では若い夫婦が経営しているのだとか。店内を見回してみれば、そろ多くない席は半分も埋まつていなかつた。

……これで大丈夫なのだろうか。

「ここへはよく？」

「時々。ひとりになりたいときには。学校の友達にはおしえてないわ」

学校じゃ行く先々で何かと注目される身だからな。同情する。

槙坂先輩がこの上品な店内でコーヒーを飲んでいる姿か。絵になる。そんなときの彼女は、ひとりで何を思つてカップを口に運んでいるのだろうか。

「だから、藤間くんが初めて」

「いいのか？ 僕が誰かに言うかもしれない。我らが槙坂先輩御用

達の店だつて」

「大丈夫よ。まだいくつかこういうお店を知つてゐるから」

彼女はどこかしらぬげにに言つ。この手の店を探すのが好きなのかもしぬれないな。

そこでコーヒーが運ばれてきた。槙坂涼のお薦めであり、この店自慢のオリジナルブレンドコーヒーだ。僕はまず香りを楽しみ、それからブラックのままでひと口飲んだ。なかなかにいける。

「本屋、寄らなくてよかつたの？」

彼女はコーヒーフレッシュを垂らしたカップの中身をスプーンで

かき混ぜながら僕に聞いてくる。

「強いて何か欲しいものがあつたわけじゃないからね。行くのはいつだつていいわ」

「残念ね。藤間くんがどんなコーナーを見て回るのか興味があつたのに」

「では残念と言いつつ、実に楽しそうだ。

言つておぐが僕は本を見て回るのにこそしなくてはいけないようなことは何もない。ただ、横に横坂涼がいれば多少は気取るかもしれないが。

「でも、おかげで時間に余裕ができたわ。これからどうする?..」

「どうするも何も、ここでゆっくりするんじやないのか?..」

何のために本屋に寄るのをやめたと思つていいんだ。
が、しかし、彼女は。

「わたし、また藤間くんの家に行きたいわ

「……」

「まだどきつとあるような」と。僕は努めて平静を装い、言い返す。

「……一度とこないでくれと言つた

「そうだつたかしら?..」

だが、それにも大人の笑みで惚けるだけ。

「そうそう、あなたの好きなハッシュショードベーフも家で練習してみたの。きっと満足してもらえると思つわ

「食べもので釣ろうとするな」

僕は子どもか。

「わたしはもつと別のもので釣ろうとしてるのよ?..でも、わかつてもられないんじやわかりやすいもので釣るしかないじやない?..」

「……」

「こつたい最初の餌は何だったのだろうな。

「あの家のキッチン、とても使いやすくて気に入つたわ。あそこならもつと楽しんで料理ができるぞ」「

さつきまで危ない発言をしていたと思つたら、今度は一転してこれだ。

そう言えばこの前うにきたとき、夜と翌日の朝に簡単な食事を作ってくれたんだつたな。

「想像した？ わたしがキッチンに立つといひ。いやりじこ」

「あんな……」

少しもの思いに耽つただけで、すぐにその隙を突いてくる。彼女と話すときは常に油断ができない。

「ま、想像というか、思い出しさしたさ。僕はいつもテキトーな料理しか作らないからね。立派なシステムキッチンも宝の持ち腐れ。あなたみたいな人が使うのがいちばんいいんだろうな」

カウンターダイニングもひとりだとバカみたいだしな。誰か作ってくれる相手がいて、料理が出てくるのを待つだけの身なら楽だとは思う。

「やつぱり藤間くんの家つてお金持ちなの？」

それは前にもされた質問だな。まあ、隠すようなことでもないし、槙坂先輩には知つておいてもらつてもいいかもしない。

僕はコーヒーを飲み、間をとつてから答える。

「金持ちなのは僕の父親さ」

その微妙な表現に、槙坂先輩はかすかに首を傾げるながらじらじらを見た。

「父は地位とお金だけは持つている人でね」

名前については知らないが。

「母はその愛人で、僕はそのふたりの間に生まれた子、いわゆる庶子つてやつだ。父はいいのか悪いのか、愛人にも家族と同じようく愛情を注ぐ人らしくて、僕にも惜しみない援助をしてくれるんだ。あのマンションもそう。知つての通り多少過剰などころはあるが」

高校生のひとり暮らしに似つかわしくない高級マンションには、さすがに苦笑せざるを得ない。

なお、ふたりが出会ったのは、母が父の経営するホテルでフロンタ係をしていたのがきっかけらしい。母が愛人なのは公然の秘密だが、おかげで父の影響力もあって今はフロントマネージャにまで昇格し、男勝りの仕事ぶりを見せている。

「そんな顔しないでくれ」

向かいで少し困ったような顔をしている槇坂先輩に僕は言つ。「誰しも大なり小なり持つて家庭の事情さ。気にしなくていい

「え、ええ」

彼女は動搖したのか、気持ちを落ち着かせるように「コーヒーを口に運んだ。

「でも、どうしてそれをわたしに？」

カップを置き、問う。

「さあ？ 単なる気まぐれか。ひた隠しのするほどのことじゃないしね。美沙希先輩はもう知ってる。こえだにはまだだけど」「じゃあ、今のわたしは三枝さんと古河さんの間くらい？」
「あなたはもつとよく自分を知つたほうがいい」

そんなわけないだろ？

「そう。藤間くんのところは今日はダメなのね」

話は戻り、彼女は残念そうにそうこぼす。ダメなのは今日だけじゃないというのは、きっとわかっていて無視しているのだろうな。

「じゃあ、わたしの家に行く？」

「大丈夫か？ まだ動搖してるんじゃないかな？」

「失礼ね。正氣よ」

なら、なあのことタチが悪いな。

「近いわよ？」

「誰も聞いていない」

「でも、わたしの家も知つておいてもらわないと。病氣のときに飛んできてもられないじゃない」

つまり、彼女が倒れたら僕が看病しにいくわけか？　冗談じやない。

「親がいるだろ？」

「父は当然勤めに出てるし、母も自分の絵画教室を開いていて、あまり家にいないの」

「ああ、でも」と、つけ加える。

「先の話は兎も角、今日は母も早く帰つてくる日だから、今さらはもう家にいるわね」

「それは残念」

勿論これは嫌味だ。僕はわかりやすく、わざとらしくほど無感情に発音する。

「わがままな子ね。あなたの家もダメ。わたしのところも嫌。いつたいどこだつたらいいの？」

「どつちも嫌に決まつてるだろ。せめて外にしてくれ」「わがままはどつちだ。」

しかし、僕のその返事を聞いて、槇坂涼は笑みを浮かべた。きっとファウストがサインした瞬間のメフィストの顔はこんなだったに違いない　そんな笑みだつた。

「なら決まりね。今度は休みの日にちやんとしたデートをしましょ」

……ああ、なるほどな。彼女がメフィストなら、愚かなファウストが僕なのは当然の配役か。

悪魔め。

とりあえずテーブルの上に自分のコーヒー代だけを置いて立ち去りたいところだが、たぶんそれは根本的な解決になつていないのでろくな。

クリスマス⑤

「これでどう?」「

いつもの如く階段教室の通路側の席に座る僕の前に、黒髪美人の上級生・楳坂涼が何かを置いた。友人たちとの会話と読書をやめ、本を閉じてそれを見てみる。

一枚の紙だつた。

「何だ、これは?」

「あのね藤間くん、そういう質問をする前にまずよく見ましちゃうね。そんなに難しくないから」

清楚を絵に描いたような楳坂先輩は、出来の悪い弟に言い聞かせるように、大人っぽい笑みとともに優しくそう言つた。僕は改めてその紙に目をやる。

それは大学の合格通知だつた。

しかも、受験生なら誰でも知つてているような有名難関校。果たして、この明慧学院大学附属高校の過去10年の卒業生の中に、そんな超一流大学の合格者がいつたい何人いただろうか。おろそいことに、それを彼女は突きつけてきたのだ。

「おめでとう。これでエスカレータ組と同じく受験勉強から解放されて、存分に遊べるというわけだ。ぜひ僕にかまわず、目いっぱい遊んでくれ」

「あら、藤間くん。もうあの約束を忘れたの? そんなに前のことじゃないはずよ」

「……」

さて、何だつただろうな。

「あれは今月の初め、わたしがクリスマスは一緒に過ごしましょうと提案したときのことよ。あなたは、受験生がそんなことしていいのか、そんなのは合格通知をもらつてからにしろと、そう言つたわ

そして、楳坂先輩はそこで一拍。

「ちゃんと合格通知をもらつてきたわ。約束通りこれでクリスマスはわたしこつき合つてくれるわよね？」

「……」

「ちつ。やっぱり覚えてたか。

僕もあの台詞の後、これは失敗したなと後悔した。あの槇坂涼ならすぐにでも推薦入試で合格をもぎ取つてきかねないと思ったからだ。成績優秀なのは誰もが知るところ。学校を選ばなければ絶対どこかに合格するし、明慧大へ行くことを望めば成績優秀者上位数名にだけ許される無試験合格だ。そして、実際こうして僕の前に合格通知を持ってきたわけだ。まさかこんな難関校とは思わなかつたが」とは言え、こっちも約束を忘れていたわけではない　というのは実はおおいにひかえめな表現なのだが、やはり素直に認めるのは業腹だな。

僕はため息をひとつ。

「約束？ 悪いが僕はそんなつもりで言つたわけじゃない
「わたしはそう受け取つたわ」

「……」

「……」

お互いの主張を込めて視線をぶつけ合つ僕たち。

浮田などは「お前と槇坂さんって、時々見つめ合つてるよな」などと言うが、バカめ、これは正しくは睨み合つてていうというのだ。

「それに、あなたには申し訳ないが、実はもうどうするか決めてあるんではね」

「そうなの？」

「ああ。ただし、正直に言おう　まだ決定じやない。これから声をかけるところなんだ」

「わたしを優先する気はないの？　誘つたのはこちらが先よ？」
「ないね」

僕はきつぱりと言つ。

「ただ単に僕がもたもたしていただけで、これは前から決めていたことだ」

「ふうん、そう」

と、向けてくる眼差しは明らかに僕の嘘を見抜いていた。しかし、ここでそれを指摘しないのが楳坂涼だ。彼女はここからさらに次の手を打つてくる。

「じゃあ、こいつのはどう? もしうまく予定が決まらなかつたときでいいわ。そのときはわたしとクリスマスを過ごしましよう?」

楳坂先輩はやや大きな声で言い、おかげで周囲がざわつきはじめてしまった。きっと周りには彼女の台詞はひかえめな提案に聞こえただろう。だが、僕にとつては違う。これは完全に宣戦布告。勝負だ。

「……いいだね?」

「決まりね」

彼女は微笑み、そして、ぐっと顔を近づけてきた。
鼻先が触れ合ってそうなほどいの、至近距離。

「猶予は明日の昼休みまでよ」

「……」

僕にだけ聞こえる声で囁き、楳坂涼は去つていった。
ほり見る。やっぱり宣戦布告だ。

とりあえず、なりゆきと勢いと意地でこんなことになってしまったが、考えてみれば僕が声をかけられる相手は情けないことにそう多くない。まあ、がんばってみるか。かたちだけでも。

そのひとりが確かこれから授業で同じはず。

そう思つて教室内を見回し、その小動物みたいな小さな背中を見つけた。この授業の後さつそく誘つてみるとしよう。

「こえだ」

授業が終わった後、僕は教室を出たところで三枝小枝さんきゅうしゃ・さえだ 通称こえだを呼び止めた。

ショートヘアを髪留めで留めて、おでこも広く露になつた顔が振り返る。

「ん？ なに？」

「ちょっとといいか？ 話があるんだ」

「歩きながらでいいんなら。……ごめん。先いつて」「

こえだが一緒にいた友達に断り、僕らは彼女たちから離れていくようなコースで歩いた。

講義棟を出て、冬の空の下を行く。

「なに？ 話つて？」

「こえだ、お前、クリスマスは空いてるか？」

「うわ、本当にきた！？」

直後、こえだが驚きの声を上げて立ち止まつてしまつた。隣りを歩いていた彼女の姿が視界の隅から消え、僕も遅れて足を止める。「なんだって？」

「う、うつむ。何でもない」

彼女は慌ててぶんぶんと首を横に振り、ちょいちょいこと駆けてきた。僕もそれにタイミングを合わせるようにして歩き出す。「ど、どーせ真のことだから、楳坂さんから逃げるためにあたしを誘おうつて魂胆だろー」「話が早くて助かるね」

彼女は僕と楳坂涼との関係を正確に把握している人物のひとりだ。「確かにそれも3分の1くらいはある」「残りの3分の2は？」「いくら楳坂先輩から逃げるためとはいえ、好きでもない女の子に声をかけたりはしないってこと」「あ、そうなんだ。ふーん……」「……」

「……」

それきり会話が途切れた。

しばし歩き、どうにもこいえだの様子がおかしいような気がして隣りを見てみれば、ちょうど彼女が顔を赤くしてうつむくところだった。こんな反応をするとは少々意外だ。これは収穫だな。

「こいえだ？」

「……」

彼女はなぜか怒ったように頬をふくらませながら、ゆっくりとこちらを見た。

そして、おもむろに僕に脇脛の辺りに蹴りを一発。

「痛いだろ」

「ふんだ。お生憎様、あたしはもう友達と約束があるの。タラシの真はいいかげん観念して、クリスマスは槇坂さんと楽しく過ごせば

つ

ついでに、ベー、と舌を出して走り去る。子どもか、こいつは。僕は小さくなつていいくこいえだの背中を見送った。

「観念、ね……」

あまり早々に観念はしたくないな。すぐに白旗を揚げるのは主義じやない。特に槇坂涼相手には。

翌日の午前中。

「先輩」

「あん？」

僕はもうひとりアテにしている人をつかまえた。ざつくりしたウルフカットが男前な古河美沙希じが・みさき 美沙希先輩だ。

本当は次の休み時間にでも電話で連絡を取るつもりだった。というのも、僕の記憶によれば美沙希先輩はさつきの時間は体育のはずで、今はまだ電話には出ないだろうと思つていたからだ。ところが、偶然ばったり会った。僕の記憶を裏づけるかのように彼女はジャージ姿。男前度増量中だ。

「話があります」

「おう。いいけど、クリスマスならつき合わないからな」「……」

話ははじまる前に終了した。

まさか、じゃあこれで、といつのも失礼なので、体育館方面へと一緒に歩く。更衣室が体育館の中にあるのだ。

「何か予定でも？」

「バイトだよ、バーイート。金に困らないお前と違つて、思い切り遊ぶためには働かないといけないんだよ。アタシは情報屋で稼いでるくせに。いつたい何に使つてるんだか。どうか、受験はどうなつてんだ？」

「お前、涼から誘われたんだって？」

美沙希先輩はくつくつと笑いながら言ひ。

彼女は槇坂先輩のことを『涼』と呼ぶ。いつの間にか仲良くなつたらしい。性格に共通点がないから、そんなことにはならないと思っていたのだが。世の中わからないものだ。しかも、時々結託するのだから質が悪い。

「ご存知でしたか」

まあ、知つていて当然か。一日あれば美沙希先輩の情報網に引っかかるには十分だ。

「で、逃げるためにアタシに声をかけたつてわけだ」

「いや、それは……」

「わかつてるよ。お前のことだ。興味もない相手に声をかけたりはしないだらうしな」

よくわかつていらつしやる。井、これも長いつき合い故か。もちろん、悪い気はしない。自分をよく知つてくれている人がいるといふのは嬉しいことだ。

「そういや去年はお前と一緒にだったな」「でしたね」

確か朝までふたりでカラオケをやって死にかけた覚えがある。「

今の気に入つたから、もう一回歌え」とか平氣で言つからな。

「しつかし、色氣のないクリスマスだったよなあ」

「別にそんなものを求めてたわけじゃないでしょうこ」

「確かに。あのころのアタシは、クリスマスなんてバカ騒ぎできたらいいと思つてたからな」

そこで美沙希先輩は、僕の肩にぽんと手を置いた。

「誘つてくれたのは嬉しいけど、今年は相手が違うんだじゃねーの?」

頭の後ろで手を組み、そのまま体育館方面へスタスターと歩いていってしまう。その背中は「そんなわけで、この話はもう終わり」と言つていた。

「……」

前言撤回。

つき合いが長いのも考え方だ。……本当によくわかつていらっしゃる。しつかり見抜いているようだ。さすが僕の人生の先輩。

さて、結局アテにしていたふたりに断られ、ロミオである昼休みを迎えてしまった。

昨日のこえだの台詞からヒントを得て、別に女の子でなくともいいんだと思い当たり、最後の手段として浮田さんに声をかけてみた。

「断る」

「お前だけは断じて仲間に入れん」

「飛び散れ」

が、結果は散々だつた。

拳句の果てには、しつしと追い払われ、昼メシと一緒に食べることすら拒否されてしまった。どうでもいいが、飛び散れってなんだ。

「あつはつは。そりやそつなるよな」

そこに入れ替わるようにして現れたのは、午前中の休み時間にも会つた美沙希先輩だった。今は制服姿。一部始終を見ていたらしく

呵々大笑である。

「なんだかこうなつて当然みたいな言い方ですね」

「だつてそうだろ。聞いた話だと涼のやつ、周囲にも聞こえるようにお前に勝負を吹つかけてきたんだろ？ その時点でお前以外はぜんぶ味方なんだよ」

「は？」

「お姫様が何を『所望のかわかつてゐんなら、忠実な家臣はそつちへ動くに決まつてゐる。普通ならお前にだけいい思ひはさせるかつてなるところだけど、そつならないのがあの槇坂涼の人望だらうな」

「……」

つまり最初から僕に勝ち目のない勝負だつたわけだ。……どいつもこいつも簡単に騙されやがつて。

「で、どうするんだ？ テキトーに嘘ついて突っぱねるか？ 涼は、相手は誰だなんて問い合わせてくるようなバカ女じやないからな、どうにでもなると思うが」

「むしろそんな相手に嘘を吐く度胸はないです。……ま、潔くいきますよ」

本当のところ、美沙希先輩やこえだを誘つたのも、そこまで本気じやなかつたしな。僕だつてクリスマスは楽しく過ごしたい。意地を張りすぎた拳句、引き際を誤つて、せつかくの機会をふいにしたら元も子もない。……予定通りと言えば予定通りか。

「そう言つと思つたよ。ほら、お姫様がお待ちかねだぞ」

言われて学食を見回してみれば、いつもの窓際の席に槇坂先輩が座つていた。

ひとりだ。

噂によると、槇坂涼があの席に座つてゐるときは人を待つてゐるときだから空氣を読まなくてはいけないらしい。いつたいどこから出てきた噂だ？ また机の落書きじやないだろうな。

彼女は僕を見つけ合図を送つてくる。僕も片手を軽く上げ、それに応えた。

「それじゃあ先輩、失礼します」

「おう」

先輩と別れ、ランチを買つてからテーブルへ行く。

「どーも」

「こんちは、藤間くん」

僕は彼女の大人っぽい笑顔に迎えられ、向かいに座つた。

「美沙希さんと一緒にだつたのね。もしかして誘いたい女の子つて美沙希さん？」

美沙希先輩が槇坂先輩を『涼』と呼ぶように、彼女もまた美沙希先輩を『美沙希さん』と呼んでいる。ついでに、こえだのことは『サエちゃん』。どうにも学校生活がアウエーだ。

「まあね。でも、見事に断られたよ」

「そう。残念ね」

と、くすくす笑う。

これは勝者の、いや、黒幕の笑みか。

僕はだんだんと居心地が悪くなり 知らない振りをしていようかと思ったが、どうやらできそうになかった。

「というか、この勝負こういう結果になる以外なかつたみたいだな。あなたが周りを味方につけた時点で僕の負けは決まつていたも同然だ」

「ええ、そうよ。勝負はする前から勝つために手を打つておくものよ」

出来のいい弟を褒めるような口調の槇坂先輩。でも、残念ながら僕はこの解答を人からおしえてもらつたわけだが。

「勿論、手はひとつじゃないわ」

「聞きたいね」

「簡単よ。美沙希さんやサエちゃん、あと藤間くんが声をかけそうな女の子何人かにお願いしておいたの。彼が誘つてくるはずだから断つてねって」

僕は唖然とする。

それでこえだは予め僕がくるのをわかつてていたような口ぶりだつたし、美沙希先輩も僕が話を切り出す前に速攻で断つたのか。

「待て。でも、それは汚くないか？」

「そうでもないわ」と、槙坂先輩。

「だつて、それを言つておいたの、昨日藤間くんに会つ前だもの」

「言つたでしょ？『勝負はする前から』手を打つておくれ」「……」

今度は絶句。

つまり、僕に合格通知を突きつけて約束の履行を迫れば、こういう流れになると読んで予め美沙希先輩やこえだを抑えておいたのか？『誘つてくるはずだから断つて』見事に断定形だ。

「あなたは悪魔だな。きっと先の尖つた尻尾がついてるにちがいない」

「あら、今まで何度か機会があつたのに、ちゃんと見てなかつたのね。そう。だつたらクリスマスの夜にでも確かめてみたらいわ」

「……」

またきわどい台詞を。おおらかなのはいいが、もう少し場所を考えてほしいな。

「これでもクリスティの『アクロイド殺し』よりはフロアのつもりよ」

「確かに。論争の余地もないな。いいだらう。僕の負けを認めよう。

……それで、当田の希望は？どこに行きたいところとか」「どこでも。藤間くんとならどこだつて楽しんでみせるわ」
きつぱんと言つてくれる。

「でも、そうね、最後にあなたの部屋に行けたら最高だわ」

「あのな……」

軽い頭痛がしてくる。

と、そこで槇坂先輩はぐつと身を乗り出してきた。彼女がこうするときは回りに聞かせられない話をするときであり、イーコールろくでもない台詞を吐くときだ。

「もしかして藤間くんは、あの夜のことを持ったのかしい？」

「なつ」

ほら見る。しかも、今回は最悪の部類だ。

赤面する僕をよそに槇坂先輩は、頬に掌を当ててお居じみた調子でさらに続ける。

「それとも藤間くんがそういう気分のときしか呼んでもらえないのかしら？」

「おい」

「えつ」

思わず語氣が強くなってしまい、彼女は怯えたように体を振るわせた。

「あ。いや、悪い。驚かすつもりはなかつたんだ。でも、あまりそういう話をこんな人の多い場所では……」

「そ、そうね。謝るわ。ごめんなさい。ちよつと浮かれてたみたい」反省して項垂れる槇坂先輩。

浮かれてた、か。

僕は頭をがしがしと搔いた。こんなこと言いたくないんだけどな。

「まあ……本当のことと言えば、僕だって浮かれてるぞ」

それにこれじゃ僕がいじめているみたいだ。槇坂涼をいじめるだけ？ それこそ学校中を敵に回すようなものだな。

彼女は顔を上げ、僕を見た。

「そりやそりや、クリスマスなんだから。なんて言つて誘つてどう過ごうとか、ずっと考えてた」

僕はそっぽを向きながら言つ。

槇坂先輩は少しの間こちらを見ていたが、やがておかしそうくへ元しおりへ

すりと笑みをこぼした。果たして、おかしかったのは僕の姿か、それとも言つてる内容か。

「それって誰のため？」

彼女は訊いてくる。

「言つただろ？ 僕が誘おうと思つていた女の子のためさ」

「名前はおしえてくれないの？」

「もちろん。そんなの本人に言つたら負けだと思つてるからね」

「天邪鬼」

笑い、そして、やはつた居じみたため息を吐く。

「『ビ』で育て方を間違えたのかしら？」

「少なくともあなたに育てられた覚えはないね」

槙坂先輩は「だったら、これからわたし好みに育てるとしてなどど、おそろしいことを言い置いてから、さらに問うてくる。

「それで、その子を部屋に呼んだりするの？」

「ま、そのときの流れ次第かな」

「いやらしい」

しかし、その単語が示す意味とは裏腹に、どこか楽しそうな槙坂

先輩。

そう言われたら、いつ返すしかない。

「男だからね」

バレンタインDFS

2月14日はバレンタインデイ。

そんなことは誰だつて知つている。日本全国共通だ。
とは言え、後期試験を目の前にした高校生には、本来関係のない
話である。

「藤間ー。バレンタインだぜっ！」

「……」

こんなところにバカが野に放たれていた　と思つたら浮田のや
つだつた。

午前最後の授業の終了後。

講義棟を出て2月の寒空の下、学食を手指していた僕に、後ろから追いついてきた浮田がハイテンションで声をかけてきた。どうやら近くの教室で授業を受けていたらしい。よりよい人間関係を保つため知り合い何人かの時間割りは把握しているが、こいつは対象外商品だ。

「試験前のこの時期にバレンタインとは余裕だな。好きにすればいいけど、もう予定はあるのか？」

「ない！」

力いっぱい答える浮田。どうしてそれで浮かれられるのだろうな。「でも、まあ、もらえないとしても、男にとっちゃ一大イベントなわけじゃん？」

「そうか？」

「どいつが何個もらうかとか、どの女の子が誰にあげるかとか」「それだけ自分を蚊帳の外に置きながら今日という日を楽しめるそのポジティブさには感心する。

「中でも一番の注目は槇坂さんなんだけどなあ」

確かに槇坂涼の本日の動向は注目に値する。だが、浮田はそれを残念そうに言い、そういう言い方になるのには理由があった。

「でも、卒業したね」

「そ、うなんだよなあ」

わざとらしく頑垂れて落胆のポーズを見せる浮田。

そうなのだ。3年生は1月早々別メニューでの後期試験を終え、先日の卒業式をもってこの明慧学院大学附属高校を巣立つていった。槇坂涼はもうこの学校にはいない。

「槇坂さんのいない高校生活なんてっ」

「どうした？ 意義を見出せなくなつて自主退学か？ 僕は止めないし、むしろ迷つてるなら背中を押してやるつ」

「お前ね……」

と、横目で何か言いたげな視線を向けてくる浮田に、僕は肩をすくめてみせる。

さて、バレンタインか。

せつかぐの年に一度のイベントだ。それなりに楽しまないと損だとこゝう思いはある。が、この場にいない人間のことを言つても仕方がない。

僕は周りを見回した。記憶が正しければこの学食へ向かう流れの中にいるはずなのだが。 いた。

「悪い。知り合いに声かけてくる。先に行つてくれ」

浮田に断り、その小さな背中を手指す。

「こえだ」

僕の声に彼女 三枝小枝が振り返った。

「あ、真だ。やつほー」

こえだは無邪気に応え、先ほどの僕がしたよつと一緒に歩いていた友人を行かせた。

待つてくれていた彼女に追いつき、並んで歩き出す。

「どしたの？」

「ああ。お前、何か忘れてるんじゃないかと思つてさ

「何かつて？」

隣でこえだが首を傾げた。

「おいおい、そんなので大丈夫か？　お前だつていちおう女だらうに」

「いちおーとか言つなつ。れつきとした女だもん！」

そうしてむきになりながら、持つていたルーズリーフのバインダを僕の脇腹へと突き込んでくる。期待通りの反応だ。

「痛いだろ。……今日はバレンタインだぞ。ないのか、僕にチョコは？」

「あたしが？　真に？　なんで？」

いちいち区切つて聞き返すなよ。時々むかつくやつだな。でも　と、こえだは言葉を継ぐ。

「いちおー義理も義理、超義理のやつを考えただけじゃ、ビーセ涼さんからも『うんどうなつて思つたらバカラしくなつちやつた』『僕が槇坂先輩から？　そんな予定はないけど？』

「いや、そういうのつて普通、予定とか決めなくない？」

それもそいつか。

「会つてはいるんでしょ？」

「まあね」

槇坂先輩は去年のうちに受験勉強から解放されていた上、卒業までしていよいよ自由の身。おかげで好き勝手に遊びにきたり呼びつけたりしてくれるので。いつもが翌日学校でもおかまいなしに朝までいるのだから[冗談じゃない]。起きたら朝食ができるだけは助かるが。

「とは言え、あの人はここにいないし、会つ約束もないんじゃしょうがないぞ」

と、僕がそつまつた直後だった。

「おー、槇坂さんがきてるらしいぞ」

「うお、マジ？」

そんなやり取りが耳に飛び込んで、男子生徒ふたり組が早足で僕らを追い越していった。見れば他にも急ぎ足の生徒がちらほら。僕とこえだは思わず立ち止まり、顔を見合った。

「ほら」

「何がだよ」

再び歩を進める。先ほどよりもやや早足。

やがて見えてきた学務棟正面の学生掲示板の前に、小さな人だけができていた。僕が知る限りこんな状況を作れるのはひとりしかいない。案の定、人垣の隙間からよく見知った顔 横坂涼の大人っぽい顔が見えた。

囮んでいるのは1、2年生の女子生徒で、そのさらに外側に彼女の姿をひと目見ようと男子生徒が集まっているようだ。横坂涼の人気は未だ衰えず、といったところか。

「もう大学は決ましたんですね？　おめでとうございます！」

「ありがとうございます。次はあなたたちよ？　がんばってね」

祝辞に礼を言い、後輩たちへの応援も忘れない。

「今日は何しにこられたんですか？」

「職員室と学生課にね。事務的な用事」

好奇心旺盛な質問にも笑顔で答える。

常にやわらかい物腰を崩さない、大人の余裕を備えた上級生。これだから彼女は慕われ、憧れられるのだろう。

彼女が僕を見つけた。

が、同時、僕は逃げるように背を向け、その場を離れる。

「ちょ、ちょっと真！　真つてば！　声かけなくていいの！？」

「いいんじゃないか。何か用があるらしいしさ」

こえだの声に背中越しに答え、僕はそのまま学食へ向かった。

先ほど別れた浮田や、他2名の友人と合流し、昼食をとる。

それが終わりかけたころ、一通のメールが届いた。差出人は横坂

涼。

『どうして無視するの?』

そんな短文。

「……」

別に無視はしていないつもりだけだ。用があるらしいから声をかけなかつただけで。

心の中でそう反論していると、さらにもう一通着信。

『今お昼よね？ 終わつたらでいいから掲示板にきて。待つてるか
ら』

僕はため息をひとつ吐き、端末を閉じた。

「悪い、用事ができた。先にいつてる」

断り、席を立つ。

「まだ残つてゐるぞ」

「いいんだよ。健康のためには腹八分目を」

今まで思つたこともないことを口にして、トレイを持って食器返却口へと向かつた。

たぶんメールの内容からして、すでに掲示板前で待つていてのだろうが すぐに行くのも癪だな。僕は一度ロッカーに寄つて、次の授業の準備をしてからその場所へ行つた。

楳坂涼はさつきほどではないが、相変わらず数人の後輩に囲まれていた。卒業したはずの彼女が姿を現したのだからこの状況も無理からぬことだが、人を呼んでおいてそれはないだろうと思わなくもない。

と、

「藤間くん！」

再び僕の姿を認めた楳坂先輩は、今度は迷うことなく僕の名を呼

んだ。相手をしていた後輩たちに謝りながら輪を抜け、こちらに駆け寄ってくる。

ここにきて初めてわかったが、彼女は卒業したというのに制服を着ていた。ただし、羽織っているコートは学校指定のものではなく自前のもの。シックな黒のコートだ。外で会うときにたまに着ているが、こうして見ると制服にもよく合つようだ。

「さつきはひどいわ。無視していいてしまうなんて

僕のところまできた彼女は、開口一番そういう言つ。少しだけ怒っているようだ。

「忙しそうに見えたものでね。ていうか、何か用でも？ 見ての通り僕はこれから授業なんだ」

「わかったわ。じゃあ、歩きながら話しましょ」

彼女のその言葉をきっかけに、僕らは足を踏み出した。次の授業は確か4号講義棟。ここからいちばん遠い場所にある。

歩き出していく先に口を開いたのは槇坂先輩のほう。

「ねえ、もしかして怒ってるの？」

「怒…………ん？」

いきなり思いもよらないことを言われ、否定しようとするが、しかし、僕は思ふとどまる。

一步引いて己を客観的に見 ああ、と思った。

「今気がついた。どうやら僕は怒っていたらしい

「よかつたら理由を聞かせてくれる？」

今後の参考に、と彼女はつけ加える。

「突然前触れもなく学校にくるし。きてるならきてるで連絡ぐらいくれてもいいだろ

そう言つた途端、槇坂先輩はふつと吹き出した。

「あなた、普段は天邪鬼なのに、時々素直になるのね

「ほつといてくれ

確かに今、ひどく子どもっぽいことを言つた気がする。

「そういうところ好きよ。……いつおつ釈明させてもいいえる？」

不貞腐れて黙つてゐる僕にかまわず、彼女は続ける。

「いきなりきたのはあなたを驚かせたから。きてからも連絡しなかつたのは、あそこで待つていたら会えるだろ?と思つたのよ。……すぐに下級生に掴まつてしまつたのもあるけど」

学生掲示板の前は、学食へ行くならどの講義棟からでも必ず通ることになる。そして、その性質上、休講や教室変更の情報が張り出されるので、通るだけでなく田を通していく生徒も多い。ここで張つていれば確実と言える。

「で、そっちの用はすんだのか？ 学生課と職員室に用があつたんだろう？」

「あら、あんなの嘘よ」

さらりと言つてのける榎坂涼。

「いつもおつ担任の先生には挨拶にいつたけど。今日は藤間くんに会いにきたの」

「わざわざ学校まで？」

他にいくらでも時間と場所はありますなものだが。

「今日は何の日か知つてる？」

「さてね」

「そうやつてすぐに惚けるんだかい。……ほら、手を出して

彼女の口調は、拗ねる弟に呆れる姉のよう。僕は彼女のほうを見ず、手だけを差し出した。

直後、その掌の上に乗せられたのは、期待に反して驚くほど小さくて軽いものだった。……見れば銀色の包み紙に包まれた小さな物体。

「何だこれ？」

「あら、知らない？ ふつちょつといつお菓子よ」

「……」

知つてゐる。知つてゐるが、しかし……。

「待て。何かおかしくないか?」

「そう?」

今度は槙坂先輩が惚ける番だった。

「そうね、わたしもう一度素直でかわいい藤間くんが見たくなったわ。何がほしいか正直に言つたらあげてもいいわよ?」

彼女が今どんな顔をしているか、そちらを見なくてはわかる。例の天使の顔をした悪魔の笑みを浮かべているに違いない。

「そつちこそ受け取つてほしいものがあるならどう言えればいい

「素直じゃないわね」

「お互い様だる」

そのままふたりとも黙つてしまつた。

僕は素直に言つのが癪だから。彼女は僕が下手に出るのを待つているから、だらうか。言つ通りにするのは業腹ではあるが、このままタイミングを逃すのはそれ以上に馬鹿らしい話である。

僕は心の中でため息を吐いてから切り出した。

「えつと」

「あの」

が、その発音が彼女のそれと重なつた。

「……」

「……」

「……お先にどうだ

掌を差し向け、先を譲る。

「じゃあ、わたしが先に言つから、藤間くんも今言いかけたことを言つてね?」

そうして一拍。

「今日はバレンタインよね? 藤間くんにチョコを渡そうと思つて持ってきたの。わたしの気持ちよ。もうつくれる?」

「……」

言われた。

あまりにもストレートに言われてしまつた。

なら僕も言うしかない。

深呼吸をひとつして、気持ちを落ち着かせる。

「僕もあなたからもらえたなら嬉しいと思つ。よかつたらくれないか

？」

「……」

「……」

そして、再び互いに押し黙る。この変な沈黙はきっと恥ずかしさからくるものなのだろう。横田で隣を見れば、槇坂先輩はややうつむき加減だつた。

だが、やがてその彼女がくすくす笑い出した。

「素直じゃないわね」

「お互い様だろ」

さつきと同じやり取り。

「ええ、お互い様ね」

そう言いながら彼女はコートの内ポケットからそれを取り出した。赤い包装紙に包まれ、リボンがつけられたそれは、今度こそ間違いなくバレンタインチョコのようだ。あまり大きくはないが、そこにセンスを感じる。

「どうぞ」

「ありがとう。喜んでいただくよ」

まるでリレーのバトンのように差し出されたそれを、僕は受け取る。

「でも、こんなの僕が帰つてからでもよかつただろ?」

「久しぶりに人目の多いところで会いたかったのよ」

いたずらっぽい笑みを含ませて言う槇坂先輩。

いつたいそれに何のメリットがあるのかわからないが、彼女の意図した通りさつきからすれば違う生徒の目を引いているのは確かだ。

ひと目でそれとわかるバレンタインチョコはブレザーの中に入れて

おへこにしよう。

4号講義棟の前に着いた。

午後の最初の授業はここの大教室で行われる。その扉は目の前だが、僕は足を止めて槇坂先輩と向き合った。

「この後の予定は？」

「午後もフルに授業だ」

「大変ね」

そこで彼女はすっと距離を詰め、僕のネクタイに触れた。
そうしながら艶めかしく囁く。

「わたしに鍵を預けてくれたら、あなたのためにご馳走を用意して待つてあげるけど？」

「……」

それは甘美な誘い。

「……生憎、僕はまだ魂を売るつもりはないのでね」

だが、一度乗ってしまえば後は墮ちるだけの悪魔の囁きでもある。
……尤も、小口の契約はちょくちょくしているような気がしないで
もないが。とりあえず大口契約は辞退しておこう。

「残念」

そう言つて彼女は、緩んでいた僕のネクタイをきゅっと締め、離れた。暗に悪魔扱いされたことには特に文句はないのだろうか。

「午後の授業、がんばってね。また連絡するわ」

「ああ」

最後に大人の微笑みをひとつ僕に投げかけ、帰つていった。

彼女の『また』は下手をするとき日、僕の下校に合わせてかもしれないが。自由で羨ましいね、学校から解放された人は。

僕は彼女の背を見送りながら、先ほどもらった小さなお菓子を口に放り込んだ。

ソーダの味だった。

「槇坂さん、こないな……」

「そうだね」

浮かない感じの浮田の声に、僕は興味のない振りを装い、本を読みながら答えた。

次の授業はあの槇坂涼も履修している。だが、休み時間も半分が過ぎた今をもつて、まだ彼女は現れていない。珍しいことだ。

「休みなのかな……」

「さあね」

どうなのだろう。風邪でもひいたのなら、見舞いにこいと喜々として僕に連絡してきそうなものだが。いや、僕が彼女の家を知らない現状ではそうする意味はないか。では、本当に病欠？ それならそれでとっくに噂になっているはず。

本当にどうしたのだろうか。

「……」

階段席の程よい高さから、教室を見回してみる。

どの教室でも基本的に席は自由だが、彼女に限らず皆毎回だいたい同じような場所に座り、次第にそれが定着してくるものだ。槇坂先輩が座るのは決まって前から4分の1くらいの、中心からやや左より。今もそこを見てみれば、彼女が属する女の子のグループはいるが、肝心の槇坂涼の姿だけがない。

この授業が終わるまで現れなかつたら、美沙希先輩にでも聞いてみるか と、思ったときだつた。
にわかに教室が騒がしくなつた。

この感じは、そう、毎度お馴染み槇坂涼が登場したときのものだ。今日は焦らした分だけいつもよりざわついている。出入り口側を見れば案の定、真ん中のドア付近に彼女の姿があつた。
通路を歩く彼女は近くに座っている生徒たちに、どうして遅くな

つたのか尋ねられているようだ。そして、彼女はその都度歩調を緩めたり立ち止まつたりして答えている。見た感じ「ちょっと用事が」と誤魔化しているようだが。

ある程度までくると、一度、いつも一緒に座っている友達のグループを見た。

そして、今度は階段席を見上げ、僕を見つける。

「いらっしゃるなよ」という願いも虚しく、彼女は階段を上がりてくる。

「こんなにちは、藤間くん」

「どーも」

「いやかに挨拶をしてくる槇坂先輩に、僕は努めてぶっきらぼうに返す。

「今日は遅い登場だね」

「心配してくれた?」

「そりゃあしたさ。僕以外のみんながね
僕は読んでいた本を閉じて置いた。

「それで、遅くなつたのは何か用事でも?」

「いろいろあるのよ。女だもの」

これはデリカシイの欠ける質問をしてしまつたかもしれないな。

反省。

「ちょっとした企み」と

「……」

僕の反省を返してくれ。

「それはけつこうだが、願わくば僕を巻き込まないでもらいたいものだな」

「あら、それはむりな相談だわ」

槇坂涼はそんな恐ろしいことを、にっこり微笑みながら言つ。
そこでチャイムが鳴つた。始業の合図だ。

「座つたら？」

「大丈夫よ。先生がくるまで、まだあるわ。……といひで、今日は何を読んでたの？」

僕の言葉を軽くかわして、彼女は聞いてくる。こゝに屈座つてまで聞くことだろうか。

書店のブックカバーのついた本を、僕は一瞥した。

「『名言で学ぶ哲学入門』」

「藤間くんにしてはずいぶんと軽い感じの本ね」

僕の口から出たタイトルに、槇坂先輩は拍子抜けしたようだつた。基本的に翻訳ものと古典名作に偏る傾向はあるが、かと言つて重厚なものをお好んでいるわけでもないつもりだ。

「哲学なんてただでさえ小難しいんだ。少しかじる程度ならこれくらいひとつつきやすい本で十分さ」

「それも一理あるわね」

彼女は苦笑する。

「何か好きな言葉はあるの？」

「『万物は数でできている』」

「ピタゴラス？」

「当たり」

三平方の定理で有名なピタゴラス。

音楽の和音が比例関係になつていることを発見した彼は、数の性質が世界の構造を支配していると説いたのだ。

数学者であつたピタゴラスは、同時に宗教集団の教祖でもあつた。魂は不死であり『運命の輪』と呼ばれる、いわゆる輪廻転生の輪があると信じていた。そして、面白いのは罪や汚れにまみれた魂がその輪に巻き込まれ、彼らはそこから離脱することを主張していたというのだ。

「後は、言葉ではないけど、哲学を用いて理性的に神の存在を証明しようとしたトマス・アクィナスかな」

と、そこまで言ったところで、前方のドアから先生が入ってきた。

またざわつく教室。取っていた席を離れていた生徒が皆、いそいそと戻っていく。

「もうきたのね」

一方、どこかのん気に聞こえる槇坂先輩の声。

「じゃあ、仕方ないから藤間くんの横に座らせてもらおうかな

「……」

まさか最初からこのつもりで遅くきたのか？

「はい。早く席に着くよう」

マイク越しの先生の声は、特に槇坂先輩に向けられたものというわけではなく、まだ席についていない生徒全員を急かしたものだ。

「どーぞどーぞ。さあ、一いちらへ」

浮田だった。先ほどまでの今にも死んでくれそうな声は一転して、鬱陶しいほど元気になつている。それもそのはず。僕の隣の席は僕と浮田との間である。そこに座ればこいつにも多大な恩恵があるのだ。……そうはいくか。結局、最後はやつの言葉が決め手となつた。

「わかった。なら僕が詰めるから、ここに座つてくれ。……ほら、

浮田、お前はもうひとつ向こうに詰めろ」

なぜかつて？ 男と並んで座つても気持ち悪いだけだからだ。

「お前え……」

まるで井戸の底から聞こえてくるみたいに、恨めしそうにうめく浮田。僕の後ろではこのやり取りを見て、槇坂先輩がくすくすと笑つていてる。

結局、一列5人が掛けられる机は、端から槇坂先輩、僕、空席、そして、浮田に知らない生徒、という奇妙な並びで座ることになった。

授業がはじまつた。

最初しばらくは、槇坂涼がなぜそこに座るのかと皆当然感していたようだが、彼女自身がいつもと同じように真面目に授業に臨んでいたため、次第にその混乱も落ち着いていった。僕も似たようなもの

だ。5人が掛けられるとはいって、実際に5人で座ると想像以上に窮屈だ。しばらくはこの肘と肘、肩と肩が触れそうな距離に落ち着かない思いをしていたが、授業に向かううちにそれも意識しなくなつていた。

尤も、それが油断につながつたとも言えるが。

授業も半ばに差しかかったとき、不意に彼女が囁いてきたのだ。

「デート、いつにする？」

「ツー？」

あまりの不意打ちに喉が詰まつて、咳き込んでしまつた。

「どうした、藤間？」

「い、いや、何でもない」

隣から聞いてくる浮田に言い置いてから、槇坂先輩を睨みつけたかつたのだが、授業中なのであからさまなことはできない。そこまで計算に入れているのか、彼女は心持ち僕のほうへ体を傾け、さらに問いを重ねてくる。

「ねえ、どうする？」

「今は授業中ですよ、槇坂センパイ。私語は慎みましょう」嫌味を含めて言い返すのが精一杯だった。

すると彼女は、今度は単語帳を取り出してきた。意外と古典的な勉強の仕方をしているんだな。そう思つてゐる僕の前で、次にそれをひとつ束リングから取り外し、僕と自分の間に置いた。そこから一枚取り、なにやら書く。

『『デートはいつがいい？』』

「ひらひらすっと差し出されたカードには、そんな文面が。僕はそれをしばらく見つめてから、おもむろに裏返し、ペンを走らせる。

『When is good as for going to date?』

それを見た槙坂先輩は、また新しいカードを取つた。

『よくできました。でも不正解です。わたしが聞いているのはそういうことじゃないのよ?』

小さいながら読みやすい文字で書かれていた。
続けてもう一枚。

『この前約束したでしょ?』

『忘れた』

勿論、忘れた振りをしているだけだ。それ以前にあれを約束といふのだろうか。誘導尋問の上、僕は了承の言葉を口にしていないはずなのだが。

『遊園地がいいわ』

『子どもっぽいね』

『まだ大人じゃないもの』

「……」

この場合、大人の定義とは何だろうな。

『ひとりで行けば?』

『デートって言つてるでしょ』

『断る』

『ならあなたが行き先を決めて』

『断る』

『それ、さつきと同じカードよ?』

『返事が同じだからね』

時代はエコだ。人間は大量生産大量消費の時代にさよならを告げるべきだろ。

『見る?』

『何をだ!?』

『冗談よ』

いきなり脈絡もなく想像の余地の大きい冗談をはさまないでもらいたい。

なにげなく斜め下を見れば、ミニ丈のスカートから伸びる槙坂先輩の太ももがあった。……痛つ。シャーペンで脇腹を突かれた。ペン先がカツターシャツを貫通して、わりと遠慮なく刺さる。

『この前のカフェ、アルバイト募集中だって』

いつこうに首を縦に振らない僕に、今度は雑談を投げかけてきた。

『応募してみれば?』『あなたが店にいれば、きっと売り上げは倍増だ』

『藤間くんも一緒にどう? 社会勉強は必要だわ』

社会勉強ね。毎日の生活に新しい刺激を追加するならそれもいいかもしない。あの店の程よい暇を加減も、そう考えればちょうどいい感じだ。しかも、槙坂涼と一緒にやって?

『考え方』

僕の返事を読んだ彼女は小さく笑った。
それにも と、ふと思つ。

『何で授業中にこんな話をしてるんだ?』

最初のデーター雲々の話は兎も角として、雑談にまで翼を広げる必要はない。しかも、わざわざこいつそりと筆談をしてまで話すようなことだろうか。

対する彼女の返答は明快だった。

『楽しいからでしょ』

『なるほど』

と、そこで槙坂先輩がまたこちらへ体を傾けてきた。やや笑みを含んだ小声で囁いてくる。

「でも、そろそろちやんと授業を聞いたほうがいいわね」

「同感だ」

僕もさつきからノートだけは取っているが、先生の話がまったく頭に入つていなかつた。

筆談に使つたカードをふたりで片づける。どうでもこゝのような話でずいぶんと浪費したものだと改めて思う。少し可笑しくなつて、笑えてきた。

成り行きか必然か、槙坂先輩と一緒に学食で昼食を食べた後、昼休みのうちに図書室へ行くことに決めた。

図書室は学務棟4階。階段を歩いてのぼる。

それはいいのだが。

「エレベータは使わないの?」

なぜこの人までついてきてるのだろうな。

「若いんだから、これくらい歩けるだろ」

（）明慧学院大学附属高校は単位制で生徒が教室を行き来するスタイルをとっているせいか、各棟に一基ずつエレベーターが設置されている。勿論、車椅子や松葉杖の生徒を想定したものだ。

「ああ、そういえばあなたは僕よりもひとつ年を喰っているんだつたな」

「そういうときはね藤間くん、ひとつ大人つて言うのよ」

「……」

さつきは大人じゃないつて言つてたくせに と思つたが、言つのはやめておいた。やりにくい展開になりそうな気がしたからだ。

「単に極力エレベータはあけておきたいと思つてるだけさ」

実際、3年生には車椅子の生徒がいて、その人のためにもエレベータはいつでも使えるようにしておきたいのだ。尤も、遠慮なく使うものぐさな生徒も多いから、僕ひとりがそう心がけたところあまり意味はないかも知れないが。

「そういう優しい気持ち、唯子が聞いたら喜ぶわ」

「知り合いなのか？」

「ええ。いくつか授業が同じなの」

聞けば時々見かける人は、伏見唯子といつ名前らしい。

2階を過ぎて3階へ。

2階には職員室があり、先生だけでなく生徒も出入りするのでわりと賑やかなのだが、3階からは特別教室のフロアになつて一気に寂しくなる。

「……」

思わず立ち止まつて廊下の先を見れば、突き当りまで生徒の姿はまったくなかつた。

僕が足を止めたのに気づかず階段を上がつたのか、槇坂先輩の声が上から降ってきた。

「いや、別に。……ツ！？」

振り返った僕の眼に飛び込んできたのは、階段の中ほどに立つ彼女の足だった。

小さな靴下とローファーに包まれた足先に、細い足首。そこから視線を上げれば、息をのむような脚線美が短いスカートの奥へと続いていた。

「あ、あまりそんなところで無防備に立たないでくれ」「！？」

僕は慌てて目を逸らし、彼女はようやく気づいたようにスカートの裾を手で押さえた。……大丈夫だ、ギリギリ見えてないから。

「藤間くんって意外と紳士なのね」「

「意外はよけいだ」

「まったく……」と、その迂闊さに呆れながら、階段に足をかけたそのときだった。

「ふうん」

何かに納得したような榎坂涼の声。
そして、

「じゃあ、こいつのはどう？」

それはまるで魔羅の囁き。

そこに混ぜられた抗いがたい力に負けて顔を上げれば、彼女は太ももの横辺りのスカートの裾に両手を添えていた。

「な……」

何をするつもりだ。そう言おうとしたが声は出ず、目は彼女の次の行動に釘づけになつていて。

彼女はそのままスカートの裾を、太ももの上を滑らせるように、少しづつ、ゆっくりと引き上げていく。すぐに本来なら見えることのない、スカートの奥に隠されているはずの肌が露になつた。それだけで眩暈を覚えるような強烈な背徳感だった。

やがて決定的な境界線を越え、

「ツー？」

「なーんて」

瞬間。

彼女はおどけた調子で手を広げてみせた。手から離れたスカートがもとの位置に戻る。

「冗談よ」

「あのな……」

僕は金縛りが解けたみたいに体の自由を取り戻し、体中の力が抜けるような盛大なため息を吐いた。

「友達から聞いたの。男の子ってこうこう『見えそうで見えない感じ』が好きなんだって。……ほんと?」

「……否定はしない」

だからって実験しないでくれ。破壊力がありすぎるのだから。

「どきどきした?」

「まあ、ね」

まるでいたずらを成功させた子供のようだ、軽快な足取りで槇坂先輩が階段を降りてくる。

「あなたの胸、触らせて」

そのまま獲物を追い詰めるみたいに距離を詰め、僕がまだ何も言つていないので手を伸ばしてきた。彼女のしなやかな指先がブレザーの内側に滑り込み、心臓の真上に掌が当たられた。背筋がぞくりとする。

「すごーい。本当にどきどきしててる」

「だからわざわざうつ言つた」

「わたしのせい?」

「他に誰がいるのかおしえてほしいね」

それを聞いて可笑しそうにくすくす笑う槇坂涼。……まったく、いい気なものだな。確かに僕の心臓は早鐘を打つていて、半分はさつきのあまりにも危ない悪戯のせいだが、もう半分は今こうして触れられていることが原因だというのに。

「いくつか勘違いがありそうだから言つておけば、他の女の子じゃこまではならないよ。相手があなただからこそだ」

「そうなの？ つまり藤間くんをこんなにどきどきさせられるのは、わたしだけってことね。嬉しいわ」

それだけ楳坂涼という人間は僕にとっての危険物だということだ。
少しは自覚してくれ。

「それと」

「それと？」

言い淀む僕に先を促しながら、ようやく彼女は触れていた手を引いてくれた。

「……『見えそう』じゃなくて、『見えてた』」

「え？」

直後、笑顔を凍りつかせ、目を見開く楳坂先輩。手は咄嗟にスカートの裾を押さえているが、それは今さらだろ。

表情で「ほんと？」と聞いてくる。

「……薄いピンク」

「……っ！」

そして、耳まで真っ赤にして顔を伏せてしまった。どうやら完全に自分でも想定外の自爆だったらしい。要因は高低差か。

「……」

「……」

「……」

お互に黙り込む。

もう少しからかってやろうかと思ったが、さすがにこれではむりだな。というか、正直今のこの状況をどう扱つていいか計りかねていた。世の中、わかつても指摘しないほうがいいこともあると、いうことだらう。

「えっと、悪い。僕は先にいくから」

とりあえず消えたほうがよさそうだと思つたのだが、しかし、その僕のブレザーの端を、彼女は素早く指でつまんだ。それでもまだ顔は伏せたまま。

少しして。

やがて顔を上げた彼女は、びっくりするほどの中の笑顔だった。

「デート、次の日曜でいいわよね？」

「……」

くそ、そうきたか。

そつちが勝手に自爆しただけだと思つのがな。
とは言え。

「ああ、任せる」

これは拒否できなかつた。

日曜日。

槙坂涼とのデートの日だ。

とは言え、今日は約束したあの日から2度目の日曜。急に彼女が今週ではなく来週にしてほしいと言い出し、ドタキャンならぬドタ延が発生したのだ。……まあ、僕には拒否権もない上、そもそも反対する理由もないのにいつだって同じなのだが。

待ち合わせ場所は、先日カフェへ行くときに使った駅 たぶん槙坂先輩の最寄駅になるのだろうが、その駅の改札前だ。僕がその場所に着いたのは、約束の時間の30分前。早く着き過ぎてしまつて、当然のように彼女の姿は見当たらない。

「……」

それはいいのだが、どうにも空気がおかしい。ありきたりな駅前の風景に、何か異質なものが混じっているような。

何が原因だろうと辺りを見回してみて あつた。あれか。

男がふたり、柱を背にした女の子を逃げられないようなかたちで囲んでいた。見たところナンパのようだが、そのやり方がかなりしつこくて嫌らしいようだ。それを回りの人間が、気にしつつも見て見ぬ振りをしているという構図。

そして、あるうことかその女の子というのが、我らが槙坂涼だつた。

「まったく。テンプレートなイベントに巻き込まれてくれる……」

助けないわけにはいくまい。というか、むしろ潰すべきだろうな、あれは。僕はそう決めて、早足でそちらへと近づいていった。

「何度言われても、行けないものは行けません。人と持ち合わせしますから」

「だからあ、俺たちと一緒にいくほうが絶対に楽しいって」

「あ、待ち合わせって相手は女の子? だったら2・2で完璧じゃ

ん

二人組の年は僕よりも少し上くらいだらうか、絵に描いたようなチャラい男たちだった。まあ、この手の男は実際、遊び慣れて場を盛り上げるのに長けてたりするから、喜ぶ女の子も多いとは思う。

「悪いけど男だよ」

僕はそこに遠慮なく言葉を割り込ませた。

「ああ？」

「なんだあ？」

いつせいにチャラ男が振り向く。

「藤間くん！」

そして、その隙を突いて槇坂先輩がこちらに駆けてきた。隠れるよつに僕の後ろに回った彼女に、「もつ少し離れてろ」と小声で告げる。

「誰お前？」

「この人の本日のお相手を仰せつかつてるものさ。悪いけど帰つてくれないか」

『悪いけど』も何も、おとなしく帰るのが筋だらう。

しかし、チャラ男その1が僕の頭のてっぺんから足の先まで、まるで值踏みでもするように何度も見ながら近寄つてくる。不愉快だな。

「……パッとしないやつ

ほつとけ。

「ねーねー、こんなやつよりさ

僕の横をすり抜けて性慾りもなく槇坂先輩に言い寄つとするが、それはさすがに無防備すぎるだらう。

「お前、しつこいよ」

僕はそいつの手首を掴んで捻り、さらに足を払つてバランスを崩したところに自分の体重を預けてともに倒れ込んだ。「ぐえつ」と情けないうめき声が聞こえ　そして、その瞬間にはもう、僕は男を地面に組み伏せていた。

「てめえ」

「動くんじゃねえ！」

それを見てこひらに詰め寄りつとしたチャラ男その2を、その体勢のまま一喝する。

「動いたらこいつの腕を折る」

「ふざけ」

「ま、待ってくれ！ 折れる！ マジで折れちまうよー。」

その2がまだ動こうとするので少し力を入れてやつたら、その1が今にも泣きそうな悲鳴を上げた。それはそうだろう。ほぼ限界まで捻っているのだから。正直、あの人にはどれだけ不快な思いをさせたかと考へれば、このままへし折つてやりたくて仕方がない。

今度こそその2の足が止まった。

「……」

「……」

「うう……」

僕とその2が睨み合い、地べたを這いつぶばらされているその1がうめく。

たつぱり1分は経つてから、僕はチャラ男から手を離して立ち上がりた。2、3歩下がって、槇坂先輩を庇うようにして立つ。

遅れてチャラ男も肩を押さえながら、のそのそと体を起こした。

その1とその2、ふたりして忌々しげに僕を見ていたが、そのころには野次馬も集まってきていて、これ以上騒ぎを大きくできるような雰囲気ではなくなっていた。さつきまでこいつらが質の悪いナンパをしているのを見ていた人も多く、のん気に喧嘩両成敗を唱えるものは少ないだろう。

「ちつ」

やがて二人組は分の悪さを悟り、舌打ちひとつして立ち去つていった。ひとりは痛そうに肩に手を当てたままだ。折れる寸前まで捻つてやつたから、しばらくは腕が上がらないだろうな。

「すごい。藤間くん、こんなこともできたのね……」

「まあ、ね」

「これも我が師のおしえの賜物だ。とは言え、あまり自慢できたものでもないので、返事が苦笑混じりになる。」

「というか、他に何ができるというわけでもないので、むしろこんなことくらいしかできないやつなのかもしれないな、僕は。」

「それより 大丈夫か？」

「え、ええ」

最後の騒ぎで興奮していたのか、ようやく自分のおかれていた状況を思い出したようだ。

「藤間くんは？」

「別に。せいぜいズボンが汚れたくらいだね」

僕は答えながらジーンズを払った。

「悪かった。僕がもつと早くきていればよかつたのに」

「ううん。わたしも浮かれてて早く着きましたから」

首を横に振る彼女。

考えたらまだ予定の30分前だったな。浮かれているのはお互い様ということか。

「まったく。ナンパならもつとつまく、潔くやつてほしいね。男ふたりでひとりの女の子を引っ掛けようとするかよ」

「まるでやつたことがあるみたい」

「あるわけないだろ」

いつたい僕をどんなふうに見てているんだ。

「ふうん」

彼女は何か言いたげな目で僕を見る。

「何だよ？」

「案外やることはあると思ってた。例えば」

「入学してすぐなのに上級生の女の子に話しかけたり、とか」

「……」

あまりの不意打ちに頭がくらつときた。待て、それは。まさか覚えていたのか……？

僕の最初の大失敗。

それからずつと、できるだけ目立たないようにしていったところに。

彼女の顔を見る。

「……」

「……」

だが、僕の無言の問いにも、槇坂涼はすべてを見透かしたような瞳と微笑を返してくるだけ。何も答えようとはしない。

もういつそのことこちらからはきりと聞くべきか、と思つたとき。

「あ、そうだ」

彼女が不意に声を上げた。

「藤間くんのこと、今日だけでも真つて呼んでいい？」

「は？」

いろいろと唐突だな。提案も唐突なら話題の切り替えも唐突で、まるでさつきの話題などなかつたみたいだ。

「だつてせつかくの『デート』だもの。それくらいいいでしょ？」

ね？」と、彼女は訴えてくる。

「槇坂先輩の好きなようにすればいい。僕は槇坂先輩に自分の呼び方を強要するつもりはないのでね」

「あら、そうやって槇坂先輩槇坂先輩つて繰り返すのは、しばらくそう呼べないから?」

「まさか。僕に『えらるべき自由を暗に主張しているだけ』」

次なる要求がこちらに飛んでこないよう願うばかりだ。

「そう。それは大切なことだわ。でも、真はわたしが何を望んでるかはわかってるのでしょうか？」

「……」

が、やはりそもそもいなかった。

僕は諦めのため息を吐く。

「わかったよ、涼」

「素敵！」

いきなり槙坂先輩は僕に飛びついて、腕に腕をからめてきた。

「名前で呼び合つなんて夢みたい！」

そのまま僕を振り回しながらくるりと一周回り、また離れた。まるでスペースクラフトのスイングバイだな。

「さ、行きましょ、真」

感激冷めやらぬ彼女は、満面の笑みで無邪気に僕を急かす。どうやら、「機嫌は最高潮のようだ。

それはそうと。

ひとつ確信したことがある。

槙坂涼はあれを覚えていない。

多分だが。

「……」

ま、今はそんなことは関係ないか。待つに待つたデートなのだ、

今日のところはそれを楽しむとしよう。

第8話 その1（後書き）

3月7日 投稿
3月9日 脱字訂正

当初の予定では混雑を避けるため開園のちょっと後に行くつもりだったのだが、この調子では開園時間ぴったりに着きそうだ。それもこれもお互い待ち合わせ場所に早くきてしまったせいだ。
おかげで今乗っている電車も家族連れで混み合っている。
目指すは遊園地前の駅だが、ひとつ前の駅を出た辺りでもう巨大観覧車が窓の外に見えていた。

電車を降りて駅を出、前の広い道路を横断歩道で渡ればそこはもう遊園地だ。観覧車はさらに大きく見え、うねるようにして走るジエットコースターのレールまでもが窺えた。

入場の列に並びながらふたりでアトラクションの一部を見上げていたが、僕は先に視線を戻し、彼女を見た。

白いワンピースに、肩にはショールをかけた大人っぽい、おとなしい出で立ち。淡い色でまとめた服は、長い黒髪によく似合っていた。

対する僕は、ジーンズにロングTシャツ姿。
と、僕の視線に気づき、槇坂先輩が僕を見た。目だけで「どうしたの?」「と尋ねてくる。

「いや、僕は槇坂先輩に釣り合うのだろうかと思つてさ」
思わず考えていたことを馬鹿正直に口走ってしまった。
すると彼女はくすりと笑みをひとつこぼす。

「あら、そんなこと?」

そして、僕のロンTの両肩を指でつまみ、崩れていた着こなしを整えてくれた。これが学校ならネクタイを直してくれていたことだろう。

「誰がどう見てもお似合いの恋人同士よ」

「それはそれで僕としては不本意だな」

「口の減らない子ね。……大丈夫よ。誰も気がつかないだけで、あ

なたは本当はどんな女の子だって振り向く男の子よ。ずっと見ていたわたしが保証するわ」「……」

「ずっと、ね。

「それと 涼、よ」

「うん?」「うん?」

「今日は涼って呼ぶ」と。そう約束したでしょ、真「わざわざ最後の『真』の部分をはつきりと発音する彼女。……ここまでどうとも呼ばないようにしていたんだけどな。

「気をつけるよ、涼」「よろしい」

槙坂先輩、もとい、涼はできのいい弟を見る姉のよう、「元気」嬉しそうに笑った。

気がつけば前との間隔が開いていて、僕らは急いでそこを詰めた。

程なくゲートをぐぐり、園内へと入場することができた。所詮は地方の遊園地なので、どこかの世界的有名な施設とは比べるべくもないが、それでもなかなかに立派だった。まずはインフォメーションセンター やグッズショップ、自販機コーナーなどが立ち並ぶ一角だが、そこで涼は足を止め、辺りを見回していた。

「どうした?」

「初めてきたから目移りしちゃって」

そう言つて苦笑。

「どこから回る?」

「僕はどこでも」

「じゃあ、やつぱりここの大玉のあれかしら?」

見上げた視線は巨大観覧車……ではなく、ジェットコースターをフォーカスしている。確かにテレビで見るTVでもこれをメインに宣言していたな。

「……田玉なら最後にとつておけばいい

願わくばそのまま忘れてくれ。

「……」いつのまは最初に乗つて、気に入つたらまだ乗るものよ。……

もしかして真、怖い?「

そこでこちらの様子の変化に鋭く気づいた涼は、首を傾げながら顔を覗き込んでくる。長い髪が重力に従い、鉛直方向下向きに垂れた。

「……まさか

と答える僕は、なぜだろうか彼女と視線が合わない。

「わう。じゃあ、行きましょう

」いつのまは限りで悪魔は人の心の奥底を読んだりせず、言葉を額面通りにとらえる。……わざとなのだらうけど。

彼女は腕に腕をからめてしつかりと僕を捕まると、そのままジエットコースターの列へと向かっていく。

僕の中にあるあるほどあつた抵抗の意思は、肘に感じるふくよかな感触によつて根こそぎ奪われていた。……これはわざとじやないのだろうな。天然の悪魔め。

かくして、僕は立て続けに、いわゆる絶叫系につき合はされた。

まずはショットコースター。

さすがここは田玉。宙返りしたくらいから、何がなんだかよくわからなくなつた。

次に、巨大な船型の乗りものが振り子運動をするアトラクション。振り子の最高点での、内臓が浮き上がるような感覚がなんとも気持ちが悪かつた。

そして、フリーフォール。

自由落下の時間が永遠にも思えて、気が遠くなりかけた。

結果。

僕はベンチに座り込み、背もたれに首を乗せて青空を見上げていた。

「……わかった。僕が悪かった。僕はあの手の乗りものは苦手なんだ」

わざわざ白状せぬとも、この姿を見れば誰でもわかることだらうが。……あー、気分が悪い。このまましばらく風に当たつていよう。そんな僕を見下ろし、涼はおかしそうに笑っている。彼女はまつたく平気な様子だ。こういふのは女性のほうが強いといふのは本当だろうか。

「最初からそう言えばよかつたのに」

「言ったところで勘弁してもらえたとは思えないけどね」

「そうね。最後のフリーフォールくらいはやめてあげたかも」

「……」

ありがたくて涙が出るね。文句のひとつも出ない。

「だらしないわね。女より先に黒てる男は嫌われるわよ」

「何の話だよ……」

もうまともにしき合ひの氣も起こらない。

「……知りもしないのに知ったふうなことを言ひ」

「いい、いいでしょ。知識はあるんです」

僕が不機嫌に任せて少しばかり棘のついた言葉を返すと、それが涼にとつては思いのほかクリティカルだつたらしく、不貞腐れたようになっただくまくし立ててきた。

それから彼女は、すっと僕の隣に座り、

「前から聞いたかったのだけど」

と、改まつた口調で切り出してきた。

「……真は、あるの？」

「何を？」

「その…………したこと」

「は？」「

遅まきながら質問の内容を理解し、僕は頭を跳ね上げた。涼を見る。彼女もまた僕のほうへとゆっくりと顔を向けた。

「……」

しばらく見つめ合ひ、

「勘弁してくれ。『こんなとこでそんなこと聞くかよ』

僕はもう一度背もたれへ首を倒した。

「わ、わたしにはわりと大事なことなのよ」

「わりと、だる」

「おおいに

「そうかい。でも、ノーロメントだ」

僕は涼の言葉を無視し、ベンチから立ち上がった。

「さて、じゃあ、そろそろ次に行くか

「もう

遅れて彼女も腰を上げ、後を追つてくる。何が悲しくて遊園地でそんな話をせねばならないのか。

さすがに涼も引っ張るような話題でもないという自覚があつたらしく、いつまでもしつこく聞いてくるようなことはなかつた。

その後、おとなしめのアトラクションをいくつか回り、

昼。

なのだが、時間が悪かったようで、昼食を取ろうと入ったレストランはうんざりするほど込んでいて、結局、僕らは先にグッズショップを見てみることにした。

「ねえ、これなんてどうかしら？」

何を買うという目的もなく店内を見て回っている最中、そう言つて涼が手に取つたのはケータイのベルトストラップだった。特にどうといふこともない、この遊園地のマスコットキャラがついただけの代物。

「いいんじゃないか

「……」

「どうでもよさそうな返事ね」と、じっと僕の顔を見る涼。

「この状況下で正しい解答をした男がいたらつれてきてほしいね」「どう答ても不満そうな顔をするのが女の子だ。個人的にはこの場合、名作スペースオペラから台詞を押借して「模範解答の表」がつたら見せてもらえないか」と答えるのがいちばん皮肉が利いていいと思つていい。

「実際、悪くないんじゃないか。ベルトの赤もそんなに安っぽい色じゃないし。シンプルでいい」

「そう? 真がそう言つなら、これにしようかな」

彼女は気に入つた様子で、改めてそれを眺めた。

「欲しいのか? だつたら僕が買つよ」

「ほんと? いいの?」

「いいからいいと言つてる。ま、多少責任もあるけど」僕が背中を押して決心させたみたいでどうにも、ね。

彼女の手からそのストラップを抜き取り、僕はレジへと向かつた。遊園地という付加価値のおかげでこの手のアイテムにしては少々高かつたが、かと言つて目が飛び出るほどといつわけでもなく、まあ、これくらいなら許容範囲だろう。

清算をすませて戻り、小物用の袋に入れられたそれを涼に渡す。

「ありがとう。真からの初めてのプレゼントね。嬉しいわ」

そう言つて彼女は笑つた。相手が誰であれ、喜ぶ顔を見るというのはいいものだ。

「わたしもあなたに何か返さないと

「いいよ、そんなの。」ひちはそんなつもりでやつたわけじゃないんだ

「実はもう決めてあるの。これよ」

と、差し出してきたのは、先ほど僕が涼に買ったのと同じ携帯ス

トラップだつた。こっちはベルトの色が黒。シックにまとまっている感じではある。

「どう?」

「いことは思うナビ、でも、それじゃ おんなじじゃないか? 結局、自分で自分に買つてゐるようなものだ」

だからと言つて、値段が違えばいいといふものでもないだらうけれど。

「あら、ぜんぜん違うわ。わたしのは真がプレゼントしてくれたもの。これはわたしが真に買つてあげるもの。大事なことだわ」

「そういうものか?」

「そういうものよ」

そこでウインクひとつ。それだけで何となく納得してしまった。

……単純だな僕は。

客の少なくなりはじめたこゝを見計らつてレストランに入った。少し遅めの昼食。

注文したものがくるまでの間、涼は早速先ほどのストラップを自分の携帯電話に取りつけようとしていた。

「こんな感じね」

手先が器用なのか、特に手間取ることもなく今まで着けていたものを外し、新しいものへと着け替える。

「ケータイが赤だからよく合つたな」

「わたしもそう思うわ」

彼女は端末を、ストラップがよく見えるようにして、そつとテーブルの上に置いた。

「真のも貸して。つけてあげる」

今度は僕のらしい。手を差し出してくる。

言われた通りポケットから端末を出して そこで僕は手を止めた。

「中は見るなよ?」

先に釘を刺す。

「どうして？」

「待ち受けを見られたくない」

「真のつてプリインストールされてたような画像じゃなかつた？」
よく知つてるな……つて、思い出した。彼女はケータイ誘拐の犯人だつたな。

「変えたんだよ。見られたくない」

もし涼に見られたら、僕はここで舌を噛んで死ななくてはならぬ。……わりと本氣で。

「いつたいどんなのに変えたのかしら？ そう言わると負けに見たくなるけど 約束するわ。見ない」

「……」

一瞬どりじょうかと迷つたが、涼を信じて渡すこととした。

5秒前の約束など簡単に反故にして今にも開けるんじゃないかとはらはらしたが、彼女はそんな素振りなど微塵もなく、すぐにつけ替えはじめた。特に思い入れがあるわけでもない輪つか状の紐がついただけのストラップが外され、新しいベルトストラップへと交換される。

「はい、できたわ
程なく作業終了。」

赤に赤だつた彼女のものと同じく、黒い僕の端末にも黒のベルトストラップがよく似合っていた。

テーブルの上にふたつの携帯電話が並べて置かれ、
瞬間、

ああ…… と、僕は心の中でうめいていた。

今ごろやつと気がついた。これじゃ色が違うだけのおそろいじゃないか。

「どうかした？」

「いや、別に」

「ひらの微妙な変化に気がついて涼が聞いてきたが、僕は短い言

葉で誤魔化す。

丁度そこで頼んだ料理が運ばれてきた。

天を仰げば、青空のキャンバスにはひと筋の飛行機雲が描かれていた。

午後はさらにおとなしい、というか、むしろのんびりしたアトラクションばかり回っていたのだが、観覧車を降りた後、涼がまたジエットコースターの乗りたいと言い出し、むりやりつづき命わされる羽目になった。

その結果として、また僕はベンチでぐったりしているわけだ。

涼は何か冷たい飲みものを買ってくると言つて、今はここにはいない。そろそろ戻つてくるころだらうかと背もたれに乗せていた頭を起こした。

「ん？」

確かに戻つてきてはいたが、僕の正面少し先で両手に缶ジュースを持った涼がきょろきょろしていた。見失つてしまつたのだろうか。

「涼！」

呼んでやる。

「真！」

するとすくに彼女もこちらに気づき、背伸びしながら笑顔で答えた。

と、そのときだった。

「あつれー。涼さんじゃーん」

今のやり取りに反応した人物がいた。

車椅子に乗つたスポーツ少女風の女の子。着ている服を明慧の服に置き換えるべく、すぐに誰かわかつた。名前は前に涼からおしえてもらつたばかり。伏見唯子先輩だ。

ふたりはほぼ同時に僕の座るベンチへと寄つてきた。車椅

子を滑らせてやつてくる伏見先輩を、僕は立つて迎える。

「奇遇ね、唯子」

「ほんとほんと。……で、君は確か藤間くん」

彼女は僕を見上げ、確認した。

「ふうん。そつかそつか。そういうことかあ」

何やらひとり納得している。

「涼さんが珍しくお誘いを断つたと聞いたたら、いひこひことだったんだあ」

「……」

その様子は実に楽しげだ。

もしかしたらマズい人にマズいところを見られたんじゃないだろうか。

いつたい何の偶然か、こんなところと同じ明慧の生徒に会つとは思わなかつた。……まあ、この遊園地はこの辺りではメジャーなレジャースポットなので、そこまで不思議でもないのかもしないが。

出会つたのは伏見唯子先輩。ふしみゆいこ

車椅子で学校生活を送るスポーツ少女然とした人だ。僕は直接の面識はないが、どうしても目立つのでよく見かけてはいた。

「涼さんが珍しくお誘いを断つたと思ったら、こういうことだったんだあ」

その伏見先輩は僕と涼を交互に見、悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「見つかってしまったんじゃ、もう誤魔化しようがないわね」

涼も小さく笑いながら僕に言った。……僕としてはがんばって誤魔化してほしいところなのだが、とは言え、この場を切り抜けるいい案もないし。結局は諦めて肩をすくめるしかない。

「ま、運が悪かつたと思って」

と、伏見先輩。

「そうね。まさか行き先が同じだとは、ね

「あれ？ 誘うときに言わなかつたっけ？」

「ううん。聞いてないわ」

涼のその言葉に伏見先輩は、そうだっけ？ そうだつたかも？ と首を傾げつつ自信を失つていく。

「だつて、聞いてたら別のところにしたものの」

「それもそつか」

そして、納得。

そんな大事なことはちゃんと言つておいてくれよ、と僕は心の中で嘆息する。涼の言づ通りだ。予め知つていたら危険は回避しただけ。

「にしても、涼さんがねえ……」「

伏見先輩はしげしげと僕らを眺める。

「最近よく一緒にいるなあとは思つてたけど、まさかふたりでこんなところにくるまでとはねえ。……せつかくだから、その辺のことも詳しく聞かせてもらおつかな」

「は?」

素っ頓狂な声を上げる僕をよそに、彼女はポケットから携帯電話を取り出した。まさか一緒にきいている友達を呼ぶのだろうか? 二の場合、即ち明慧の生徒ということになるわけだが。

「やほー、あたし。偶然ばったり知り合いと会っちゃってさ。うん、だから合流ちょっとと遅らそう。1時間後くらいで、じゃねー

しかし、彼女は手短に要件をすませると通話を切り、端末を閉じた。

「じゃ、向こうのレストハウスに行つて話そうか」

言つが早く、さっそくハンドリムを回し、車椅子を進ませる。

僕と涼は顔を見合せた。

「厄介なのにつかまつたわね

「笑つてる場合か

差し出されたジュースを受け取る。

本当、笑つている場合ではない。槇坂涼がらみの話はどんな些細なことだつて話題になるのだ。それが同じ学校の男子生徒とデートしていただなんて、かつてないほどのセンセーションだ。涼のほうは面白がつて自分でいろんな噂を流していくくらいだし、質問攻めを受け流すのは得意かもしれないが、僕にとってはそれはあまりにも酷な状況だ。

「……」

僕の愛する平和と退屈はどこにいったのだろう。碓氷あたりで谷底に落としたのかもしれないな。

途中、自販機で伏見先輩の飲みものを買ってから、僕らはレスト

ハウスを田指す。

「ひとつ聞いていいですか？」

「はい、藤間君」

生徒に解答せせる先生のような伏見先輩。

「先輩はよくこういうとこに遊びにいらっしゃるんですか？」

「うん、くるよ。それがどうかした？……あ、車椅子で楽しめるのかな、なんて思つてる？」

「あ、いえ……」

と、一瞬口にもつたが 結局。

「……まあ、正直そういう疑問はありますね」

僕は率直にそれを口にした。

「素直でよろしい。藤間君の疑問も尤もだと思つ。でも、こんな足でも案外楽しめるもんだよ。特にここはそういう事情に理解があつて、たいていのアトラクションは乗せてくれるしね。さすがにジオツト「ースターとかはダメだけど」

「それは羨ましいですね」

「ん？」

伏見先輩はハンドリムを回す手を止め、惰性で前に進みながら僕を見上げた。

これは少し配慮の足りない発言だつたかもしれない。先輩は乗りたくても乗れないというのに。そう思つた矢先、涼のフォローが入つた。

「この子つたらその手の乗りものが怖いのよ」

そこはひかえめに苦手と言つてくれ。

「へえ、それは勿体ない。じゃあ、君にはあたしの代わりにジェットコースターを楽しむ権利をあげよう。涼さん、後でつれてつてあげて」

「ええ、そうするわ」

涼はくすくすと笑いながら応じる。

「何を勝手に決めてるんですか。もうすでに2回つき合はれてる

んですよ」

「ならもう一回いってくるといいよ。2回が3回になつたって、た
いして変わらないって」

「……」

勝手にしてくれ。

「そんなわけで、一緒にきた友達は今、あたしが乗れない系のやつ
を一気に回ってる最中」

伏見先輩が言うには、友達とはもうずっとそういうスタイルらし
い。できることには挑戦する。そのときに助けが欲しいなら助けて
もらう。自分にできないことがあっても、友達はそれをするのに遠
慮はしないのだという。だから今も彼女の友達は、「すぐに戻つて
くるから」と言って伏見先輩の乗れないアトラクションをまとめて
回っているらしい。……だから今はひとりなのか。

そういう関係はもしかしたら僕が想像するよりも高度なのかもし
れない。

「できないことを数えて嘆くのは最初の1年で終わりにしたの。そ
れにやるうと思えばけっここうこうなことができるし、君にはでき
ないことだってある」

「僕にできること、ですか？」

「うん、車椅子バスケ」

きっぱりと言う先輩。

「藤間くん、君は座つたままフリースローができる?」

そして、またハンドリムから手を離し、ショートのフォームを作
つた。

僕は想像してみる。フリースローラインから座つた体勢のまま、
膝を使わずセットショート……ゴールまで届く気がしないな。

「あたしはできるよ。技と腕の力だけで撃つの。それに車椅子バス
ケットでガンガンぶつかる激しいスポーツだから、コートの中で倒れ
るのもよっちゅう。倒れたってフェイは鳴らないし、誰も起こして
くれないから自分で起き上がるしかない」

聞くからにハードだ。

「知らないなら一度見てみるといいよ。頭の中にあるイメージなんて吹き飛んじゃうから」

僕の心の中を読んだかのように伏見先輩がそう言つたところで、目の前にレストハウスが見えてきた。

レストハウスはグツグシヨップとつながつた休憩所で、さつきちらつと見た感じ中は喫茶店のよつな内装になつてゐるようだつた。ただ、中に入らうとすると、その手前に3段ほどの段差があつた。

「先に行つてて」

伏見先輩は車椅子を滑らせ、僕たちから離れていく。その先にはスロープがあり、彼女はそれを苦もなく上がり切つてしまつた。レストハウスの入り口に着いたのは、僕たちよりも早いくらいだ。手を貸したほうがいいのかと考へる間もなかつた。

本当にやれることはぜんぶ自分でやつてしまつ人らしい。

レストハウスは、隅に自販機が幾つか設置してあるだけで商業機能はなく、テーブルとイスが並ぶだけの本当に休憩のための施設のようだ。家族連れや友達同士でテーブルを囲む姿がけつこつある。朝から遊び通していると、休憩が欲しくなるのがこれくらいの時間なのかもしれない。

伏見先輩は自らの手でイスを一脚どけると、そこに車椅子を滑り込ませた。僕と涼はその正面に並んで座る。

「で、どうなつちやつてるわけ?」

落ち着いたところで彼女は、さつそくアバウトな質問で切り込んできた。

「ことじこに至つた理由という意味なら簡単ですよ。いわゆる自爆テロに巻き込まれたからといつより他は……痛つ」

言い終わらぬうちに、がすつ、と脇腹に肘打ちが突き刺さつた。

「痛いだろ」

「藤間くん、もの覚えがいいのは悪いことじゃないけど、それは忘

れましょうね

涼は笑いながら怒るという器用な技を披露してくれた。勝手に見せておいて忘れるとは、どこまでも一方的だ。

「え。なに? どうこう」と。

「残念ながら忘れるとの上からのお達しですの」

「そうね、最初の質問に答えるなら」

と、僕の横で涼は少しばかり勿体つけてから。

「いつもつつき合にはじめたのは最近だけど、

「本当はずつと前からかな

ね? と、最後は僕に投げかけてくる。

「あ、ああ、まあ……」

僕は思わず曖昧な発音で返す。

それは伏見先輩を煙に巻くための嘘か冗談か。それとも……。

「つて、ちょっと待て」

と、そこまで考えてから、はたと氣づく。

「誰と誰がつき合つてるって? まさかと思つが、僕じゃないだろうな

「あら、見解の相違ね。わたしはそのつもりよ?」

「最初にきつぱり断つたし、あれ以降主張を変えた覚えもないね」

勝手に決定事項にしないでもらいたいものだ。

しかし、そこで向かいから笑い声が聞こえてきた。勿論、伏見先輩だ。

「いやあ、藤間くんには悪いけど、あたしの田にもやう見えるよ。こんなところにふたりつきりできておいて、今さらそれはきかないじゃないかな」

それにさあ と続ける。

「わつきは前で呼び合つてたじやん

「……」

思わず項垂れそうになつた。

やつぱり聞かれていたか。あれがきつかけで彼女はこちらに気がついたのだから、当然といえば当然か。隣からは涼も「聞かれてたみたいね」と囁いてくる。……だからなぜ笑つている。

「涼さんつてさ、大人っぽいからあたしたちでも涼さん涼さんなのに、それを呼び捨てだなんてなかなかのツワモノだよね」

「それについては本日限定ですよ。普段はちゃんと『槇坂先輩』ですか」

敬意の有無については保証しないが。

「真さえよければ、わたしはずっとでもいいけど?」

「勘弁してくれ。僕の平和な学校生活が本気で崩壊する

僕はヤケクソ氣味にジュースを煽る。

そこでまた伏見先輩がけらけらと笑つた。

「藤間くんつて面白いよね。あたしには敬語で、涼さんにはそういうんだ。普通は逆じゃない?」

「唯子も気づいた? 真つたら最初からこうなのよ」

「人は大なり小なり相手を見て態度を決める。だつたらこれは当然の帰結だろう」

「ひどいことを言われた気がするわね」

わざとらしくため息を吐く涼。

「でも、いいんじゃない。きっとそこには藤間くんなりの『区別』があるんだろうしね」

横から涼が「そうなの?」と顔を覗きこんでくるが 知るか。

僕は肘を突き、不貞腐れたようにそっぽを向いた。

「それにしても、涼さんがねえ……」

伏見先輩は改めて僕らを眺めているふう。まあ、今まで様々な噂や憶測が流れつつもその実体をつかませなかつた(もとより実体などなかつたのだが)、その槇坂涼がこうして実際に男と一緒に遊園地にいるのだ。逆の立場なら僕だって同じじようにしただろう。

「意外だけど、これはこれでお似合になんじやないかな」

どんな感想が出てくるのかと思ひきや、なぜか納得されてしまつた。

しかも、よりこよひてお似合いときた。

「……」

くそ。これでまた顔を戻しにくくなつたじゃないか。

間ができた。

僕がこんな態度だからだらうか。さすがに先輩ふたりを前にしてこれは不味いな と思つたとき。

「ねえ、唯子

涼が口を開いた。

「悪いんだけど、今日のことは誰にも言わないで欲しいの」

僕は反射的に彼女を見た。彼女も僕を見ていた。

「真もそのほうがいいでしょう？」

と。

田の前で微笑まれ、不覚にもじきつとした。

「あ、ああ……」

それは兎も角。

当然それはそうなのだが、涼が自分からそういう言い出すとは少々意外だつた。てつきり話題の種をまくのが好きな彼女のことだから、自分から拡散させるくらいのことはやるのではないかと思っていた。「そつか。せつかいいネタをつかんだと思ったんだけどな。涼さんの頼みじや仕方ないつか。でも、他の子たちと会つたら知らないからね。それはそつちで氣をつけといつよ」

「ええ、そうするわ」

伏見先輩に見つかつたときほどのなるかと思つたが、これでひとまずは安心のようだ。

「おつと、もうこんな時間

その彼女が手首に巻かれた細い腕時計を見て声を上げる。

「あたしは先に出るから。じゃあね、ふたりとも。お互い楽しもう！」

そして、そう言つとまたハンドリムを操作して、滑らかな動きでレストハウスを出でいった。

楽しもつ、か。

人目を気にしてゐる状況で楽しめるとも思えないのだが。

第8話 その4

結局その後、いくつかのアトラクションを回り、少し早めに遊園地を出た。

朝に待ち合わせした駅に着いたのは、辺りが少し暗くなりはじめたころ。僕はそのまま電車に乗っていてもよかつたのだが、涼を家まで送るべきかと思い、一緒に降りた。

「この前のカフェにでも寄る？」

改札口を出たところで涼が提案してきた。

それはいいな。確かに『天使の演習』という名前だつただろうか。このまま彼女を送つて終わりというのも少々もの足りないとthoughtいたところだし、今日の締めにも相応しいだろう。

いい案だ そう返事をしようとしたとき、僕たちの目の前に立ちふさがるやつらがいた。

「よお、また会ったな」

それは朝のチャラい一人組だった。しかも、じ丁寧に3人ほど仲間を連れてきて、5人に増殖している。まさかここでずっと、また戻つてくるとも限らない僕らを待つていたのか？

「……暇なやつ」

「ああ？」

僕の冷ややかなひと言にカチンときたのか、ひとりが凄んできた。が、こいつらが行き交う一般人を睨みつけながら、ずっとここで待つていたかと思うと苦笑しか出ない。

「真……」

「大丈夫だ」

僕の後ろに隠れるようにして不安げに囁く涼に、そう返す。

「朝はよくもやつてくれたな」

チャラ男その1だ。ひねり上げた肩はひとまず動くよくなつたらしこ。

この状況で今さら何の用か確認するまでもないだろう。

「さすがに僕でも5人はむりだな。3人くらいにしてくれないか」
すると彼らは互いに視線を交わし、ぴたり3人がニヤニヤ笑いながら前に進み出た。ここまで言葉なし。見事なアイコンタクトだ。
さて、じゃあ、降りかかる火の粉を払うとしようか。

師曰く、先手必勝。

僕も律儀に正当防衛が成立するのを待つ気はない。

出てきた3人をそれぞれ素早く観察し 行動に出る。余裕と無防備を履き違えたままノコノコ近づいてきた馬鹿の腹に、遠慮なく拳をめり込ませた。腹を押されて膝から崩れ落ちる。まずはひとり。

女性の声で悲鳴が上がった。突如としてはじまった喧嘩に驚いたのだろう。……まったく。僕だってこんなところで乱闘をする羽目になるとは思わなかつた。

「てめえ！」

いきなりひとりがやられたのを見て、次のやつが向かってくる。チャラ男その2だ。朝と同じだな。お前は動くのがワンテンポ遅い。僕はそいつの顔面に、カウンタ気味にハイキックを決めた。ゴツ、と鈍い衝撃。男の足が止まり、上体が仰け反る。その顔は何が起つたのかわからないといった表情だ。そこに今度は逆足で、後ろ回し蹴りを脇腹に喰らわせる。それでふたり目は終わりだつた。残る3人目に向き直れば、もう殴りかかってきていった。

「おつと」

それを間一髪で避け、逆にこちらから顔に拳を叩き込んでやつた。でも まだ倒れるなよ。僕はそいつの服を掴んで引き寄せると、その腹に膝蹴りを撃ち込む。一発、二発、三発、……。手を離すとそいつは、血でも吐きそうに咳き込みながら地面に転がつた。

これで3人。

下がっていたふたりに目を向ければ、呆気にとられて一步も動いていなかつた。こちらの望み通りに3人でかかつてきてくれたり、

今まで待つてくれていたり、つづく思い通りにしてくれる連中だ。
ありがたいな。

「こ」の野郎っ

やつと我に返り、チャラ男1が飛びかかってきた。
マズいな。笑ってしまいそうだ。

「……お前、バカだろ？ 3人を相手にした僕に、ふたりで勝てる
と思ってるのか？」

そして 。

「大丈夫……？」

「痛つ」

水に濡らしたハンカチが傷に染みる。涼は切れた僕の口の端を拭
きながら、心配そうに顔を覗き込んできた。

「仕方ないさ。相手は5人なんだ。……1、2発はもうつ

勿論、多少もらつても全員沈めたが。

ただ、油断しているやつら3人よりも、その気になつたふたりを
相手にするほうが難度が高いのは自明の理だ。無傷というわけには
いかなかつた。

今、僕たちは駅の近くの公園にいた。

ひと通り全員を倒したところで、涼の手を引っ張つてここまで逃
げてきたのだ。今はベンチに座つて、公園内の自販機で買った水で
傷の手当ての最中だ。

ふと、涼の手が止まつた。

「……」

何かを考えているふう。

どうしたのだろう。 だが、僕は直感的にそれを問うのを避け

た。

「ありがとう。後は自分でやるよ」

彼女の手からハンカチを取り上げ、口もとの傷に当てる。

「ツ

やつぱり染みるな。

「本当に大丈夫?」

「ああ。これくらいしたいことなこと。すぐに治るさすがに明日にはきれいやつぱりというわけにはいかないだろつが。

「『めんなさい。わたしのせい』で

「いや、涼は悪くないよ。どう見たってからんできただやつらが悪いし、後は穩便にすませられなかつた僕のせいか」

自嘲する。

朝の時点では平和的にあしらつていればこんなことにはならなかつただろう。でも、思わずかつとなつてしまつたのだから仕方がないし、そうさせた連中が悪いということにしておくか。

「ねえ、前から喧嘩はよくしてたの?」

「……そんなに好戦的に見えるか?」

その質問に虚を突かれたが、すぐに問い合わせた。自分でもよく言うと思つ。

「でも、慣れてるみたい」

「男なんて少なからずこんなものさ」

そんなわけはないのだが、確かめるように聞いてくる涼にはそう答えておいた。

「さて、送るよ」

話はこれまでとばかりに、僕はベンチから立ち上がつた。残念だがカフェに行くのはやめだ。そんな雰囲気ではないし、それ以前にこんな顔で行つたら店も驚くだろう。

涼はしばし僕を見上げていたが、すぐに自分も頭を切り替えたようだ。笑みを浮かべる。

「今日は両親がいるわよ?」

「何を聞いていたんだ? 送ると言つたんだ」

よりもよつてそんな切り替え方か。まあ、彼女らしいが。

涼を家まで送り、上がつていけどバカなことを言つのを振り切り
玄関で別れて帰ってきた。

すっかり暗くなつた住宅街を歩きながら、僕は電話をかける。

『おう、どうした?』

相手は美沙希先輩だ。

「ちょっと頼みたいことがあります」

『あん?』

訝しげな声。

「『猫目の狼』殿に潰してもらいたい連中がいるんですよ」

『……言ってみろよ、舍弟』

が、それは一転して弾むような調子になつた。

僕は今日のことをかいつまんで話 そうと思つたら、涼の名前
が出た瞬間、「ぜんぶだ。今日あつたことぜんぶ話せ」と言われ、
細大漏らさずすべて話す羽目になつてしまつた。

朝の出来事からはじまり、先輩的好奇心を満たすためだけに遊園
地でのこと、そして、ついさつきの乱闘の件 そこまで話し終え
るこには、僕は駅に着いて、自動改札を通つていた。吐き出され
た通学定期を取り上げ、ホームへ向かう。

『んで、これ以上槇坂に手を出さないよ!』、その連中を潰しと
てくれるというわけだ。このアタシに』

「そういうことですね」

涼には言わないとおいたが、あの連中がこの辺りを主たる行動範
囲にしていれば、また会つてしまつ可能性がある。それを想定して
彼女の安全を確保しておきたい。

「とは言え、ちょっと釘を刺すくらいで大丈夫だと思いますけどね
さつきは先輩の興味を引くために潰すという表現を使つたが、そ
こまですることはないだろう。一時期この界隈で暴れまわつた、知
る人ぞ知る『猫目の狼』の知り合いだとわかれば、一度と手出しを
しようなどと思わないはずだ。』

『わかつたよ。お前の頼みだ。後でその連中の特徴をおしえろ。挨拶にいってやる』

「お手数をおかけします」

「これで安心だな。」

『しつかし、お前、まんまと横坂にハメられたな』

「は？」

『伏見に見つかったの。あれ一から十まであの女の計算通りだろ』

「……」

「そう、なのか？」

僕は振り返る。

本当は先週だつたのを土壇場で延期したのは、伏見先輩たちの予定を知ったからか。そして、行つた遊園地で知り合いの姿を探し、ついに見つけるとそこで彼女は僕を見失つた振りをした。僕はそうと知らず、彼女の名前を呼ぶ。涼、と。

そういうことなのか……？

『明日さつそく学校で妙な噂が流れたりしてな』

電話の向こうからチエシャ猫の笑い声が聞こえてきた。

「まさか。いや、でも……」

横坂涼という人間は何よりも面白いことを好む。自分がどれだけ影響力があるかを熟知していて、その上で素知らぬ顔で周りを振り回す。そういう精神性の持ち主だ。

「……大丈夫ですよね？」

『知るか、ばーか。飛び散れ』

かくして、通話は一方的に切られた。

思わず呆然とする。たちの悪い冗談だ。そう思いたい。

気がつけばいつの間にか電車がホームに入ってきていて、僕は慌てて飛び乗った。

月曜日。

『明日さつそく学校で妙な噂が流れたりしてな』

美沙希先輩のそんな不吉な予言に嫌なものを感じながら学校に行けば、しかし、特に変わった様子は見られなかつた。どうやら美沙希先輩の、そして、僕の単なる考えすぎだつたようだ。

月曜日の1時間目は各クラスでのホームルーム。

ここ、明慧学院大学附属高校では単位制が導入されていて、生徒が自由に授業を履修できる。が、それでもクラスというものは存在していて、英語や体育などの必修科目はこのクラス単位で受けることになつていて。

所定の小教室で浮田とかいう名前のクラスメイトと雑談を交わしてみても、槇坂涼の熱烈なファンであるこいつの口から新しい話題が上るようなことはなかつた。

2時間目からは通常の授業。行つた先の教室では他のクラス、他の学年の生徒が入り混じるようになるが、この授業には知り合いがない。僕はいつものように本を読みつつ周りの雑談に耳を澄ましていたが、やはり噂の類が飛び交つている様子はない。

ここまできてようやく僕は人心地ついた。ほつとすいよいよ杞憂だったようだ。

だいたいにして、そんな噂が流れるはずがないのだ。美沙希先輩によれば涼がわざわざ見つかるよう画策したとの予想だが、しかし、結局は唯一の目撃者である伏見先輩には彼女自身が口止めをしている。

こうやって筋道立てて否定してみるのだが、しかし、それでも不安は拭えない。もうひとり言い振らしそうな人間に心当たりがあつたからだ。

3時間目の授業の前、僕は先生を待ちながら、一抹の不安を抱える。

つつ携帯電話を手で弄ぶ。

携帯電話が揺れればストラップも揺れる。黒のベルトストラップには、一緒に小さなかわいららしいマスコット人形もついていた。
…似合わないな。でも、これは昨日槇坂涼とデートをして、お互にプレゼントし合った記念品のようなものだ。しばらくはこれをつけていようと思ひ。

涼はこれと色違ひの赤。それをつけた携帯電話を持つて、今もどこかの教室にいるのだろう。そう考えると思わず不安を忘れて不思議な気分になる。

ど、そのとや。

「うっす」

浮田だつた。ここつとは1時間毎に会い、2時間毎で一度別れて、再度合流。ひとりひとり時間割りの違う明慧ではこづこづことは珍しくない。

「聞いたか？」

浮田は隣の席に座りながら切り出してきた。

「我らが槇坂先輩、昨日遊園地でデートしてたんだつてよ」

「……」

「どうした？ 急にケータイしまつて」

「いや、気にしないでくれ」

僕はスラックスのポケットに携帯電話を突っ込みながら返事を返した。……しばらく人の前では使えないな。

「で、槇坂先輩のそのデートの相手ってどんなやつなんだ？」

「うなつてしまえば僕が気にしなければいけないのは、まずそことだ。」

「それがはつきりしないんだよ。明慧の生徒じゃないのかもな」

「……そうか」

まあ、そうだろうな。僕だと知られていたのなら、浮田が会うな

り僕の首を絞めにかかつたはずだ。僕の名前は拳がつていなにようで安心した。

「まさかと思うが、藤間じゃないだろうな」

「僕が？」

「どうしてさ？」

ナチュラルにすっとぼけながら問い返す。

「お前、最近何かと槇坂先輩と一緒にいるじゃん」

「ちょっとしたきっかけでお互いの顔を知つて、よく話すようになつたのは確かさ。でも、休日に会うほどじゃない」

「だよな？ もしあ前だったら嫉妬のあまりボコボコにしてるよ、俺」

くるならきてみる。僕も浮田なら遠慮なく過剰防衛ができる。その昔、「相手が3人までなら勝てるよつになれ」と美沙希先輩が無茶なこと言ってくれたが（そして、僕もそれに応えたが）、こいつが5人でも負ける気がしないな。尤も、中学生のころじゃあるまいし、よつばどのことがない限り今は喧嘩などしないが。

そこでチャイムが鳴った。もう間もなく先生がくるだろう。浮田が前を向いて座り直す。

「いったい相手は誰なんだろうな」

「さあね」

本当に。誰だろうな、こんな噂を流してくれたのは。

「……」

勿論、僕はその最有力容疑者を知っている。まず彼女しかいないだろう。僕は悪魔の笑みを浮かべた天使の顔を頭に思い描き、浮田に気づかれないように小さくため息を吐いた。

そのまま浮田とは昼休みまで一緒に、そこからさらにふたりの友人と合流して学食で昼食をとつた。当然のように話題は槇坂涼についてで、特にいつも以上に興奮している浮田は非常に鬱陶しかつた。

そうして今、僕はひとりで次の教室に向かっていた。

「まったく。よけいな噂を広めてくれる

思わず愚痴がこぼれる。尤も、僕に直接の被害があつたわけではないが。

と、そこで前方に女子生徒の集団に見知った人物が混じっているのに気づいた。車椅子の後姿。その右にふたり、左にひとりの横一列で、講義棟と講義棟を結ぶ小道いっぱい広がつて歩いている。勿論、車椅子は伏見唯子先輩だ。涼は一緒ではないようだ。

話の内容まではわからないが、楽しげな笑い声が聞こえてくる。

話題はやはり横坂涼の例の噂だつたりするのだろうか。

「伏見先輩」

僕はふと思いついて、後ろから早足で追いつき、呼びかけた。伏見先輩はハンドリムを回していた手を止めて車椅子を停止させると、腰をひねつて振り返つた。同時に他の3人もこちらを向く。

「お、藤間君じゃん」

彼女は僕を見るや明るい笑顔を見せた。快活なスポーツ少女然とした人だ。

「どうも。ちょっと話があるのですが、少しだけいいですか？」

「ん？ ああ、そういうことね。いいよ」

頭の上にクエスチョンマークが飛んだのは一瞬だけ。すぐに何のことかわかつたらしく、快諾の返事が返ってきた。友達には「先に行つてくれる」と言って先を歩かせると、僕と伏見先輩はその後ろをついていくようにして歩き出した。ゆっくりと歩を進め、前のがグループとある程度距離が開いたところで僕は切り出す。

「例の話、先輩の耳にも入つてますか？」

「そりゃもちろん。さすが涼さんだよね。誰だつてデータくらいするのに、それが涼さんだともう大騒ぎ」

伏見先輩は嬉しそうに語る。一挙一動すべてが話題になつてしまふ友達がいて嬉しいのかもしれない。

彼女はハンドリムを回して車椅子を進める。膝の上にテキストやノートを乗せているのだが、ぱっと見て2教科分ありそうだ。2時間続けて同じか、近い教室で授業があるのでだろう。たいていの生徒

も口ッカーから遠い教室で授業が続くときはそうする。移動が不便な彼女なら尚更だろう。かく言つ僕も、午後の授業はふたつとも同じ講義棟であるので、2教科分のテキストを持つている。

「まさかとは思いますが、伏見先輩ではありませんよね？」

「言い振らしたの？ あつたりまえでしょー！ 涼さんに言わないでつて頼まれてるのに」

「ですよね」

僕とて本当に伏見先輩だと思っているわけではない。いちおう念のための確認だ。

「でも、いつたい誰だろうね。うちのグループの誰かだったら、見たその場で大騒ぎしてるだろ？」

「……」

彼女はハンドリムを回す手を止めて慣性の力に任せて進みながら首を傾げた。すぐに車椅子の速度が落ちてくる。その横で僕は何も言わないのでいた。勿論、見当がぼぼついているからだ。

「……他にも明慧の生徒がいたのかもしませんね」

「かもねー。それか、うちの関係者じゃないけど涼さんことは知つてる、とか？ 涼さん、この辺りじや超美人の高校生として有名だから。時々他校の生徒も見にくるし」

楳坂涼にまつわる逸話としてそういう話も聞いたことがないわけでもないが、本当なのだろうか。もしそれが本当なら、いちおうその線も考えられるな。情報伝達の速度が速すぎる氣もするが。

「どちらにしても、藤間君にはラッキーだったよね。涼さんを見た人は藤間君のことは知らなかつたわけでしょ？」

「そういうことになりますね」

犯人があえて伏せていたのかもしれないが。……すでに犯人呼ばわりしている自分がいるな。

「誰も涼さんと一緒にいたのが藤間君だとは思わないだろーねー」「でしおうね。僕ですらこんなことになるとは思つていませんでしたから」

苦笑せざるを得ないし、実際、僕は苦笑した。

入学してから知った槇坂涼という人物は容易に近づける相手ではなく、もつずつと遠くから眺めているだけのつもりだったのだから。

「本当のことを知ってるあたしとしては、言いたくてうずうずしてるんだけどね」

「……」

いちばん危険なのはこの伏見先輩のような気がしてきたな。

「前から聞きたかったんだけど、涼さんと藤間君つていつたいナーフながり？」

「さあ？ 何なんでしょうね」

それは僕も知りたい。いつたいいつのことがトリガーになつたのか。彼女が僕に接触してきた直前の何かなのか、入学直後のあれか。それとも……。

僕たちの前を歩くグループが右手の講義棟4のほうへと向かつた。伏見先輩も当然そちらなのだろう。僕はその反対の講義棟3だ。この辺で話を切り上げよう。聞きたいことは聞いたし。

「きっと涼のきまぐれですよ。そのうち飽きたら捨てられると思いますよ」

僕は笑いながらそう言つて、伏見先輩と別れた。

今日、月曜日は本来なら涼と会うことはないはずだった。例の噂で持ちきりの今は特に、下手に会えばよけいな勘織りをされてとばつちりを喰らう羽目になりかねないので、僕も彼女の姿を探すことはしていなかつた。

講義棟3の前には、自販機コーナーとベンチがある。

今、僕はそこで缶コーヒーを飲んでいた。ロッカーに戻る必要がなく、近くの教室に移るだけだと15分の休み時間は少々長い。時間が潰しだ。こんなふうにのん気にベンチに座っている生徒は僕以外にいない。皆限られた時間で次の教室に行こうと、忙しなく行き来

している。たまにこの自販機コーナーにくる生徒もいるが、何か一本買ってすぐに行ってしまう。

僕もこれを飲んだら教室に戻ろう そう思つたときだった。

「だーれだ」

不意に僕の視界が真っ暗になった。どうやらひとりこいつそり近寄ってきたのがいたようだ。この声は間違えるはずがない。

「人の姿をした悪魔」「

「……このまま指を目に押し込んでやろうかしら

「オーケイ。僕が悪かった」

そんなことをされたら目の疲れが取れるどころの騒ぎではない。直後、再び視界に光が戻った。腰をひねって見上げてみれば、そこにいたのは当然のように黒髪ロングのオトナ美人、槇坂涼だった。

「あなたって、わたしのことをそんなふうに見てたのね」

彼女は呆れたようにそう言つ。……人の目を抉ろうといふやつが悪魔でなくて何だというのか。

「りょ……ン、ンンッ」「

危うく名前を呼びかけて、誤魔化すように咳払いに切り替えた。思わず周りに目をやる。行き交う生徒がちらちらとこちらを見ていた。

そんな僕を見て涼は大人っぽく笑う。

「わたしは涼でもいいのよ、真」

「あれは昨日だけのはずですよ、槇坂先輩」

僕はむすっとして言い返し、そのまま黙り込んだ。

涼はくすくす笑いながら前に回り、僕が座っているところから90度写した位置のベンチに腰を下ろす。

「会いたかったわ。それなのにずっと質問攻めで会いにこられなかつたの。どうも昨日のデート、誰か見てたみたいなの。大変だわ」

そう言つて頬に掌を当て、ため息を吐く涼。……わざとらしい。

ため息を吐きたいのはこっちだ。

「何を言つてる。あなたどう、その噂を流したのは

「ええ。もちろん」

彼女はけろりとした顔で、あつさり認めた。惚けたり誤魔化したりする気はないらしい。

要するにそういうことだ。情報の発信源は目撃者ではなく当事者。それなら伏せたい部分も思いのままだ。

「でも、どうにも辻褄が合わないところがある」

「あら、何？」

彼女は興味深げに聞き返していく。

「昨日のことばぜんぶ人に目撃させるためだつた」

「ええ、その通りよ」

そこまでは正解 と、まるで生徒の解法を聞く教師のように、元気な微笑みながらうなずく。

「そのお膳立てをしたわりには伏見先輩には口止めして、結局は自分で噂を流している。これでは一貫性がない」

「ああ、そのことね。思い出したのよ」

思い出した？ 何を？

「よくよく考えたら唯子は話好きだけど、知らず知らずのうちに誇張してしまうところがあるの。噂の出でこなしてもせりふには少し不向きね」

「……」

それは恐ろしいな。やはり人は危険人物だつたか。

「それに実験をしてみたくなったの」

と、涼は妙なことを言い出す。実験？

「ここで問題です。今日わたしが受けた質問の中でいちばん多かったのは何でしょう？」

「うん？」

今日の涼は心なしかテンションが高いなと思いつつ、僕は考える。男なら槇坂涼がデートなんて信じたくないから『あの噂は本当なのか？』だろうか？ 女の子ならせらへて突っ込んで『相手は誰？』あたりか？

「時間切れよ」

「答えは『一緒に行ったのはやつぱり藤間くん?』でした」

「ぶつ」

思わず噴いた。

「ちゃんと否定してくれたんだろ? な?」

「残念だけど、わたし嘘は苦手なの」

「……待て」

してないのか? それにどの口でそんなことを言つたか。四六時中悪巧みばかりしてゐるくせに。

「いつも通り『想像に任せます』って言つておいたわ

「……」

積極的に肯定はしてこないわけか。そつやつて相手の反応を見て楽しんでいるのだろうな。

「どうする? わたしたちつき合つてると思われてるみたいよ」

可笑しそうに笑いながら言つ涼。

実験とはつまりその調査だつたわけか。

「どうもこりともないわ。勝手に勘違いさせておけばいい。勿論、そうかと問われたら否定はするけど」

「本当につき合つてこの選択肢はないの?」

「ないね」

そこはきつぱつ主張しておく。

「相変わらず強情ね」

ほつといってくれ。僕はヤケクソ氣味に缶コーヒーを煽り、間、涼は真顔でじつとこちらを見ていた。怒ったのだろうか。

が。

「ねえ。そのコーヒー、ひと口飲ませてくれない?」

人の心配をよそにそんなことを言い出す。そんなことができるか。「気づいていないかもしれないが、実はそこに自販機があるんだ。

喉が渴いたのならそこで何か買つといい。ああ、よかつたらお金も僕が出そつ

「そんなにはいらないもの。いいから貸しなさい」

涼は腰を浮かして手を伸ばすと、僕の手からセツと缶を奪つた。再びもとの位置に戻り、一瞬の躊躇もなく缶に口をつけた。じくり、と喉が鳴る。僕はそれを黙つて見ていた。

「こうこうのつて間接キスつていのうのよね

悪戯っぽく笑う涼。

「らしいね

「でも、実感がないわ。本当のキスの経験がないから?」「知るか、そんなの。

「はい」と戻ってきた缶を受け取り、僕もそれを飲む。

「あなただつて躊躇いもなく飲むんじやない」

「まあね。それこそ大層な名称ほど実感があるわけでもなし」

嬉々として口をつけてもそれはそれで変態くさいが、眉をしかめて缶を睨むほど潔癖症でもない。

「そんなことができて、昨日はデートもして。もうつき合つてゐるようなものじやない

「それとこれとは別。僕にも認めたくないものがある」「嫌われたものね

肩をすくめる涼。

「もういいわ。それじゃあね、天邪鬼さん」

ツンとした口調でそう言つと、彼女はベンチから立ち上がりてスタスタと歩いていつてしまつた。

予想外の展開に呆然とする僕。

「今度こそ怒らせた、か……?」

涼の後姿が見えなくなつてからつぶやいた。

「コーヒーの残りを一気に飲み干し、空になつた缶を『ミ箱に投げ込んだ。くそ。別に嫌つてるわけじゃないんだけどな……。自己嫌悪。調子に乗りすぎたか。

と、不意にスラックスのポケットの中で携帯電話が鳴った。音声通話だ。誰だ、こんなタイミングで。口に出さずに毒づきながら端末を引っ張り出せば、サブディスプレイには横坂涼の名前が。

「……もしもし」

何を言われるやう、と警戒と覚悟をもつて電話に出る。

『怒ったと思った?』

いきなりそれだった。

あのな……。

ちょっとほつとしたのも確かだが。

『大丈夫よ。怒ってないから。でも』

直後、ツッリと通話が切れた。

「……」

これも悪戯だらうか。確かにこんな切られ方をしたら続きが気になるが。

また携帯電話が鳴った。

今度はメール。今切つたばかりの涼からだ。メロディが鳴り終わらないうちにそれを聞くと、そこには。

『そろそろお遊びは終わりにしましょう?』

明日の放課後、例のカフェで待っています』

第9話（後書き）

5月27日投稿
同月28日脱字修正

最終話 その1

メールについてずっと考えていた。

『そりそろお遊びは終わりにしましょう？

明日の放課後、例のカフェで待っています』

あまりにも唐突に送られてきたメール。

どういう意味だろうか？

その意図は？

お遊びとは何だ？ そして、それが終わればどうなる？

「ちょっとお。真、ちゃんと聞いてる」

隣から投げかけられた非難交じりの声に、僕は我に返った。
今は登校途中。そう言えば駅を降りたところで、これ 一いえだ

を拾つたんだつたな。

「悪い。何の話だった？」

「聞いとけよ

「およ

こえだこと三枝小枝は頬をふくらませる。ついでに「まあ、改めて言つような話じやないけど」とつけ加えた。

「今日の真つてば、元気なくない？」

「そつか？」

「その自覚はない が。

「考え方をしてたからかもな

「悩み？」

「といつまじのものでもないから心配するな。それに否が応でも放課後には解決してるだろうし

槇坂涼は放課後を指定して僕を呼びつけている。そこで何らかの

イベントがあるのは確実だわ！」

「ふうん」

「こえだは面白くなれそつた調子でそう言つて、
「我が世の春を謳歌してゐる真が悩みねえ」

「何だよそれ」

やけに棘のある口調だ。

「昨日から槇坂さんがデータしてたって噂が出てるけど　あれの
相手つて真でしょ？」

「……想像に任せるよ」

すばりと切り込んできたな。

「何それ。槇坂さんと同じじやん」

「お前もあの人と噂の真偽を問い合わせたクチか？」

「たまたま近くにいただけ。……でさ、槇坂さんつて、一緒にいた
のが真かつて聞かれると、ちょっとだけ嬉しそうな顔するの
「ことが思惑通りに進んで嬉しいんだろ」

あれはそういう種類の悪魔だ。

「まあ、こえだにはちゃんと言つとくよ。　本當だ。日曜に一緒に
にいたのは僕だ」

「やつぱり。だと思つた。ここんとこべつたりだもんね」
と、不貞腐れたようなこえだ。

その様子を見ながら、僕はふと思い出す。

「お前。あの先輩のこと嫌いなのか？」

「え？ 別にそんなことない、け、ど……？」

言いつつ僕の反応を窺うようにこいつらを見る。小動物の目だ。僕
は一度その視線を正面から受けて、

「あの人人が言つてたぞ。仲良くなきいけど、お前にその気がないみ
たいだつて」

「うー……」

こえだは小さな唸り声をひとつ。何やら考えている様子で、それ
きり黙ってしまった。

「できればいいが、仲良くしてくれよ。知り合いふたりが仲が悪いなんて、あまり気持ちのいいものじゃない」

「ま、まあ、あの槇坂さんと知り合いになるチャンスだし。それにどうせ勝てそうにないし」

「お前はあの完璧超人どこのジャンルで張り合つて勝とどうと思つたんだ」「…………」

尤も、実際は悪魔超人だが。

「いいのっ。真の知らなくていいことだからっ」

「こえだばっふいとそっぽを向く。」

「あーあ、あたしつつていいセンパイを持つたなあ」

「それたぶん褒めてないだろ?」

「わかってるじゃーん」

笑つてそう言つてから、彼女は少しだけ歩調を速めた。

僕としてはこえだがどう思つてしようと、かわいい後輩を持つたと思っているんだけどな。そして、いちばん好きだと素直に思えたらもつとよかつたのにも思つ。

唐突に現れた槇坂涼は告げる。

『これまでのことは单なるお遊び。でも、もうそれも終わりね。いい夢が見れたでしょ？ わたしもいい暇つぶしなつたわ。……さよなら』

「…………」

踵を返し、遠ざかっていく彼女。

その後姿を眺めながら僕は、ああなるほどな、と納得していた。

そこで田が覚めた。

直後、先生の「じゃあ、今日はここまで」という声が耳に入つてきた。どうやら授業中に眠つていた僕は、高校生活で培つた体内時

計によつてか、それとも教室内の空氣を感じ取つてか、授業終了に合わせて覚醒したらしい。

と、状況を分析しているうちに、壇上では先生がピンマイクを外して教室を出ていった。

「おーし、行こうぜ。藤間

「ん？ ああ……」

浮田だ。

そう言えば、昼休みだったな。この男が元気になる時間だ。

しかし、授業の実に半分の時間を睡眠に費やした僕の体は、すぐには動けそうもなかつた。こんなに寝たのは、昨日メールについて考えすぎて睡眠不足になつっていたからだろうな。

「悪い。先に行つてくれ

「そうか？ わかつた。早くこいよ

僕はそれに手を上げて応える。

すでに授業の準備の3倍の速さで荷物をまとめていた浮田は、疾^は風^やのように教室を飛び出していった。

一方、僕は緩慢な動きでテキスト類を重ねながら、やつきの夢を思い出す。……まったく。起きた瞬間に忘れてしまつ夢も多いのに、こんなときだけはつきりと覚えているのはどうこうことだろうな。

「……」

深々とため息を吐く。

正直、昨日の槇坂涼からのメールをそう解釈しなかつたわけではない。むしろそう考えたほうがしつくりくるかもしれない。そのうち飽きたら捨てられると思いますよ 昨日、自分でも自嘲気味にそう言つたのを思い出した。

そう考へると、今日といつもは都合がいい。火曜日は彼女と同じ授業がないから放課後まで顔を合わせず、いきなりクリティカルな話題を切り出せるのだ。

「こなんにちば

「！？」

完全に不意を突かれた。

振り返ればこの階段席の通路に槙坂涼が立っていた。わざわざ後ろから近づいてきたのは、何の悪意があつてのことだろうか。

「……どうしてここに？」

「あなたがなかなか出てこないからでしょう。教室の外で待つていたのよ？」

「あ、ああ、悪い」

って、悪いのは僕なのか？ 約束は昼休みではなく放課後だったはずだ。しかも、学校ではなく例のカフェ。そう言おうとしたのだが、槙坂先輩が先に次句を継いだ。

「でも、丁度いいわ」

言いながら肩から提げていたトートバッグを机に置く。

「何だこれ？」

「もちろん、お昼ご飯に決まってるわ」

「ここで食べる気か？」

「……そうか。僕はいつも通り学食だ。悪いが、あなたひとりで食べててくれ」

僕は重ねたテキストを抱え、立ち上がった。まるで逃げるようだ。何から？ きっと僕はここでその話を切り出されるのを恐れているのだろう。いずれ放課後になれば嫌でも聞くことになるのに、今この場から逃げたいのだ。

「待つて。ちゃんと藤間くんのもあるわ」

トートバッグから出てきたのは、少し大きめのランチボックスがふたつ。ひとつはバスケットタイプだった。

「……」

「早く座つて。ひとつそつちに詰めてね」

僕は渋々言われた通りに腰を下ろした。さつきまで座つていた通路側の席ではなく、もうひとつ内側だ。

教室には弁当組やらまだ席で喋つていいグループやらでまばらに生徒が残つていて、僕らの様子を見るやなんだんだとざわつきはじめた。……奇遇だな。僕も同じ気持ちだ。

網の目のランチボックスを開けると、中にはサンドイッチがきれいに並べられていた。

にしても、何を考えているのだろうな。わざわざ放課後に呼びつけているくせに、そんなことなど忘れたかのような態度だ。

「ハッシュコドビーフじゃないのか」

あまりの不可解さに、意味のない文句が口をついて出た。

「そんなわけないでしょ。もちろん、あなたさえよければいつでも作りに行くけど？」

「……僕が悪かった」

『冗談じやない、彼女を家に入れるなんて。前に風邪をひいた日に強襲されたときもたいがいだったが、今はあのとき以上に自分が何を言つて何をやるか自信がない。

もうひとつランチボックスはサイドメニューのようだった。チキンやポテトなど。油を使ったものがちょっとしたような気がしたが、その分サンドイッチのほうはハムレタスやタマゴなど、女性好みのさっぱりしたもののが多かった。

「これ、そこで買つてきたわ」

最後に取り出したのは2本の缶コーヒー。

あれよあれよという間に準備が整い、気がつけば今さらいらぬとは言えない状況になってしまっていた。

結局、僕は諦めて頂くことにして、サンドイッチに手を伸ばした。槇坂涼製なら味は保証されているし、これで一食分が浮く。

「今日は何を読んでるの？」

食事の最中、不意に槇坂先輩が聞いてきた。彼女の視線は重ねたテキストの上に乗っている文庫本に向かられている。本には書店のカバーがついていてタイトルはわからない。

「『妖魔の森の家』」

「ジョン・ディクスン・カー？」

「そう。僕としてはカーなら『火刑法廷』が読みたいんだけどね」しかし、絶版して久しい。早くどこかで再出版してくれないだろうか。

「『いづれの読者にもすべて、その人の図書を』。出版業界も見習つてほしいものだな」

「ランガナタンね」

「その通り」

よく知ってるな。

以前こえだにこの話をしたら「ランガナたん？」などと、数学者にしてインド図書館学の父をやたらとフレンドリイに呼びやがった。そのくせ自由に関する権利宣言はどこからか知識を仕入れていたようだが。ああ、僕が貸した本か。

「でも、第2法則だつた？ それとも第3？」

「第2だな。とは言え、ランガナタンは第1と第5だけ知つていれば十分さ」

つまり、

The First Law: Books are for use./第1法則：図書は利用するためのものである。

The Fifth Law: A library is a growing organism./第5法則：図書館は成長する有機体である。

の、ふたつだ。

「前から聞こうと思つてたんだが」

「どうぞ。遠慮しないで何でも聞いて」

一瞬、彼女を困らせるためだけに本当に何でも聞いてやろうかと思つたが、すぐに思いとどまつた。危ないな。人間品性を失つたら終わりだ。

「本はよく読むほうなのか？」

「どうかしら。人と比べたことはないけど、読めるうちにできるだ

け幅広く、たくさん読んでもいいとは思つてゐるわ

「ふうん」

時々これは知らないだろ？と思つよつなことを知つてゐるのはそのせいいか。

しかし、それにしても……。

「意外？ そう思うのはずっとわたしを見てても、そんな姿を見たことがなかつたから？」

槇坂涼は僕の心を見透かすような瞳で僕を見た。

僕は何も言わない。

「そうね。あまり人前で読むよつなことはしなかつたから」

それは友人と一緒にいるときでも平氣で本を開く僕への当てつけだろうか。彼女の前でそんなことをしたことはないのだがな。

「でも、今はダメね。受験勉強が少しずつ忙しくなってきて、あまり読む時間がとれないわ」

「だったら僕と遊んでないでそつしたらいいだろ？」

そう言つ僕が手にしているのは、睡眠時間か勉強時間か、何らかの時間を削つて彼女が作ったサンドイッチだ。忙しいと言つているわりには、受験生らしからぬ余裕だな。

「プライオリティの問題よ。作った時間で本を読むより、あなたと一緒にいるほうが楽しいもの。いつもより集中して勉強して藤間くんに会いについて、明日の分まで課題をこなしてからデータするのもしろ今までよりメリハリがあるわ」

「……好きしてくれ」

人のライフスタイルの変化に口を出すつもりはない。

と、そこでふと気づく。

「受験つて、上にはいかないのか？」

上とは明慧学院大学のことだ。ここ附属高校からはそう表現される。エスカレータ式ではないが普通の入学試験よりはハードルが低く、世間一般で言つ大学受験のイメージは薄い。槇坂涼のような成績優秀者なら大学側も諸手を上げて歓迎し、無試験合格だろ？。

しかし、彼女が口にする大学受験は、どうも外部の大学を指したもののようなニュアンスだ。

「ええ、そのつもり」

「彼女もあつさりそれを認めた。

「差し支えなければ理由を」

「少し周りが騒がしくなりすぎたわ」

「その声はかすかにため息混じりだった。

まあ、そうだろうな。槇坂涼という人間はどこへ行つても目立つし、その一拳手一投足が注目される。今だつて教室にいくつかのグループが弁当を食べているが、ちらちらとこちらの様子を窺つている生徒が少なからずいる。誰も自分を知らないところに行きたくなるのも当然か。

「尤も、半分くらいは自分のせいだけど

「……」

……まあ、そうだろうな。言葉ひとつで人を右往左往させて楽しんでいるからだ。**魔女め**^{バカ}

「ねえ、どうせならふたりで外の大学に行きましょうか」

「それはなんとも心踊るお誘いだ。だけど、あなたが行くような大

学に凡人の僕が入れるとも思えない」

「あら、大丈夫よ。目の前にいい家庭教師がいるじゃない」

「目の前か。目の前というと、遙か先に黒板があるくらいだな」

直後、槇坂先輩の手が伸びてきて、そのしなやかさとは裏腹に万能のように僕の顔を挟み込むと、強引に自分のほうへと向けさせた。それは僕の首の可動域ぎりぎりの拳動で、思わず口から「ぐ」とうめき声がもれた。

「これで見えるかしら、優秀な家庭教師の姿が」

「彼女はっこり笑う。

たぶん僕の視界いっぱいに天使の笑みを浮かべているのが、家庭教師とかいう新種の悪魔なのだろう。

「い」ちそうさまでした

「お粗末さまでした」

程なく食事が終わった。

「喜んでもらえてよかったです。じゃあ、わたしはこれで「
槙坂先輩はランチボックスを片づけ、トートバッグを抱えて立ち
上がつた。

気がつけば昼休みはもうすでに半分を過ぎていて、そして、僕は
すっかりあのメールへの不安を忘れてしまっていた。槙坂先輩の振
る舞いがあまりにも普段通りだったからだろう。僕はもしかしてあ
のメールを読み解き違えていたのだろうか。

だが、彼女は僕の耳に囁く。

「次は放課後ね。待ってるわ」

「!?

思い知らされる。やはりあれは本当なのだと。

弾かれたようにして立ち上がると、彼女はもう僕に背を向け、階
段状の通路を降りようとしていた。

「待ってくれ」

思わず呼び止めた僕の言葉に、彼女は振り返る。

「なに?」

その顔には笑み。

例えば僕が校内で彼女を見つけて呼び止めれば、こいつ表情を
するのだろう。

「僕に何か話があるのか?」

「ええ

言いながら槙坂先輩はすっと距離を詰め、僕のネクタイに触れた。
まずは手遊び。

「そうね。ミステリで言つところの解決編といひやつね」

「……モノポリーでもする気か?」

生憎、僕は持っていないが。

「面白そうだけど、それはまた今度」

彼女は楽しそうにくすくすと笑う。そしてネクタイを整え、僕を見上げる。やはりそこには優しげな微笑があった。

「怒ってるのよ？」

「え？」

「一年以上もわたしのこと興味のない振りして

最終話 その1（後書き）

作中に出でてくるカーの『火刑法廷』は、8／25に最出版されます。
今回の更新分を書いている最中に知ったのですが、もうテキストの
修正はしませんでした。
ご容赦を。

最終話 その2

そして、放課後。

「おや

「ん？」

駅を降りたところで、僕はその人物と出くわした。
見知った顔、というほど顔を合わせているわけではなく、ある意味では文字通り見知った程度の関係。

年はおそらく二十歳か、それをひとつかふたつ越えたくらい。眠そうな半眼のまぶたが特徴的だが、よく見れば意外と目の光は強い。まるで擬態だ。

「君は確か、僕の店に何度もきててくれた……」

槇坂先輩と待ち合わせをしているカフH、『天使の演習』の店長だ。

「ええ。今日もこれから行こうと。もしかして定休日ですか？」

この人が店を離れてここにいるということはそうなのだろう。だとしたら無駄足だったな。先に行っているはずの槇坂先輩はどうじたのだろう。

「いえ、やつてますよ

と、彼。ならばなぜこんなところにいる。

「店にお客が少なかつたし、ちょうど僕の奥さんも帰つてきましたからね。彼女に店を任せて買い物にきました」

「奥様はどこかに出かけられていたのですか？」

「彼女の本業は大学生ですから」

気がつけば僕らは並んで歩いていた。

「それにしても少し余裕を持ちすぎなのでは？」

あの店はお世辞にも盛況とは言えない気がする。おかげでいつも静かで雰囲気はいいのだが、それでは先行きが不安だ。店は僕も気に入っている。だからこそ、潰れてしまうようなことがあっては勿

体ないと思つ。

「僕としてはそつでもないつもりなんですねけどね」

彼は苦笑する。

「あの店はね、父の遺産として僕が受け継いだものなんです。だからとつて、決して道楽でやつていけるものでもなく、ちゃんと守り立てていかないとけません。君、何かいいアイデアはありますか?」

「……」

素人の僕に聞くかよ。

「コーヒー・ハウスをご存知ですか?」

「そういう言い方をするところを見ると、単純に喫茶店に類するものというわけではなさうですね」

「ええ

「コーヒー・ハウスとは、1650年のオックスフォードに端を発する、図書室を持つカフェのことだ。図書や雑誌など多数の蔵書を持ち、客はただそれを読むだけではなく、特には読書会を開いたり、討論を繰り広げたりもしたのだそうだ。

「かのアイザック・ニュートンもそこで毎日のように常連客と討論し、『プリンキピア』を書き上げるに至ったそうです」

18世紀初頭には2000件にまで増え、その後、半世紀に渡つてコーヒー・ハウスの人気は続いた。

「君はなかなか博学ですね。それに面白そうなアイデアです
僕の趣味全開の案に、彼は興味を示したようだつた。

「店内に書架を置いて、自由に読める本を並べてみても面白いかもしませんね。気に入つて何度も足を運んでくれる人もいそうです」
店長と話しながら僕らは住宅街の中を歩き、やがて店へと辿り着いた。『天使の演習』だ。

店の前にはお勧めメニュー（コーヒーとサンドイッチのセット）
が書かれたチョークアートのウェルカムボードが置いてあった。前にきたときはなかったように思つ。

「どうぞ」

店長が僕のためにドアを開けてくれた。定番のドアベルが鳴る。
「どうも」と軽く頭を下げるから、僕は店内へと踏み入った。

「いらっしゃいます」

涼やかな声。軽快な足取りでこちらにくるのは店長の奥さんだ。

彼女は一度だけ僕の後ろ 店長を見た。

「おひとりですか?」

「あ、いや……」

僕は店の中を見回した。片手で数えられる程度の客。その中に槇坂涼はいた。窓際の陽当たりのいい席に座っている。

「彼女と待ち合わせを」

「ああ」

店長夫人は目を細めて納得。

「「ゆつくり」

とても嬉しそうにそう言われた。この人の目には僕たちはどう映つたのだろうか。

それから彼女は、店長に「おかえりなさい」。その声はどこか幼く聞こえ、振り返り際に見えた表情も、少女のように無邪気だった。槇坂先輩がいるテーブルへと着くと、僕はもう一度店長たちに目をやつた。ふたりはもうカウンタの中に入っていた。

「ああいう女性が好み? でも、マスターの奥さんよ?」

「わかってるよ」

言つことはいきなりそれか。

僕は彼女の向かいに座った。槇坂先輩は今日は僕より1時間早く下校し、家も近いはずなのにまだ制服姿だった。何か本でも読んで待っていたのだろうか。

「大学生らしい」

「ええ、そのようね」

知つていたのか。

「何度か話したことがあるわ。かわいらしい方よ。高校を卒業と同

時に籍を入れたんですって」

「ふうん」

と、そこにさつそく店長がお冷やを持ってきた。

「決まりましたか?」

「じゃあ、フレンドを」

奥方の話をしていたの聞かれただらうか。陰口ではないので、そこは見逃してもらいたいところだ。

僕は改めて槙坂先輩と向き合った。

「楽しそうだな」

「わたし、藤間くんと一緒に他のときはいつもと同じが違うんですけど自分でもその自覚はあるわ

「自分を知ることはいいことだ」

「世の中には己の気持ちを謀るたばかようなやつもいるからな。

「さて、何の話からはじめる?」

僕は自ら口火を切る。

「わたしたちの出来こと出来について」

「……いつだ?」

「とぼけて」

くすくすと笑う槙坂先輩。

勿論、僕はとぼけてはいない。予想通りだ。彼女の昼間の言動からして、この話題しかないと思っていた。

「あれは去年の4月だったわ。前期にくる授業も決めて、学生課に履修届を出そうとしたときに呼び止められたの。新入生の男の子よ。先輩はどの授業を取られるんですか。よかつたら履修届を見せてくださいって」

「……」

「勇気がある子だと思ったわ。普通そんなふうに堂々と聞いてこないもの。だから、思わず見せてあげたの。……覚えてる?」

「もちろん。むしろそれはこっちの台詞や。覚えてたのか」

「忘れるわけがないわ」

あれは自分でも失敗したと思つた。

最大の失敗だ。

「でも、後でわたしは腹が立つたの」

彼女はむつとした調子で言つ。

「なぜ？」

「それつきりだったからよ」

「……」

黙り込む僕のところに、店長がブレンドコーヒーを運んできた。
「お待たせしました。……どうぞ、いかがくづ」

僕はさつそくミルクピッチャーからミルクを適量垂らし、ひと口飲んだ。美味しい。これで値段もほどほどなのだから、こんなに得なことはない。

向かいでも槇坂先輩が、まだ残っていた自分のコーヒーに口をつけ
先を続けた。

「少し楽しみにしていたのよ？　また声をかけてくれると思ってた
のに、結局それつきり。授業だって一緒に週に2回だけ。少し
腹が立つたわ」

小さくかわいらしく鼻を鳴らして一拍。

「でも、わたしはそのころから藤間くんに興味をもつていたわ」
そして、懐かしむような口調でそう言つ。

「だから、よくあなたを見ていた」

「え？」

「気がつかなかつたでしょ？　悪いけど、そこはわたしのほうが
一枚上手よ」

槇坂先輩は勝ち誇るわけでもなく、いたずらっぽく笑う。

「藤間くんが気がつかないうちに、わたしは気がついた。何を？
それはわたしがあなたを見ているように、あなたもわたしを見てい
るということ。藤間くんはあの日たまたま声をかけてきたわけじや

ない。最初からわたしに興味があつた。違つ?

「自惚れだな」

「自信よ」

それこそ自信たっぷりに言い切る。

しかし、この場合、それは即ち肯定であるともとれる。

あのとき僕は、授業云々は槇坂涼に接触するために丁度いい口実だと思ったのだ。それを話題にして彼女に接触し、その反応を見るのが目的だった。だが、まさか彼女が前述の如くそこまで不可侵だとは予想外だつた。たかだか履修科目の話なのに。それとも傍若無人な美沙希先輩のそばにいるせいで、僕の感覚が狂つっていたのだろうか。

結果、それは思いがけず印象に残る行動となつてしまい、以後、僕は彼女が忘れてくれることを期待して、できるだけ目立たないようにしてきた。

「それなのにななたは、わたしなんかに興味がないと言つたわ。そんなんはずないせに」

浮田と話していたあのときだな。やはり聞こえていたのか。

「それで僕に近寄ってきたのか?」

「ええ

彼女は笑顔で首肯する。

「忘れているみたいだから思い出さへあづよつと思つたの。あなたはこの明慧にきたときから、わたしに興味をもつていたのよつて。ちょっとしたゲームをしながら、ね」

あのときのことを見えていない振りをして近づき、言葉の端々で覚えていることを匂わせる。まるで追い詰めるよつとして。そんなお遊び。^{ゲーム}

「どう? これでもまだ認めない気?」

「……」

「……」

しばらく根競べのように見つめ合った後、僕は深く息を吐いた。
「わかった。認めよう。僕は最初から槇坂涼という人間に興味があった」

それくらいなら認めるさ。

「それで、こうしてあなたの思惑通りに認めてしまったわけだが、この後はどうする？ まさしくお遊びは終わりだ」

思い出されるのは、昼間授業中に居眠りをしたときに見た夢。

Game is over

ゲームが終われば……。

僕は彼女の返事を待つ。

「そんなの決まってるわ

「遊びが終わったら、本気の恋愛をするだけよ

「だって、わたしはあなたの方が好きで、あなたはわたしが好き。でしょ？」

「自惚れだな

「自信よ

またもきつぱりと言い切る。

「わたしは槇坂涼だもの

確かに自信だ。

「そこまで言われたら僕の負けだな

僕は肩をすくめ、苦笑した。

どこかほっとしている自分がいる。

それも一重の安堵だ。

僕の負け？ いえ、残念ですが槇坂先輩、どうやら状況は僕の望むものであるようですよ。

やはりあなたは覚えていなかつた。

僕たちは会っている。去年ではなく、もつと前に。勿論、僕としては忘れてくれていて好都合だった。なにせそのときの僕は少々格好悪い姿をしていたのだから。

槙坂先輩の思惑通り僕は、その言葉の端々から彼女が少なからず前のことを覚えていると気づき、確信した。それなら仕方がない。結局のところ最大の問題は、それがどの時点からなのか、だつた。槙坂先輩から近づいてきて思いがけず親しくなつて 記憶を呼び覚ますきっかけになりそうな場面もあった。だが、それでも彼女は僕たちの本当のはじまりを思い出さなかつた。

僕は悟られないよう密かに胸を撫で下ろす。向かいでは槙坂先輩が相変わらず微笑を浮かべていた。

が、そこで気づく。

いつの間にかその笑みの質が変わっていることに。

例の天使の顔をした彼女の、悪魔の笑みだ。

僕がそれに気づいたのを読み取った槙坂涼は、その笑みのままゆっくりと両肘をテーブルに突き、組んだ指に顎を乗せて言葉を紡ぐ。

「わたしたちの再会の話はこれでお終い。じゃあ、改めてわたしたちの出会いの話をしましょ？」

まるでファウストが契約書にサインをした後で、「ああ、そういう」と言葉をつけ加えるメフィストフェレスだ。

すべては彼女の思い描いた通りの流れ。

勝利の確信は一瞬にして無残に飛び散つた。

槙坂先輩を見る僕はかなり間の抜けた顔をしていたに違いない。そして、そんな僕に視線を返す彼女は、仕掛けた最大のいたずらが成功して満面の笑みだつた。

ああ、これはあれだ。携帯電話に入っているのと同じ。

あの日、見た瞬間に僕を魅了した小悪魔の笑みだ。

『槇坂涼』。

この学校でその名前を知らない生徒はいない。

明慧学院大学附属高校はじまつて以来の成績優秀者で、いつも微笑みを絶やさない大人びた美貌は、男女問わず誰もが憧れ、どこへ行つても注目を浴びる。

そんな完璧人間。

それが 『槇坂涼』。

おかげでわたし、槇坂涼の毎日はとても退屈で、だからこそいつも何かを探していた。

さて、何から話そづ。

やつぱり去年の春のことから話すのがいいよつて思つ。

この学校は単位制を導入していて、必修科目以外は好きに授業を選択できる。よって、わたしたち生徒の新年度最初の仕事は、受けたい授業を決めて、期日までに学生課に履修届を出すこと。

ところがこの履修届の書き方が少しばかり複雑で、新入生泣かせなのは当然のこと、期間中は2年生3年生でも頭を突き合わせて大騒ぎしている光景が校内のあちこちで見られる。毎年恒例の風景らしい。

幸い、去年のわたしは一年生で初見ながらいち早く理解し、友人たちにおしえる立場に回つた。後期にも書き方を忘れてしまった子におしえていた。今年もそう。……それはいいのだけど、毎回おしゃっている子の顔ぶれが同じなのはどういうことだろう。半年に一回しかやらないことだから身につかないのはわかるけど、少しは覚え

る努力をしてほしいと思う。

そうしながら数日かけて履修届を書き終え、何人かの友達と一緒に学生課に出しに行こうとしたときのことだった。

わたしは学生課の窓口の前で呼び止められた。

「槙坂先輩ですよね？」

声のしたほうを見れば、そこに男の子がひとりいた。

「ええ。あなたは新入生？」

ネクタイの色を見ればそれはすぐにわかる。

同時に、わたしは少しうんざりしていた。どうやらむづ『槙坂涼』の名前は新入生に知られているらしい。

「先輩はどんな授業をとられたんですか？ よかつたら履修届を見せてもらいますか？」

が、その発言を聞いて、一転、思わず感心した。

『槙坂涼』は高嶺の花であり、ましてや一年生にとっては不可侵犯。誰もが同じ教室で一緒に授業を受けたいと思うけど、直接本人にどんな授業をとるのか聞くことはできない。してはいけない。にも拘らず、この子は声をかけてきた。

なかなかの度胸だと思う。

「どうぞ」

急に彼に興味を持つたわたしは、持っていた履修届を快く差し出した。隣では「ちょ、ちょっと涼さん！？」と友達が慌てていたけれど。

誰もが喉から手が出るほど欲しがるその一枚の紙を、彼は仔細に見る。

間、わたしはその彼を改めて観察した。この勇気ある行動に相応しい、物怖じしないどこか薄情そうな面立ちだ。

「書き方はわかる？」

「難しいですね。でも、実物を見せてもらつてわかりました。ここ の欄は上が科目の名前で、下がコードなんですね」

そう言って浮かべる笑みは意外や意外、なかなかに人懐っこい。

私はそれを見てなぜか、上手な笑みだと思つた（やつ思つた理由は後になつて判るのだけれど）。

「ありがとうございます。『よくわかりました』」

履修届をわたしに返すと、彼は軽く頭を下げてから去つていった。

「見せかけやつてよかつたの？」

彼が離れるごとに、すかさず友達がそう言つてきた。不満そうだ。きっと彼女にとつて『槇坂涼』はそんなサービスをしてほひけないのだろう。

「いいんぢゃない？」

あれくらい頼まれればいつだって見せるのだから。

少し楽しみだつた。

もし”偶然”同じ授業が多かつたら、今度は「ひかり声をかけてあげよう」と思つ。

そう、これが藤間くんだった。

やがて前期授業が正式にはじまつた。

「最近の涼さん、なんかむすつとしてない？」

「え？ や、そう？」

友達のその指摘にわたしは慌てる。

でも、確かにそうだらう。

履修する授業が確定した後、最初の授業はどこもわたしが現れた途端、教室中がおおいに沸いた。

「おっしゃー。槇坂さんと一緒にー。」これで半年この授業はがんばれる！」

「やつぱあつちはガセだつたな。俺は賭けに勝つたー。」

みんな『槇坂涼』と一緒につて嬉しいらしい。

だけど、ほとんどの場合、その湧き上がる生徒の中に藤間くんは

いなかつた。いてもいつも周りの興奮など我関せずとばかりに本を読んでいた。

結局、あけてみれば彼と同じ授業は週にふたつだけ。一年生も受けられる授業も多かつたのに。

これでは本当に”偶然”だ。

わたしはなんだか裏切られたような気分だった。

「それにしても、今年の新入生はカッコいい」『がいないよね』不意に一緒にいた友達のひとりが愚痴のようにこぼした。

「そうなの？」

「そうそう。残念ながら不作ね」

わたしは気まぐれに教室を見回してみる。藤間くんがいた。そう言えばこの授業は彼と一緒にだったのを思い出す。相変わらず本を読んでいて、そうしながらもちゃんと友達と話しているようだった。

（あれ……？）

ふと 気づいた。

藤間くんがよく見れば意外に端整な顔をしていることに。本を読む姿は知的美少年といったふう。この前は珍しさばかりが先に立つて、そこに目がいかなかつたらしい。

「ねえ、本当にいない？」

「いないない」

再度聞くと、彼女は掌をひらひら振つてそう答えた。

「ふん。 そなんだ……」

やはりそうだ。誰も気がついていない。いつもまるで気配を消して隠れるみたいにして本に視線を落としているからだろう。まだ誰も彼があんなにきれいな顔をしているのを知らないのだ。

気づいたのはわたしだけ。

思いがけず素敵な秘密を見つけてしまった。

本当は女の子なら誰もがほっておかないカツ『いい男の』。それをわたしだけが知っている。
わたしだけの秘密。

その日を境にわたしはよく藤間くんを見るようになった。

けれど『檜坂涼』が誰かひとりの男の子を注視なんかしたら一大事だ。だからちょっとした小技を使う。視界の端で捉えるように見たり、鏡で前髪を整える振りをしながら見たり。

それは悪戯めいて楽しかった。

彼に気づかれないように、友達にも気がつかれないように、こつそり彼を見る。

退屈な毎日の中で見つけた小さな楽しみだった。

ふたつわかった。

ひとつは彼がいつも退屈そうだということ。

藤間くんがもつ本来の笑みはとてもシニカルで、彼の端整な相貌によく似合っていたけれど、変わり映えのない日常に退屈しているように見えた。

そして、もうひとつ。

わたしが彼を見ているように、彼もまたわたしを見ているということ。

でも、それは入学してすぐにわたしに声をかけてきた大胆さとはちぐはぐなように思えた。

そして、これは錯覚と 少しばかりの希望が入っているかもしれないけれど、彼のわたしを見る目には、男子生徒なら誰もがもつ『檜坂涼』への憧れ以外の何かがあるような気がした。

ささやかな楽しみと優越感と、小さな謎とを胸に時間は流れ、

それは暑さも一段落した初秋のある日のこと。

学生食堂で友達と一緒に弁当を食べていると、藤間くんが何人かの友達と連れ立つてやってきた。わたしは視界の端で彼を見る。すでに”田立たない平凡な生徒”の立場をまんまと確立してしまった彼に注目するのは、きっとわたしくらいのものだろひ。

ふと、彼が足を止めた。

学生食堂の一角にある自動販売機コーナーの前。そこで藤間くんは小さな動作で自販機を順番に指をしていく。いや、数をかぞえているようだ。その数6つ。

「おーい、藤間。何やつてんの？」

「ああ、悪い」

短く答え、再び歩を進める。

いつたい今の行動に何の意味があつたのだろう。わたしがそれを知るのは翌日のことだった。

翌日。

朝からはじまった騒ぎは昼休みにピークを迎えた。

今日は朝からずっと自販機がぜんぶ故障中らしい。

わたしは『故障中』の貼り紙が貼られたそれを見ながら考える。

昨日藤間くんが数をかぞえていた自販機が、今日にはこんなことになっている。これは偶然？

そこにその藤間くんがやってきた。

「今日は朝からじつなんだつてよ」

「らしいな」

友達の言葉にまるで他人事のように答える。

が。

「浮田」

通り過ぎ去つとした彼は、昨日と同じ足止め、友達を呼び止めた。

「これ、どこにも異状ないんじゃないかな?」

「え、まさか?」

浮田と呼ばれた彼は、半信半疑に自販機に近寄つていった。
「特にそれらしい表示はなし。売切中のランプもなし、か
かくして、ギャラリイの見守る中、硬貨を入れてボタンを押すと、
何の問題もなく商品が出てきた。場は騒然となり、少なくない生徒
が自販機に詰めかけた。

結局、故障している機械はひとつもなかつた。

「くそ、騙された」

「なんで誰も確かめなかつたんだよ」

「誰だ、こんな悪戯したやつ」

わたしははつとして藤間くんを見る。

彼はいつも通りにシニカルな笑みで自販機コーナーの騒ぎを見て
いた。

いつも通り?

いや……。

ああ、なるほど。そういうことか。

なんと面白い子だらう。

わたしはいつそう彼に興味を持つた。

ひとつ確信があった。

それはきっと彼はほかにもまだ何かやつていてるという確信。

藤間くんはだいたいいつも同じ場所に座る。大教室だと後ろ半分
の階段席の通路側。あるときわたしは思いついてその席を見にいつ
たことがある。

……やっぱりあった。

机の上に落書きがひとつ。日本史のテストについての真偽不明の

情報だつた。広まつたら日本史を取つてゐる生徒が右往左往しそうな、それでいて先生のひと言で鎮火しそうな情報。

わたしはそれを見て口許を緩める。

わたしと同じだ。

『槙坂涼』の毎日は退屈で、だからそれを面白くするためにいつしか『槙坂涼』で遊ぶことにした。

わたしもよく同じことをする。

例えば、『槙坂涼は医学部の大学生とつき合つてゐる』。そんな落書きを机に書いておけば、意外なほどよく広まる。やがて誰かがことの真相を尋ねにくるけれど、わたしは「『ごめんなさい。それはプライベートなことだから』『想像に任せると答えるわ』と答えを曖昧にして反応を楽しむ。だけど、見ていればわかる。それはある意味ではとても『槙坂涼』らしい答えで、イエス・ノーをはっきりさせりも望まれているのだと。彼も同じなのだろう。

他にもいくつかあつたけど、そのうちのひとつ　4階の語学教室の窓の外側につけられた小人だか宇宙人だかの足跡を、試しに発覚前に消してみたことがある。だけど彼は特にそれを不思議と思う素振りもなく、改めて仕掛けることもなかつた。成功に固執はしないらしい。

「ねえ、あの足跡つてどうやってつけるの？」
　　「ずいぶん後になつて、わたしは藤間くんに聞いてみた。彼のマンションで食事をしているときだつた。

「ああ、あれ？　あれは拳を握つてそれをこつやつて」

藤間くんは握り拳の小指側を、朝食が並べられたテーブルの上に

ゆっくりとスタンプするように置いた。

「後はその上に2つか3つ、親指で点をつけてやればできあがり。チョークの粉でもつけるか、埃の積もったところででもどうぞ」というところだ

「なるほど。確かにそういうかたちになるわ」

わたしも同じようにやってみて、完成形をイメージしてみた。

「勘違いしないでくれよ。だからといって語学教室の件が僕の仕業だと言つてるわけじゃない」

彼はこの手の悪事に関しては、絶対に認める発言をしない。

さらに美沙希に聞いたところ、「あれな、中学生んとき真と一緒に3階のぜんぶの教室につけてやつた。次の日、学校中が大騒ぎになつたな」と笑つて言つていた。

彼女は彼女で悪びれた素振りもないのだから質が悪い。

早いもので気がつけばわたしも3年生に進級していた。

そしてまた半年に一回のイベント、今期の時間割りを決めるときがきた。その期間中　履修届提出の締め切り今までまだ十分に余裕のあるある日のこと、

「あ、あの、槇坂さん」

車椅子の唯子と一緒に歩いていたわたしに声をかけてきたのは、同じ授業のときに時々言葉を交わす程度の女子生徒ふたり組だった。その程度だから教室ではないこの場では、勇気を出して話しかけてきたふうだった。

「前期は芸術科目を中心に取るって聞いたんだけど本当？」

瞬間、わたしはこの発言が生まれるまでの経緯について考えを巡らせる。

『聞いた』。つまりは伝聞。けれど、わたしは芸術科目なんて取るつもりはないし、そもそも自分が何を履修しようと思つているか誰にも話していない。ということは、これは嘘の情報だ。

どうやら嘘の情報が出回っているらしい。

思えば昨年度の前期からこの手の出所不明の怪情報が行き交っていたようだと思つ。人を惑わず「ママゴギー。……なるほど。今度はこれなのね。

『槇坂涼』は微笑む。

「さあ、どうしようかしら。まだ決めてないの。あけてみてのお楽しみね」

「ええー」

そんなひらりとかわすような返事に、彼女たちはコニージンで不満とも歎声ともつかない声を上げた。

「また一緒に授業があるといいわね」

そう言つてふたりと手を振りながら別れると。

「さつきの話、本当なの？　あたしは演習科目と情報系だって聞いてたけど？」

唯子がこちらを見上げながら訊いてきた。

そういう説も流れているらしい。いつもやつてみんなが振り回されているのを横目で見て、あの口は楽しんでいるのだろうか。

「どうかしら？　唯子の想像に任せると」

「涼ちゃんはすぐやつやつとはぐらかす」

唯子は怒ったような素振りもなく、むしろ笑う。

偽情報はこのままほつておこうと思つ。これからも彼女たちのところにある程度親しい生徒が、噂の真偽を確かめにくるだろうから。きっといろいろな反応を見せてくれるに違いない。

利害の一一致。

わたしの中の退屈といつ怪物を押し潰すピストルとして利用させてもらおう。

そうしてあの日がきた。

。

藤間くんが一緒に授業のとき、わたしが教室に入つてまず最初にすることは彼を見つけること。そのときも教室中央の扉から入り、仲のいい友達と話しながら、横目で彼の姿を認めた。いつもの席に座り、本から顔を上げてこちらを見ている。いつもそう。冷めた様子で、シニカルなくせに誰よりもよくわたしを見ている。

わたしは大教室を前後に一分する大きな通路を通つて席へと向かう。彼の目の前を横切る軌道。

定点と動点の最接近。

そこで彼の声が耳に入った。

「よつて、僕はあの人興味はないね」

結論するような口調の言葉。

きつと後になつて彼は自分の迂闊さを呪つたに違いない。

そして、わたしも迂闊だつた。

わたしは思わず目だけで彼を見、ほんの刹那、彼と視線が交錯した。

すぐに目を逸らす。

だけど、もう遅かつた。すでにわたしの心には決意が芽生えていた。忘れたの、藤間くん？ 去年、あなたはわたしに興味をもつて声をかけてきたんだよ？ そう、忘れたのね。だったら思い出させてあげる。

そのとき、わたしはこの一年間我慢したのが不思議なほど、彼を知りたいと思った。

わたしはすぐに藤間くんに近づくことを決めた。
でも、普通に「いんこちは」と声をかけるのはダメ。彼にはきっと『槇坂涼』のブランドは通用しない。もつと一瞬で惹きつけるような方法じゃないと。

学生食堂で偶然に目当ての人物を見つけ、わたしは一緒にいた友達に「ちょっとごめんなさい」と断ると、彼女に近づいていった。

「古河さん、少しいい?」

「あン?」

自販機に向かい、何を買おうか考えていたらしい彼女は、わたしの声で振り返った。

古河美沙希さん。

きれいなアーモンドのかたちをした目と、男っぽいウルフカットが特徴的な そして、後にわたしの親友となる女の子だ。

「槇坂か。アタシみたいなのに何の用?」

「頼みたいことがあるの」

「ふうん」

彼女は興味深げにわたしを眺めると、

「いいよ。あっちで話そうか」

そうしてからわたしたちは、それぞれ飲みものを買ってから食堂の隅の席に移った。

さつく古河さんは切り出してくる。

「それで、槇坂ともあらうものが何を知りたいんだ?」

「え、ええ」

少し緊張する。

彼女に頼み」とをするためには藤間くんの名前を出さなくてはいけない

けない。わたしの口から男子生徒の名前が出ていた古河をさせどう思うだろう。

「2年生の藤間くんってこの子のことなんだけれど」

瞬間、ぐふつ、と喉を詰まらせ、飲んでいた最中だったコーヒーで咽た。

そして、「し……」と、何かを言いかけてそれを飲み込み（しつ）、改めて口を開く。

「……藤間？」

「ええ」

と、答えておいでから　彼のことをすでに知っているふうな古河さんの口振りが気になった。

「ねえ、もしかして藤間くんって、実は有名だつたりする？」

「いや、そんなことないと思うわ」

「そ、そうよね」

わたしはほつと胸を撫で下ろした。

よかつた。本当はわたしが知らないだけで密かに人気があつたりするのかと心配したけど、彼女がそう言うならそうなのだろう。彼が本当は女の子なら誰もがほつておかない男の子だと「う」とは、わたしだけが気づいたわたしだけの秘密にしておきたい。

「本題に入らうぜ。あいつの何が知りたいんだ？」

古河さんがまるでマフィアの取り引きのようにこう聞いてくるにはわけがある。彼女は一部では有名な“情報屋”なのだと「う」。頼めばこつそり知りたい情報を調べてくれるところ話だ。

「彼の　藤間くんの電話番号なんだけど」

「電話番号？」

彼女はわずかに目を丸くしてから、「うーん……」と考え込みはじめた。

「やつぱり難しいかしら？」

「いんにゃ。そういうんじゃないくて、もつと別ソトに問題が……。いや、ま、いつか。いいよ」

「本当？ 助かるわ

どうやら彼女が何でも調べてくれるところのは本当ひつ。

喜ぶわたしの前で、古河さんは取り出したスマートフォンを操作する。

「何か書くものある？ メモとか紙とかのまつ

「ええ

わたしは言われるままブレザーのポケットから、掌ほどの小さなメモ帳を取り出した。古河さんはそこから一枚切り離すと、ポケットに裸で突っ込んでいたらしいボールペンで何やら書きはじめる。それが終わると、人差し指と中指ではさんでこじらへ差し出してきた。

「ほら

「えつ？ これって……」

「そ。ご所望のものだよ

確かに紙には携帯電話の番号らしき11個の数字が並んでいる。てっきりこれから調べるのだと思っていた。つまり……。

「あなた、藤間くんの電話番号を知っていたの？」

「チョイと別件でね

別件？ 前に誰かが同じ依頼をしたといふこと？

「んで、それ何に使うんだ？」

「え？ それは……」

古河さんの問いに我に返り、口元もむ。

勿論、電話番号なんて電話をかける以外の使い道はない。そう、わたしさは彼と接触するためのツールとして電話を選んだ。『槇坂涼』からのいきなりの電話に、彼はきっと驚くに違いない。

「ま、いいか

しかし、彼女はあっさりと追求の手を引っためた。

「ところで、いちお一情報提供料をもらうことになつてんだけど。

日本銀行券以外の、商品券とかそんな感じのンでさ」

「そうね……」

財布の中に今何が入っているかを思い出してみる。

「今は使いかけの図書カードくらいしかないわ。『めんなさい、明日必ず

』

「ああ、それでいいよ

「え、でも」

確かもう残高はあまり残っていなかつたはず。財布から抜き出して見てみれば案の定。

「やっぱり。190円しか残っていないわよ?」

「じゅーぶんじゅーぶん」

笑つて言いながら、古河さんはわたしの手から文庫本の一冊も買えない図書カードをすつと引き抜いた。

「どうやらこれから面白いものが見れそうだしな。それでチャラにしどくよ」

「え、それはどうこいつ……?」

「おっと、それはこっちの話。じゃあな」

そうして情報提供料としてもらつたそれを指ではさんだままひらひら振つて、テーブルを離れていった。

「……」

最後のひと言が気になるところだけれど、わたしの望むものを手に入れたことは確かだ。

ずいぶんと簡単に、安く手に入つたものだけだ。

「ゼロ・ハチ・ゼロ、の……」

わたしは部屋の勉強机に両肘を突き、メモを田の高方に合わせて、そこに書いてある数字を口に出して読む。本当はメモなどなくともそらで唱えられる。今日一日、人の目を盗むようにしながらずっとこれを眺めて過ごしていったので、すっかり覚えてしまつた。

結局、その日は電話をかけなかつた。

これは魔法の道具。

三角をふたつ重ねて丸で囲んで……じゃないけれど、これを使え

ば藤間くんにつながる。きっと最初の一回は特別なものになるに違いない。だから、勿体なくてまだ使つていない。

そこでふと思つた。今は夜。今電話をかければ、もしかしたら彼とゆっくり話ができるかもしれない。友達同士があるいは恋人同士が楽しくおしゃべりするように。

でも、わたしはそれをすぐに否定した。

これは大きなインパクトをもつて藤間くんに接触するためのツール。彼と再会するためのステージはここじゃない。

本番は明日だ。

といふが、翌日。

中庭の木の下で電話をかけてみたら、期待に反して彼は出てくれなかつた。知らない番号からの電話には出ない主義のよ。警戒心が強いのか、それとも面倒なことが嫌いなのか。

どちらにしても”突然の電話”作戦は失敗してしまつた。

「さて、次はどうしようかしら?」

わたしは端末を折りたたみ、つぶやく。

どうしてだろう。まるで絶好のコンティイションのときに得意科目の難問に挑んでいるみたいに楽しかつた。

そして。

今、わたしの手の中には彼の携帯電話があつた。

勿論、無断借用してきたものだ。

これにわたしのアドレスを転送する。これで電話をかけてもわたしの名前が表示されることになり、正体不明でない相手なら藤間くんも感じるはずだ。後はこれを落しものとして学務課に届けて、彼に返すだけ。

途中、階段の踊り場で、気まぐれに彼の端末のカメラ機能を使つ

て自画撮りしてみた。撮れた写真を見てみれば、そこには自分でも驚くほどの笑顔のまるでいたずらが成功した子どものように笑うわたしがいた。

いつも大人びた微笑を浮かべている『槇坂涼』も、こんな笑い方ができるらしい。

そう、これは最初にこれを見るであらう彼に向けられた笑顔だ。

『2年の藤間真さん。お伝えしたいことがありますので、学務課までお越しください。繰り返します』

その放送が流れたのは昼休みになつてすぐのこと。いつもならさつきまでの授業を一緒に受けっていた子たちと学生食堂にいくのだけど、

「ごめんなさい。今から人と約束があるの。たぶんお昼もその子と食べることになると思うから」

「あ、そりなんだ。じゃあ、また今度ね」

手を振つて彼女たちと別れる。

わたしはゆきくりテキスト類をまとめてから教室を出た。頃合いを見計らい、また中庭の木の下で彼に電話をかけた。

『……もしもし』

警戒の色の濃い彼の声。

当然だろう。落として返ってきた自分の携帯電話のメモリイに、入れた覚えのないアドレスが入つていたのだから。だけどころでもやく彼をステージに引っ張り出すことができる。

「よかつた。今度はちゃんと出てくれたのね」

『……聞きたいことがあるのですが』

案の定、彼は喰いついてきた。

じつしてついにわたしは彼と再会を果たすことができた。

彼は思つた通りの子だった。

頭の回転が速くて 。

『 横坂涼』の前でも動じなくて 。

去年の春に見せた人懐っこい笑顔などどこにもなくて
笑顔の仮面を脱いでもまだ韜晦してばかりで 。
すぐにわたしはそんな彼に興味以上のものを抱いた。

『 わたしとつき合つてみる気はない?』

『 ないね』

いや 、

まったくと言つていいくほど思に通りにならない辺り、思った以上
かもしけない。

嬉しい誤算。

わたしはまた難題を差し出され、わくわくしている。

彼との会話はとても刺激的だった。

思えば『 横坂涼』は会話をしていなかつた。求められるはいつも
「 その通りね」と頷いて同意するだけの聞き役か、皆を同意させる
鶴のひと声。けれど彼は違つていた。年下のくせに敬語も使わない
生意気な子だけど、同じ目線で話してくれた。

それに わたしの周りで彼ほど知的な子もいなかつた。

例えば、ある日のこと。

午前の授業が終わつて昼休みに入り、お昼と一緒に食べようと藤
間くんに電話をかけてみた。

『 悪い。調べたいことがあつて図書室に行く。他をあたつてくれ
あつせうと切られてしまつた。

『 もう。ぜんぜん懐かない猫みたいな子

『 横坂涼』のお誘いを断るのは、きっと彼くらいのものだらう。で
も、怒るよりも先に口もとが緩んでしまう。

藤間くんが何を調べているのか気になり、わたしも食堂ではなく

図書室へと足を向けた。

図書室へ入つて見回してみれば、彼は一般資料の書架ではなく参考図書のコーナーの大型本架のところにいた。

大型本架は百科事典のような大きくて重い本を収める書架で、高さは1メートル強。上下に2段しかない。このように低く作られているのは重い本を高い場所から取り出す危険の回避と、閲覧席まで持つていかなくともその場で読めるようにするため。よいものになると天板の部分に角度がついていて閲覧台になつている。というのは彼からの受け売りだ。

藤間くんは大型本架を正しくその通りの使い方をしていた。どうやら百科事典を見ているらしかった。

「何を調べてるの？」

横から声をかけると、彼は事典に目を落としたままわずかに意識だけをこちらに向け、答えた。

「ケツヘル番号。さつき読んでいた本にそういう単語があつたんだ。本筋に関係ないものだから説明もなくさりと流されていてね。気になつたんだ」

「ケツヘル番号？ それなら

幸いわたしはそれを知っていたのでおしえてあげようとしたが、彼はそれを手で制した。

「いい。自分で調べる」

「そう

それなら邪魔はしないでおこう。

ふと見れば脇には使い込まれたふうのメモ帳が置いてあって、そこには『ケツヘル番号とは何か？』と書かれていた。
「せつからくだから問題を追加してあげましょつか？

「うん？」

藤間くんがよつやく顔を上げた。端整でちょっと薄情そうな相貌がこちらを向く。

「ケツヘル番号K・525が指しているものは何でしょう？」

「……」

彼の目がわずかに知的好奇心に光り、
「わかった。それも調べてみよつ」

そう言つと先ほどのメモに一文を書き加えた。『また、K・52
5は何を指すか?』。どうやら調べる問題は単語ではなく文章で表
すことにしているらしい。

藤間くんは再び百科事典に目を戻した。

その目と横顔は真剣そのもので、なかなかヤラレてしまいそうな
感じだった。

「世界大百科事典に『ケツヘル番号』の項目はなし。ただし『ケツ
ヘル』の項目がある。ルートヴィヒ・フォン・ケツヘル……『くケ
ツヘル番号』で名を残したモーツアルト研究家』、か」

そこで一旦、調べた資料の名前やわかつたことをメモにまとめ、
百科事典を書架に戻した。

大型本架を離れ、次へ向かう。わたしも後をついていこうとする
と、彼は不満そうにこちらを見た。「ついてくるのか」と言いたげ
な目。

「おかまいなく」

「……あなたがそばにいて平氣な、そんな豪胆なやつがいたら見て
みたいね」

と、踵を返して向かつた先は、同じく参考図書のコーナーの芸術
分野の書架だつた。まずは『音楽用語事典』を手に取つてページを
めぐり、先ほどと同じように資料の名前とわかつたことをメモ。次
に『モーツアルト全作品事典』を取り出して、またも調査結果を書
き留めた。

そうして藤間くんは改めてわたしに向き直る。

「K・525は、アイネ・クライネ・ナハトムジーク」

「ええ、その通りよ。正解」

よくできました。

ケツヘル番号は、モーツアルト研究家のルートヴィヒ・フォン・

ケッヘルが、膨大な量のモーツアルトの作品を時系列的に整理して、付与した番号のこと。K・XやKV・Xで表される。その中でK・525は、あの有名なアイネ・クライネ・ナハトムジークに振られた番号だ。

「（）瓊美は何がいい？ テートにでも行く？」

「……それはいったい何の罰ゲームだ」

「失礼ね」

さすがにこれには頬を膨らませる。

と、そこで藤間くんは何やら迷う様子を見せてから、

「僕はこれから学食に行くけど、どうする？」

「……」

わたしは思わずため息。

一緒に行くに決まってるでしょ。もつと素直に誘いなさい、天邪

鬼さん。

「さつきみたいなことよくするの？」

ピークを過ぎた学生食堂で、わたしたちは向かい合って昼食をとる。わたしはいつも通りお弁当を、藤間くんは今日はカツカレーだった。

「まあね。昔からわからぬことがあると自分で調べないと気がすまない質なんだ」

道理で調べ慣れていると思つた。

「特に百科事典は知識の宝庫さ」

後になつてわたしは、彼の寝室で扉つきの書架に収められた日本大百科全書と世界大百科事典を見つけている。少し乱雑に並んでいる様が、よくそれを使つていることを示しているようだつた。

「百科事典は革命だつて起こすよ」

「どういうこと？ 興味があるわ」

百科事典が革命を起こす？

「じゃあ、かいつまんで話そうか

そう言つと藤間くんはカレーと一緒にトレイに乗つっていた水を飲んだ。わたしも食べる手を休める。

「」との発端は1746年、先に完成していたイギリスの百科事典に触発されるかたちで、フランスの出版業者ル・ブルトンが思想家で作家のディドロにフランス百科全書の作成を依頼したんだ。編集・編纂にあたつて執筆者の対立や当局からの出版弾圧があつたが、その辺りは端折るとして 完成した百科全書は1751年から20年以上もかけて順次刊行されていった。書式は、今では珍しい大項目主義。各項目にはヴォルテールやモンテスキュー、ルソーといった、僕たちもよく知る思想家も寄稿している。知の集成を目指したそれには当時の最先端の科学技術や絶対王政以外の政治形態、キリスト教以外の宗教についても触れられていた。つまり百科全書というのはある種の学術雑誌でもあり、啓蒙書でもあったわけだ。そして、1789年

「フランス革命ね」

「そう。ルソーら思想家が説いた社会契約論に影響を受けた知識人や、それに共感した市民により革命が勃発する。かくして王政と旧体制は倒され、フランスに民主主義の土台が築かれることとなつた。この革命に発行部数4250部の百科全書が少なからず貢献していると考えるのは、それほどむりがある話でもないと僕は思うね」「それで”百科事典が革命を起こす”なのね？」

「そういうこと」

そう話を締めくくると、藤間くんは食事を再開した。

こんなふうに時折さらりと見せる彼の教養に、わたしは大きな魅力を感じる。周りにはいないタイプだ。

不意に彼の動きが鈍くなり 顔を上げた。何やら複雑な表情をしている。

「そうじつと見られると食べにくいんだが」

「あ、ごめんなさい」

気がついたらわたしは彼を見つめていた。

「何か言いたいことがあるならほつとつ言ってくれ」

「素敵、抱いて」

「断る」

相変わらずの即答。

「あのね藤間くん、少しは考えましょつね。といつか、この場合飛
びつくべきじやないかしら?」

「考える? 何を?」

彼はわざとらしく驚き、いちいち言葉を区切る。

「あなただけアルカンの名前くらい考えずに暗唱できるだりつ?
「メタン、エタン、プロパン、ブタン……。ええ、確かにそうね。
そう。わたしの女の子としての価値は、それくらい考える必要がな
いということなのね」

わたしはにっこり笑い、彼も不敵な笑みでそれを受けた。

ちょうど近くを通りかかった生徒が、見つめ合って笑うわたした
ちを一度見した後、これを見なかつたことにして早足で遠ざかつて
いった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7930q/>

その女、小悪魔につき。

2011年10月7日11時55分発行